

第1表 堀城・滝ノ屋谷城・桜尾城・森迫城跡周辺小字名一覧表

No	小字名	No	小字名	No	小字名	No	小字名
1	高野田	46	上橋詰	91	イモジ田	136	上田屋
2	桑ノ木谷	47	山崎	92	市頭川端	137	山本屋
3	桑ノ木谷	48	松モリ	93	家ノ後	138	町辻
4	大道	49	瓢タソ田	94	下酒屋	139	岡田屋家ノ後
5	田中田	50	松モリ	95	町尻	140	津田屋
6	善福寺田	51	大元下モ	96	玉屋	141	岩ヶ道出より町頭マデ
7	代ノ田	52	尾シリ	97	下沢屋	142	大朝屋
8	坪田下タ	53	中村名	98	沢屋	143	市頭
9	神田中ノ切	54	瓢タソ田	99	筆屋	144	田頭
10	中ノ切	55	溝ノ上	100	角屋	145	松竹屋
11	森迫橋ヨリ田中田マデ	56	家ノ元	101	今崎屋	146	松竹屋瀬戸
12	山根出合	57	中村名	102	永田屋	147	松竹屋上ミ
13	神田	58	山崎	103	サナヤ	148	堂ノ前
14	森迫橋上ミ	59	上橋詰	104	くさ津屋	149	袋尻
15	大木ノ元	60	尾シリ	105	吉屋	150	善福寺名
16	大木ノ元	61	畠田	106	鎌田屋	151	堀ノ前
17	鳥居ノ元	62	橋	107	沢屋	152	西通り
18	沖田	63	大元	108	桶升屋	153	堀ノ前
19	佐吉	64	免鼻	109	森田屋	154	堀溝ノ上エ
20	畠田	65	大元	110	古森田屋	155	家ノ前沖
21	畠田	66	家ノ瀬戸	111	飯田屋	156	口屋沖
22	石原田	67	大元下モ	112	中村屋	157	西通り下モ
23	フケ	68	大元	113	浄泉寺境内	158	西通り
24	トウトウビラ	69	大元下モ	114	岡本屋	159	鬼見ノ沖
25	立町	70	大元畠	115	札場	160	家ノ前
26	栗ノ木坪	71	津和ノヤ	116	池ノ根	161	午王川良大尻
27	尾尻	72	八日市	117	木屋	162	流田
28	家の沖(モンゼン)	73	土床	118	本宅	163	フケ
29	畠田	74	大元	119	田屋	164	中ノ切り
30	中ノ原	75	大前下モ左右田	120	今浜屋	165	河原田
31	梁ケ内	76	左右田派	121	中野屋	166	フケ
32	松原小田	77	大前下モ	122	中屋	167	鍛治屋沖
33	溝ノ上	78	八日市	123	木田屋	168	觀音下モ
34	喜左衛門田	79	大前	124	菊屋	169	觀音下モ
35	戻田	80	大明神	125	出羽屋	170	梅蔵屋
36	喜左衛門田	81	檢査派	126	大和屋	171	川瀬
37	戻田	82	大明神下モ	127	石本屋	172	梅藏屋
38	クロノモト	83	八日市	128	島屋	173	川瀬上エ
39	大ノ田	84	本山屋	129	米屋	174	天井
40	トウトウビラ	85	落井	130	来屋	175	家ノ後
41	塚ノ元	86	或面	131	幾多屋	176	竹岡
42	グロノ本	87	或面	132	木田屋	177	追田
43	三ツ町	88	今浜屋	133	米屋	178	神田平山
44	柴地ケ内	89	早稻田	134	山端屋	179	仁右衛門ヶ谷
45	下モ橋詰	90	或面	135	大吉屋	180	追田上エ

No	小字名	No	小字名	No	小字名	No	小字名
181	家ノ瀬戸	225	廣迫リ	269	長ソ子	313	森迫奥
182	仁右衛門ヶ谷	226	廣迫	270	燒山	314	森迫
183	口屋上ミニ尾	227	カクレヶ谷	271	觀音平下タ	315	森迫奥右平
184	免見	228	又リ岩頭	272	觀音平	316	森迫
185	免見藏ノ後	229	長曾根東平	273	長曾根	317	家ノヒエドモ
186	リ屋	230	長曾根	274	石ヶ休	318	家ノ騎
187	ホリ	231	長曾根東平	275	專正寺	319	妻屋下モ
188	家ノ前	232	小丸子	276	觀音平下タ	320	森迫表屋
189	堀田原	233	長曾根	277	長ソ子	321	森迫追
190	堀田原家ノ下モ	234	岩ヶ迫	278	ツベ立	322	スワノフロ
191	堀山崎	235	エボシ岩	279	ナメラ渡セ	323	向井屋
192	堀下モ山ノ根	236	又リ岩	280	長ソ子	324	森迫
193	岩ヶ迫出口	237	黒岩	281	ナメラ	325	森迫奥右平
194	堀山	238	大半	282	長ソ子	326	森迫瀬戸
195	岩ヶ迫出合	239	悪谷	283	長ソ下	327	森迫
196	岩ヶ迫出口	240	岩ヶ迫南半	284	長曾根	328	森迫門田
197	垣ノ内	241	小丸子西平	285	小丸子	329	森迫
198	岩ヶ迫	242	喜六谷	286	ヨカラ谷	330	山田屋
199	岩ヶ迫人焼場	243	喜六谷	287	寺ノ奥	331	善福寺
200	岩ヶ迫坂田屋	244	岩ヶ迫鎌田屋煙	288	寺ノ奥	332	山城屋
201	岩ヶ迫本谷	245	砂ハシリ	289	寺ノ奥頭	333	西ノ上
202	岩ヶ迫坂田尾	246	小谷東平	290	吉永屋	334	西ノ上
203	岩ヶ迫本道バタ	247	大阪嵐	291	来昌寺後	335	西
204	長ソ子	248	小谷	292	寺床	336	山根
205	岩ヶ迫奥原	249	小谷	293	来昌寺	337	山根田
206	岩ヶ迫上原	250	小谷西平	294	土床	338	家ノ前
207	岩ヶ迫奥	251	小谷岩ヶ迫奥原	295	杉ヶ谷東平	339	西ノ谷出口
208	土堀場下モ	252	上床沖	296	杉ヶ谷西平	340	山手上ミ
209	提曾根下	253	市頭	297	杉ヶ谷	341	山手瀬戸
210	坊主ヶ墓	254	土床	298	杉ヶ谷東平	342	山手空
211	坊主ヶ基	255	瀧ノ屋谷東平	299	大元奥	343	角田瀬戸
212	岩ヶ迫奥	256	瀧ノ屋谷	300	トハナ	344	奥田屋上
213	悪谷	257	カズラガ谷	301	山崎	345	奥田屋上ミ
214	長ソ子	258	寺ノ奥	302	戸鼻上ミ	346	奥田屋奥
215	大ハゲラ	259	上晶ケ	303	戸鼻	347	山手上ミ
216	長ソ子	260	ナメラ	304	蒸音寺	348	西ノ谷
217	長ソ子	261	寺ノ奥	305	同道	349	山手上ミ
218	小丸子	262	杉ヶ谷	306	鉄穴打	350	西ノ上
219	長ソ子	263	焼山川口	307	森迫奥左平	351	山根瀬戸
220	長曾根東平	264	長ソ子	308	森迫奥山田	352	家ノヒエ
221	釣所	265	焼山左平	309	森迫	353	西ノ七
222	大野	266	焼山下タ	310	森迫奥左平	354	家ノ空
223	登見山	267	焼山	311	森迫奥	355	スワノフロ
224	遠見山	268	焼山左平	312	森迫奥右平	356	森迫奥

## 第Ⅲ章 桜尾城跡

### 1. 調査の概要

<sup>さくおじゆ</sup> 桜尾城跡は島根県邑智郡瑞穂町大字市木宇寺ノ奥6712・那賀郡旭町大字市木宇森迫奥山田6743他に所在する。丸瀬川（標高1,021m）から北に派生する丘陵の先端部にあり、邑智郡瑞穂町と那賀郡旭町の町境の丘陵上に築かれている（図版103）。

南東に猪子山、北に八戸川をのぞむ場所で、ちょうど市木の町並みの中央部にある高城山淨泉寺の裏山に位置する。城跡からは東・北・西の三方に見晴らしがよく、東は国境の三坂峠、北には石見町へ通ずる松尾峠を見ることができる。城跡頂上部（主郭）の標高は約420mで付近の集落から主郭平坦面までの比高差は約150mを測る（第1図、図版120～122）。

地元では「高城」と呼ばれている城で、『日本城郭体系』においても「高城」と記述されているが、昭和56年度に島根県教育委員会が中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内で行った分布調査以来「桜尾城」と呼称している。<sup>(1)</sup>

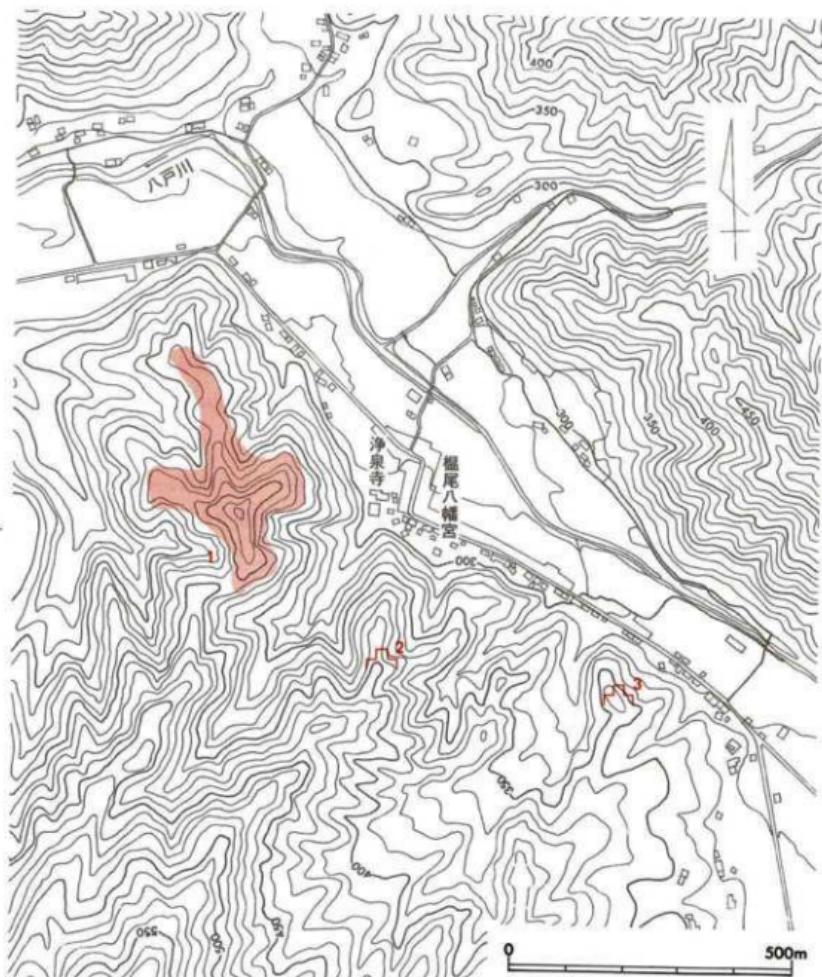
桜尾城跡は、地形の観察から便宜上、丘陵頂部の最も広い平坦部を主郭と仮称し、その南側隣接地の平坦部を南1郭、北東に延びる丘陵尾根上に見られる平坦部を東1郭、東2郭、北西に派生した丘陵上にある平坦部を西1郭、北方のやや離れた支丘上に位置する平坦部を北1、北2郭と呼んでいる（第2図）。

このうち今回、中国横断道建設に伴って調査対象となった区域は東1・2郭、北1郭の3地点である（第2図）。東1郭をI区、東2郭をII区、北1郭をIII区と呼称することとして調査を行った。調査期間は平成元（1989）年10月19日から同年12月18日までである。

### 2. I区（東1郭）の調査

調査区は、主郭から北東方向に延びる尾根上にあたり、眼下に市木の集落や、旧街道を見下ろす見晴らしの良い場所で、標高約410mを測る。地番は瑞穂町大字市木宇寺ノ奥6712・杉ヶ谷東平6720-1他である。この尾根の先端部には調査時にはTV受信アンテナが設置されていた。

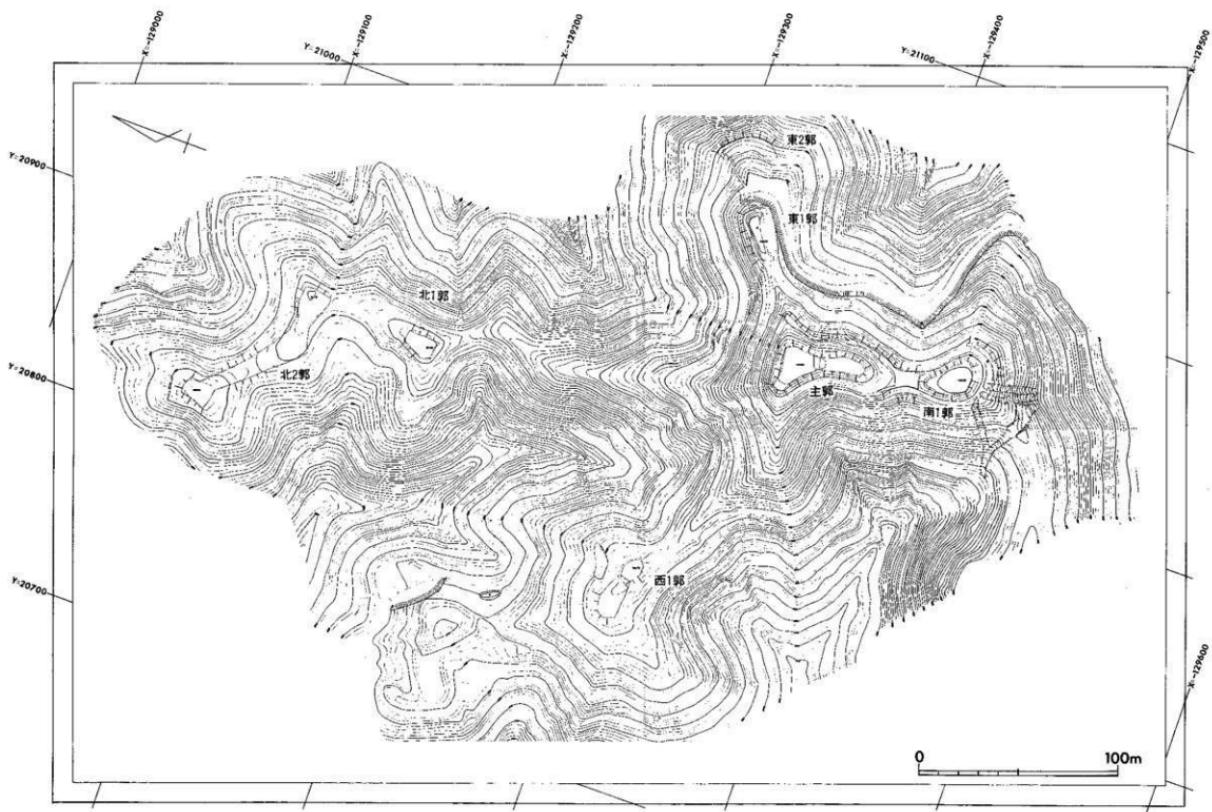
発掘調査前の表面観察では尾根上に長さ20m、幅2～4.5mの平坦部が見られ、その平坦部から2mばかり降りた丘陵斜面では、東側から北側斜面にかけて幅約0.5～1mの通路状の平坦面が認められた。また、尾根平坦部の南西端には、わずかにがら落ち込みがみられ、尾根筋に直交する掘切状の施設と推測された（第3図、図版123-2）。



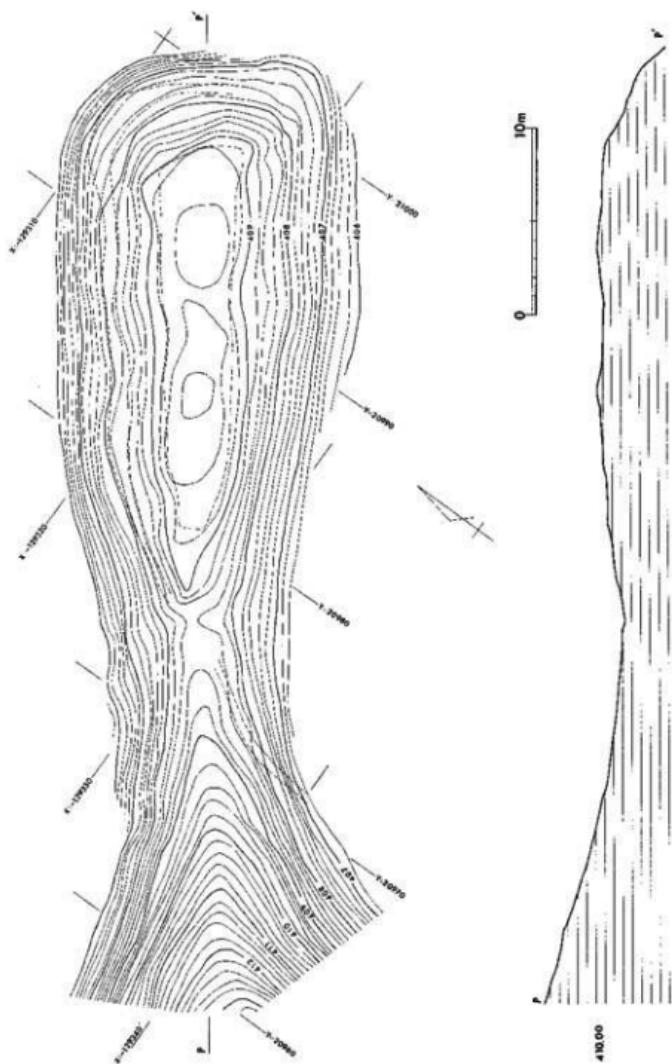
第1図 桜尾城跡の位置(1.桜尾城跡、2.流ノ屋谷城跡、3.堀城跡)

この尾根の北側と南側は45度以上の急傾斜地となっており、特に急峻な地形である。

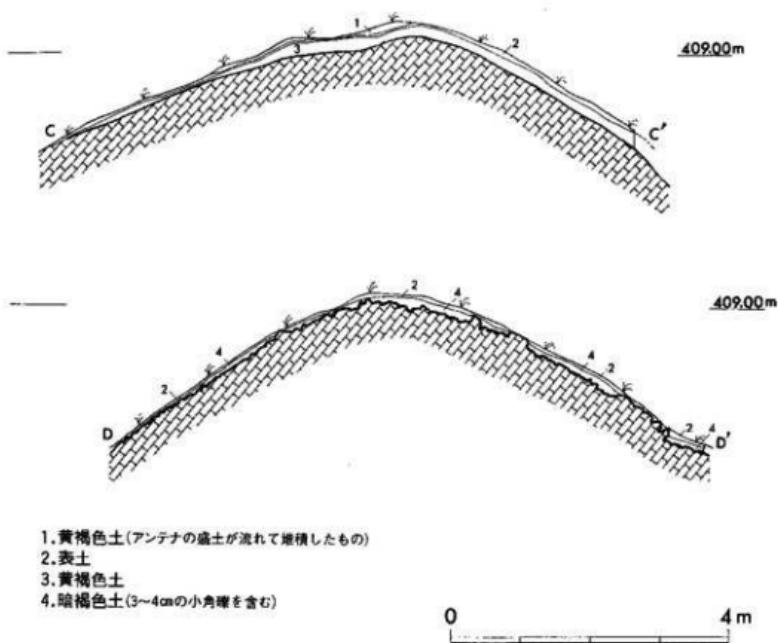
土層の状況 発掘調査の結果、表土下には暗褐色土が10~20cm堆積しており、その直下で3~4cmの小礫を含む黄褐色土を検出した。サブトレンチを設定して黄褐色土の下層を調査したところ、礫



第2図 桜尾城跡調査前地形測量図



### 第3図 I区地形測量図(調査前)



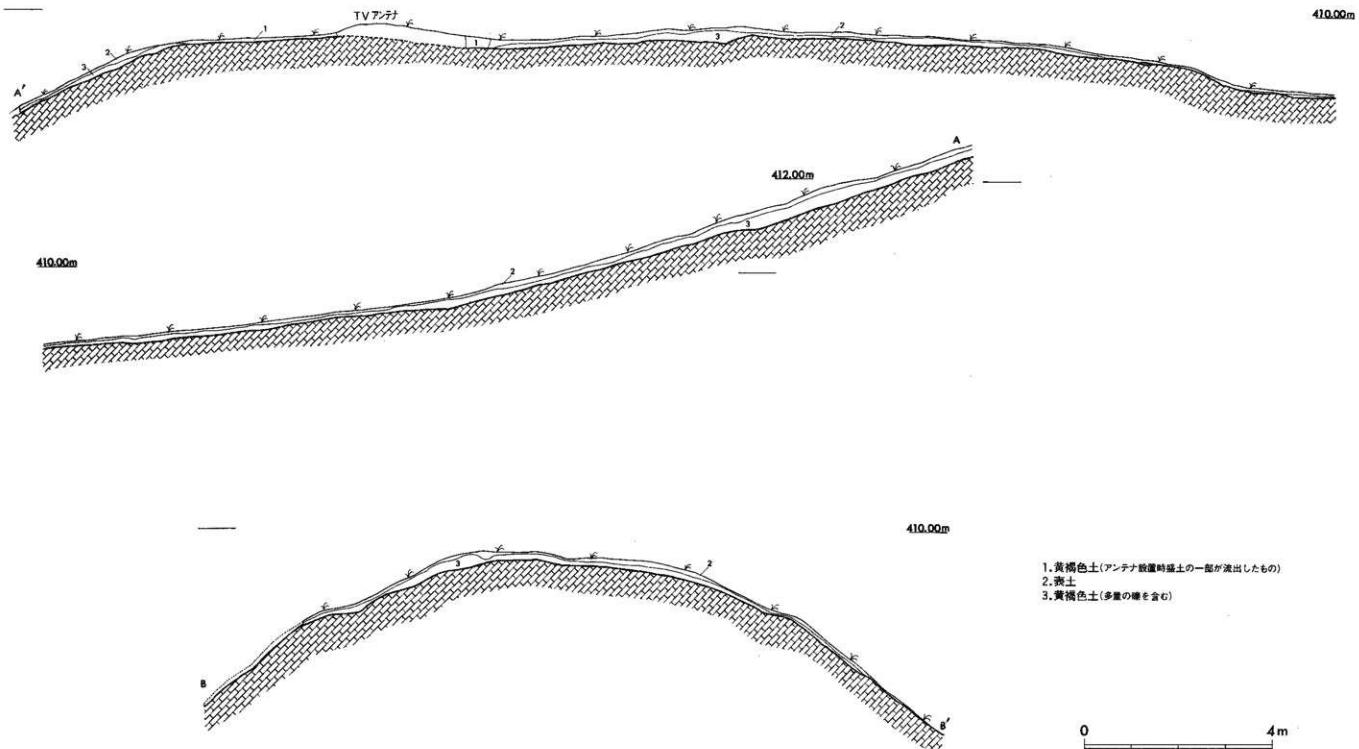
第4図 I区東西方向土層断面図

の大きさが拳大になるものの、依然として黄褐色土が続き、他の土層もみられないことから、前述の黄褐色土が地山であることが判明した(第4・5図)。

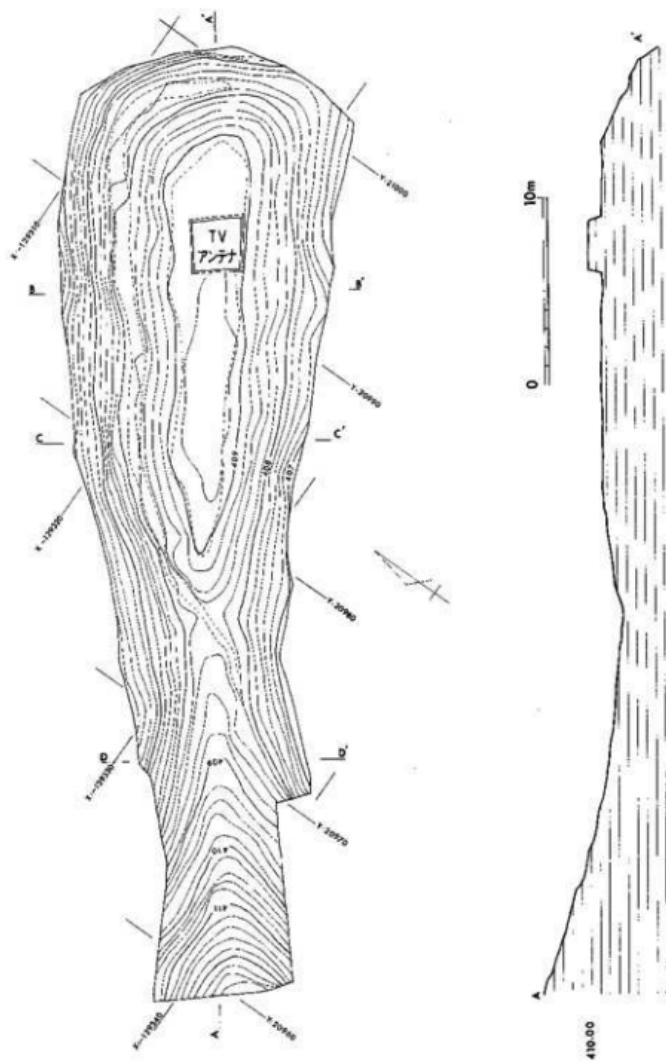
**遺構** 発掘後の尾根上の平坦部は、長さ21m、幅1.5~4mを測るが、きちんとした平坦面として造成されたものではなく、断面形は蒲鉾状にわずかに膨らんでいる。この地点は、最も眺望の良好なところであり、監視施設として、建物等の遺構が存在することも予想されたが、柱穴等の遺構は検出できなかった。ただし、平坦部南端でわずかではあるが、地山を切削加工したと思われる痕跡が認められ、これは長方形状に地山を削りだして築いたものであることが確認された。

なお、表面観察によって確認された通路状の平坦面は、地山を切削して造られたもので、調査区の東端から北側・西側に回り、中程で南側にクロスして主郭へと続くが、途中で十砂により寸断されている。幅は0.5~1.5mあり、確認した総延長は約40mである(図版124-2)。

TV中継アンテナ付近は、当初、アンテナ設置時の土地造成等により、原地形が大幅に改變され



第5図 I区土層断面図



第6図 I区地形測量図(調査後)

ていると思われたが、調査の結果アンテナ支柱の基礎の周囲約2m四方に埋土が観察された他には変化がなく原地形が比較的良好に残っていることが判明した（第6図、図版124-1）。

### 3. II区（東2郭）の調査

I区の東側でTVアンテナ管理用道路の下にある。地番は瑞穂町大字市木字寺ノ奥6712・字人明神6714他である。この平坦面は長さ約35m、幅約2.5~4mを測る細長い通路状を呈している。鎌形に曲がっており、東側と北側に稜線を挟んで分れるので、それぞれ東側テラス、北側テラスと呼称することにした（第7図、図版125）。

#### (1) 北側テラス

**土層の状況** 表土下に暗黄褐色土が20~30cm堆積しており、その下に黄褐色土がある。黄褐色土をさらにサブレンチを設定して掘り下げたところ、拳大の礫を多量に含む黄褐色土が検出され、すぐに岩盤を検出した。この黄褐色土以下の層は、基本的には同一の層と考えられ、上部のものは風化しているものと判断された（第9図、図版126-1）。

**遺構・遺物** 盛土等は認められなかったが、上層の観察により丘陵斜面を切削して、幅1.5~3.5mの平坦部を築いていることが確認された。この地山加工面から山側斜面にかけて、7つの柱穴と思われるビットを確認した。これらのビットは直径20~40cmで深さは深いもので約30cm、浅いもので約10cmを測る。このうち6つは、東西方向に2列に並んで掘立柱建物跡の可能性が考えられる。掘立柱建物跡とすれば規模が2間（2.6m）×1間（1.3m）で、面積は3.38m<sup>2</sup>になる。柱間の寸法は、桁行、梁間ともに1.3mである（第8・10図、図版128）。

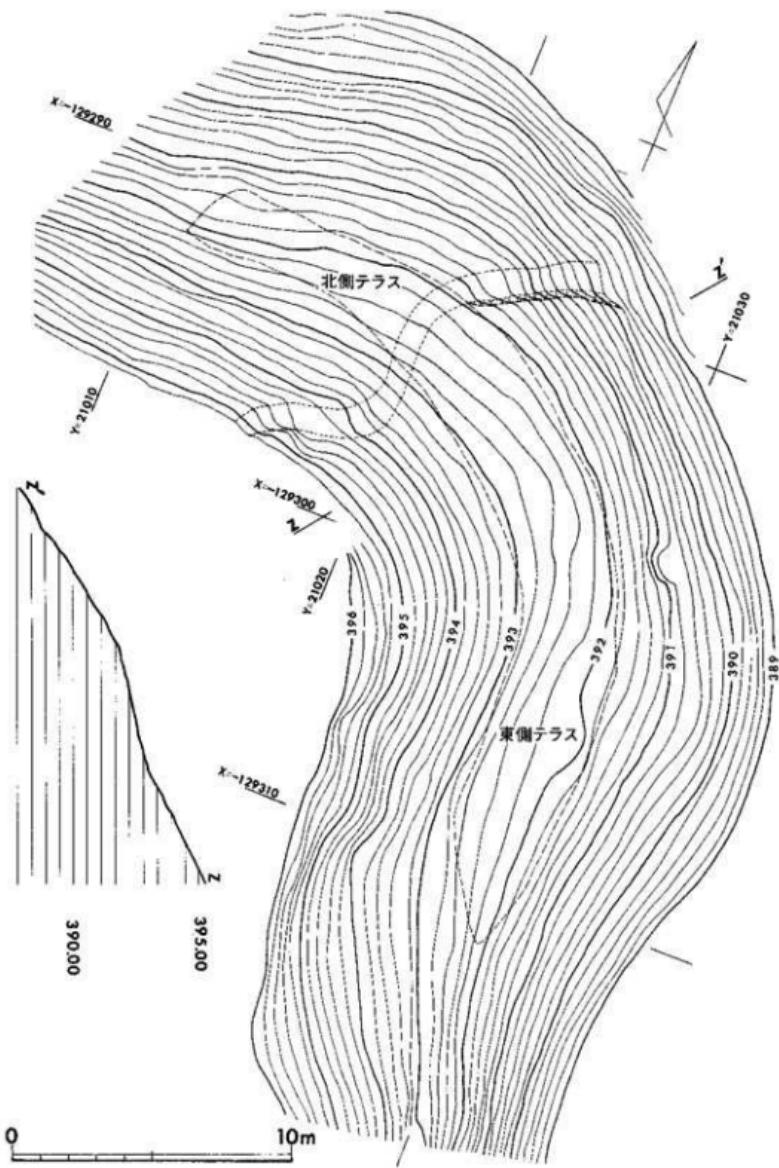
なお、このテラスからは、表土除去作業中に暗黄褐色土中から凝灰岩製とみられる磨製石斧が出土した。残存長約9cm、幅約4.5cmを測り、形態等の特長から縄文時代のものと考えられる（第11図、図版127-2）。

#### (2) 東側テラス

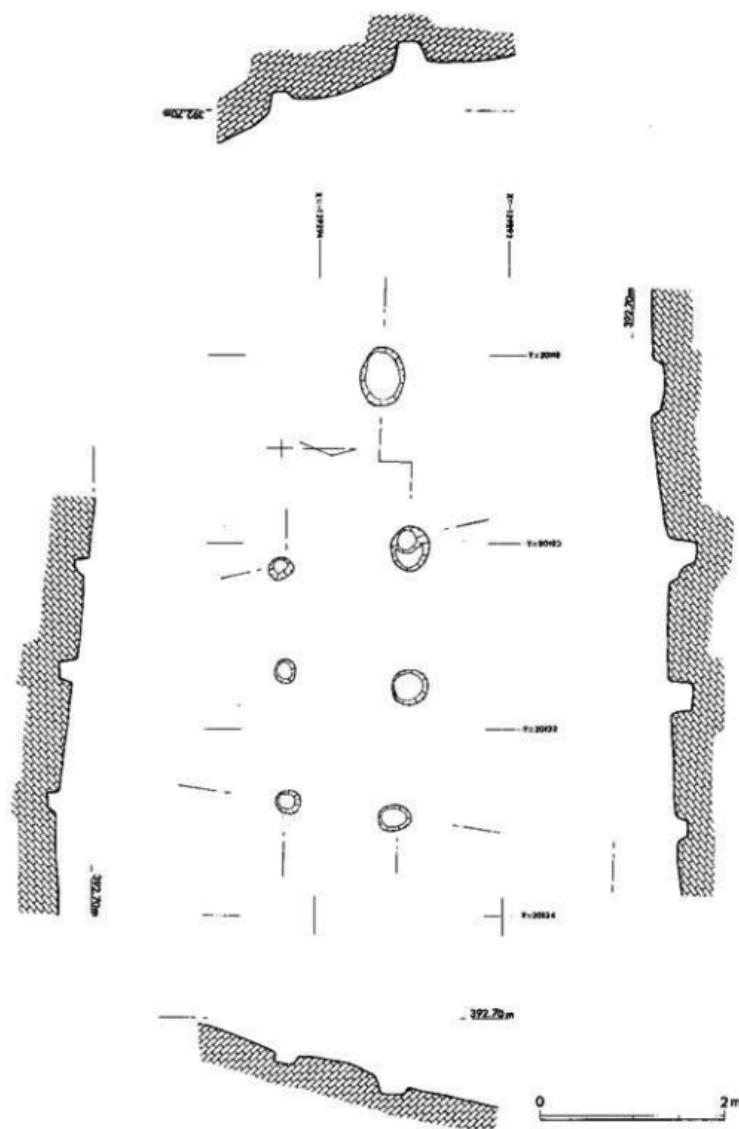
**土層の状況** 北側テラスとはほぼ同じで表土下に暗黄褐色土が20~30cm程度堆積しており、その下に黄褐色土があり、これが地山となる（第9図、図版126-2）。

I区とつながる斜面にTV中継アンテナ管理用道路造成のために掘削した土砂が堆積しており、この部分にもテラスのあることが予想されたので、東1郭（I区）調査区に向けてトレンチを設定して平坦面の有無を確認した。その結果土層の観察から、最深部で約2mの盛土が確認されたが、特に人工的な加工段等は確認できなかった（第9図）。

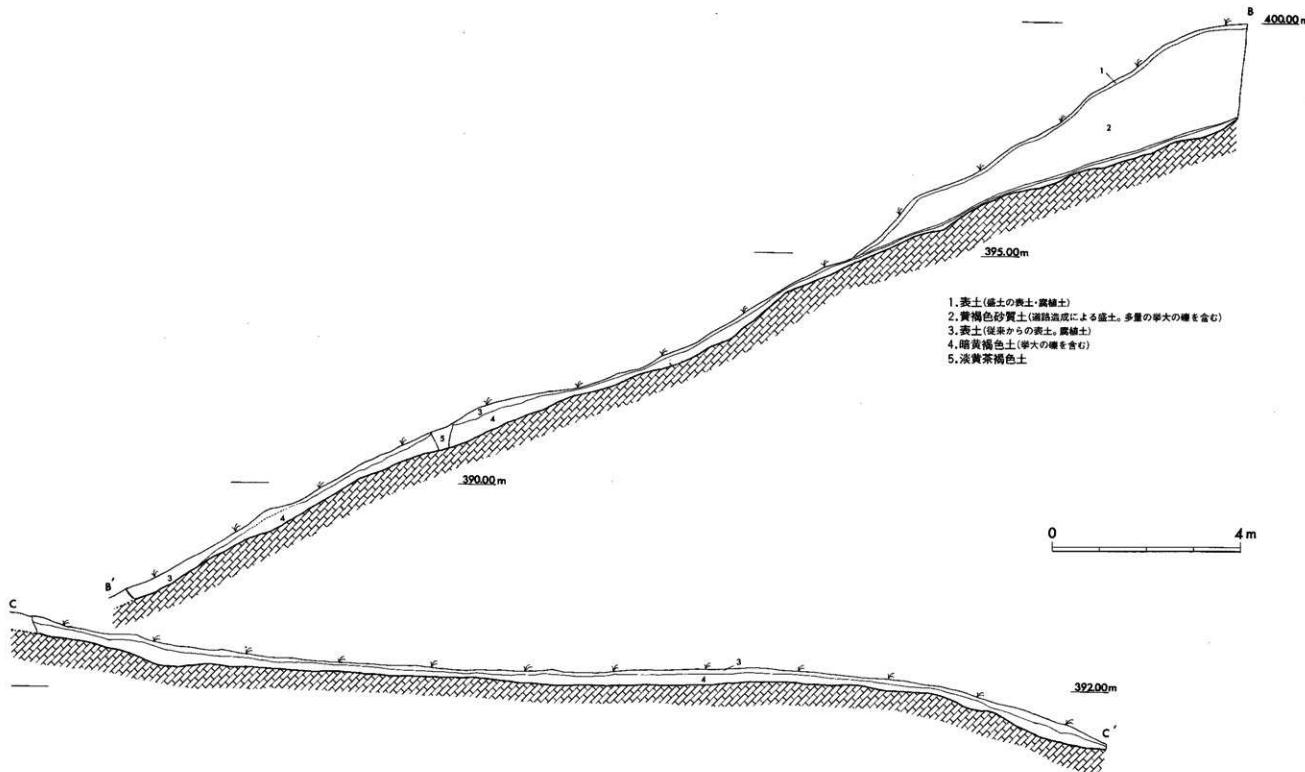
**遺構等** 丘陵の急斜面を切削加工して、幅約4mの平坦部を築いていることが確認された。この平坦部は、地山を加工しただけのものであり、顯著な盛土はみられなかった（第10図、127-1）。



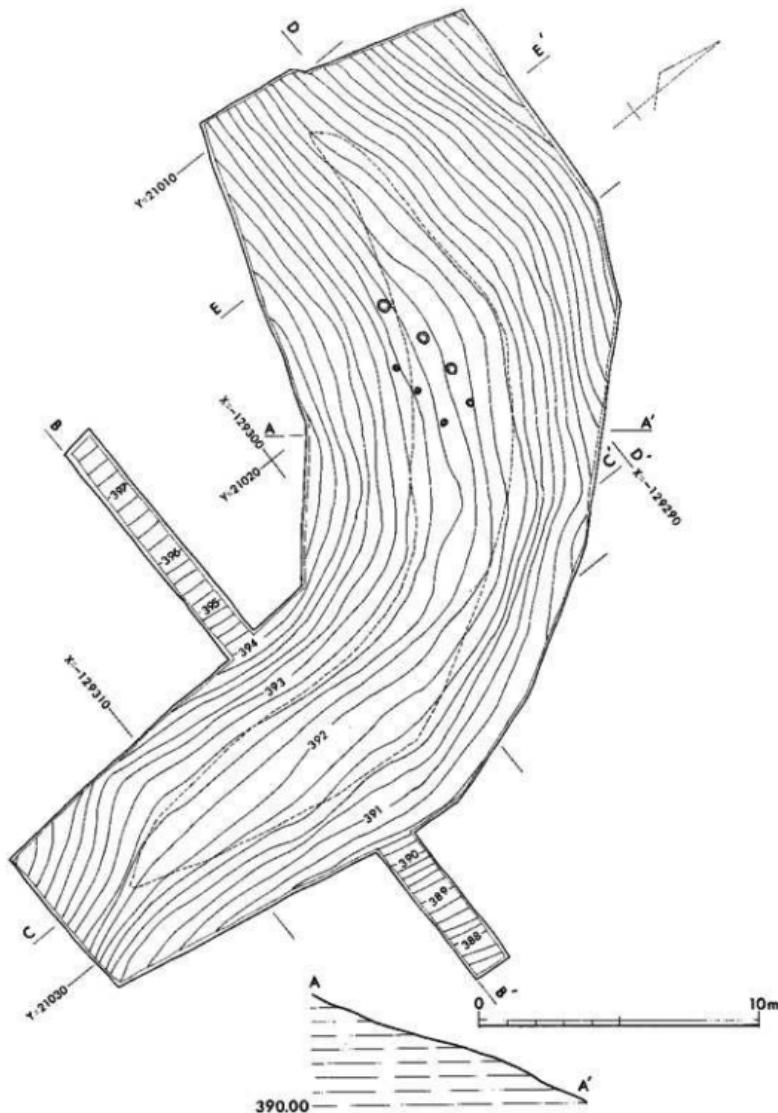
第7図 II区地形測量図(調査前)



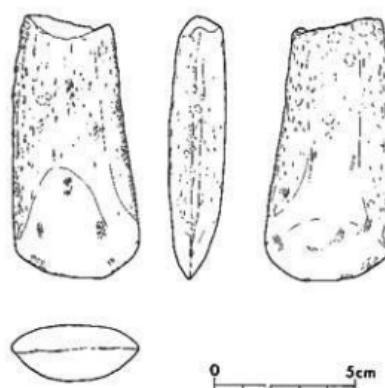
第8図 II区掘立柱建物跡実測図



第9図 II区 土層断面図(東側テラス)



第10図 II区地形測量図（調査後）



第11図 II区出土遺物(石斧)実測図

TV中継アンテナ管理用道路に向けて設定したトレーナーに続く土壠断面にピットを確認したため、その付近を査定したが柱穴等の遺構は検出できなかった。

#### 4. III区(北1郭)の調査

主郭から北西方向に延びるやせ尾根を通じてつながる丘陵上の平坦面である。地番は瑞穂町人字市木本大元奥6723・字山崎6731ほかである。主郭から直線距離にして約180m離れた地点で、標高約370mを測り、主郭より50m程低い(図版129)。

調査前の地形観察では幅約4~7m、長さ約19mのしゃもじ形の平坦面がみられた。なお、このIII区の北側には幅約15m、長さ約90mあまりに及ぶ広い平坦面(北2郭と仮称)がみられる。

**土層の状況** 表土下に暗褐色土が10~20cm程度堆積しており、その下が黄白色土となり、これが地山となる(第12図)。

**遺構等** 調査の結果、丘陵頂部で幅約6m、長さ約10.5mの平坦部が確認された。平坦部は整備されたものではなく、粗雑に築かれたもので、柱穴等の遺構は確認することができなかった(第13図、図版131)。

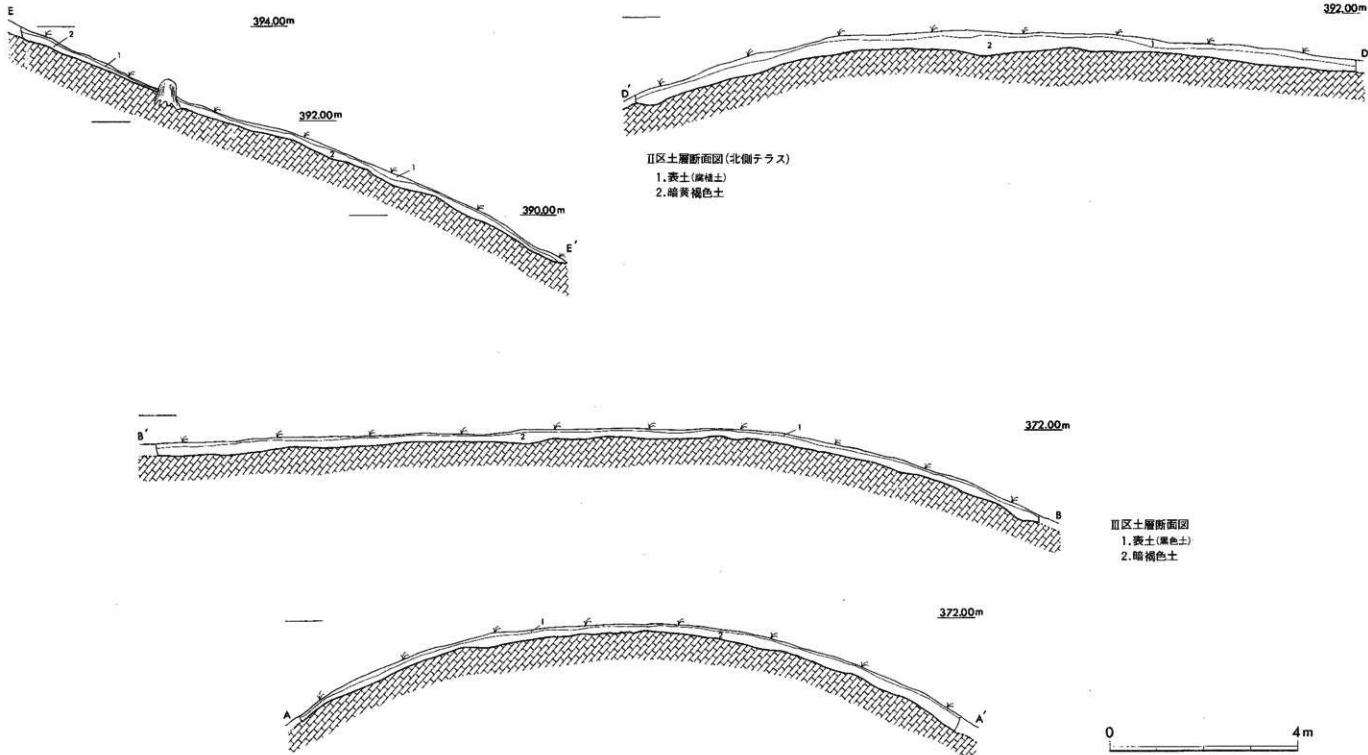
平坦部の西斜面において、3つの土坑状の落ち込みが確認された。このうちの南端に位置するもの(SK01)は、長さ約1.4m、幅約0.7mの横円形を呈する土坑で、深さは約50cmを測る。断面はU字形を呈し土坑内には暗褐色土、黒色土、黒褐色土が認められた。埋土から炭をわずかに検出したのみで、その他の遺物は検出していない(第14図、図版130)。

なお、他の土坑状の落ち込みは、内部にしまりのない柔らかい土が入り込んでおり、後世のものと判断された。

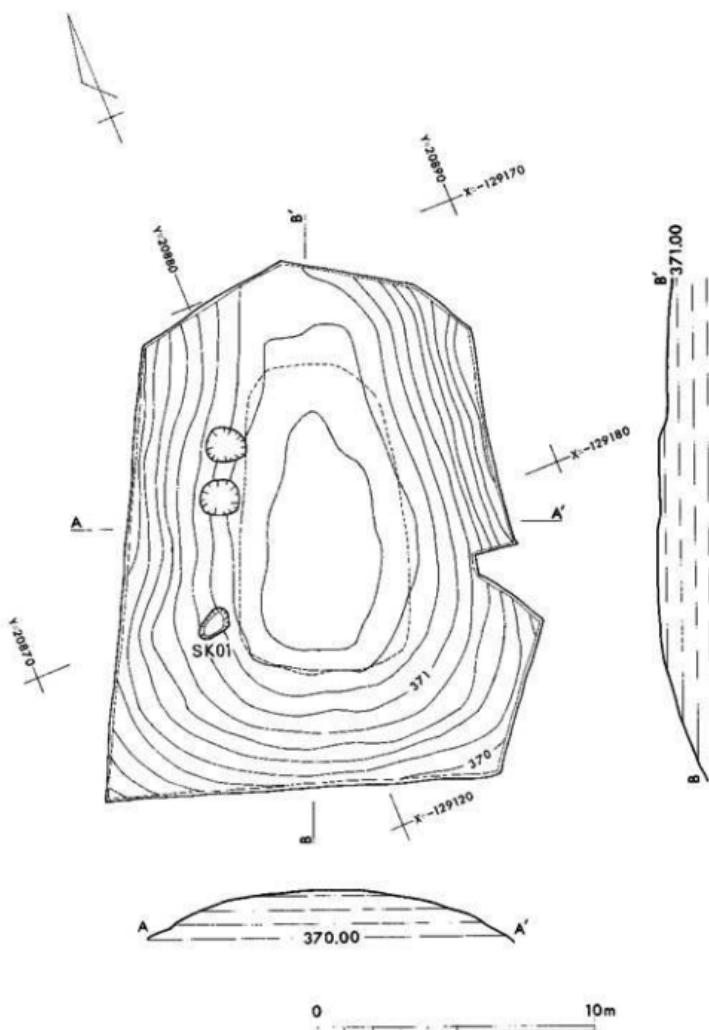
#### 5. 小結

市木地内に所在する城跡に関しては、文献に残されたものがほとんどないため、不明な点が多い。

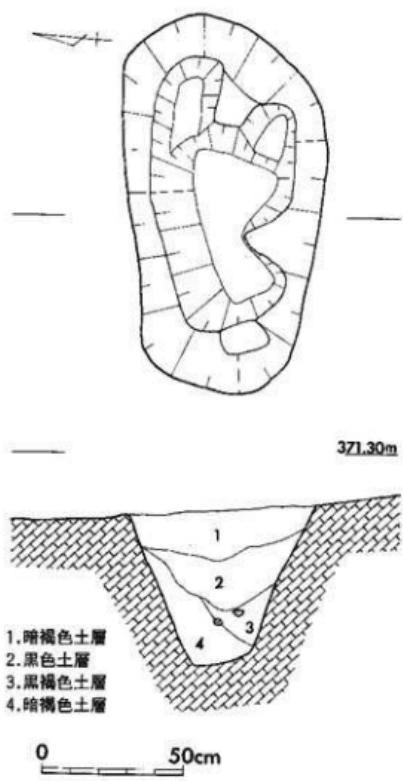
『石見誌』によれば、旧市木村には桜尾城と上居城の記載がある。桜尾城については、城主を因幡入道兼旨とし、「御神本氏、福屋兼廣四世兼行二男因幡守兼宗一攝小太郎重利永録二重利毛利ノ



第12圖 II・III区土層断面図



第13図 III区地形測量図(調査後)



第14図 III区SK01実測図

ことである。こうした技法をもつ城跡は現在のところこの市木地区内では他に知られていない。

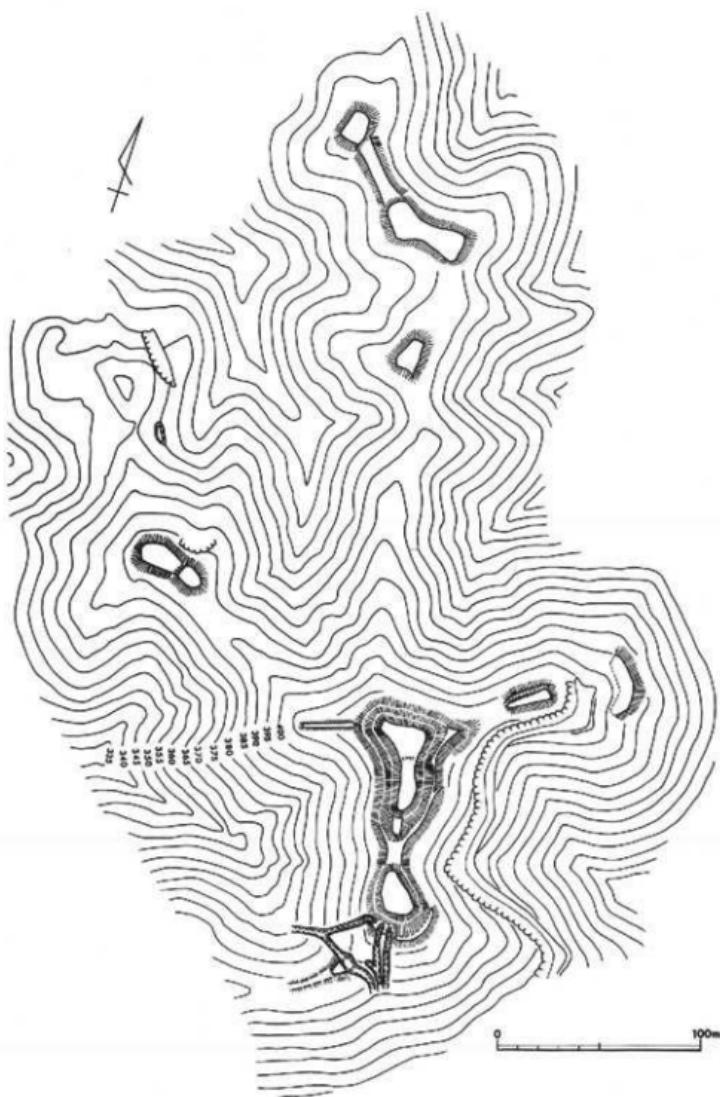
市木の地は古来、別府の置かれていた地域で、福屋氏や周布氏が鎌倉時代以来戦国時代末期まで勢力を維持していたものと推定される。<sup>(4)</sup> この推定が正しいものとすれば、桜尾城は福屋氏や周布氏に關係する城とされよう。市木地内には現在のところ6個所の山城が確認されているが、桜尾城跡は規模が最大で、立地条件も極めて良好な所に位置していることから、この地域における中心的な城であったことが推察される。

為ニ市木三坂ニ敗テレ城中ニ死ス」とされてゐる。ただし『石見誌』に記された「桜尾城」がこの度発掘調査を実施した「桜尾城」にあたるかどうか確証はない。

この度発掘調査を実施した区域は桜尾城跡の中心的な部分からは外れた部分を調査したに過ぎない。従って全貌を知る由もないが、北1郭の存在により、主郭から相当離れた広範な地域にわたって手が加えられていることが確認された。また、東2郭(II区)において、掘立柱建物跡(1×2間)と推定される遺構が検出されたことは注目に値する。この地点は眼下に生家の谷、斐尾の谷、早水方面を一望のもとに見ることのできる眺望のきくところであり、見張り的な役割を果たす施設を設置するのに絶好の場所といえる。城跡に關係する遺物は出土しなかつたので、この度の調査では時期を推定できなかった。

桜尾城跡全体を見ると、丸瀬山から派生する尾根のビーグルを削平し、地形に沿って郭を配置する典型的な山城といえる。この城跡で特に注意されるのは主郭南側尾根続きの内側に堅塀を築き、その先端を堀切の先端と合流させている

(小 笹 基、松 本 岩 雄)



第15図 桜尾城縹張図

註

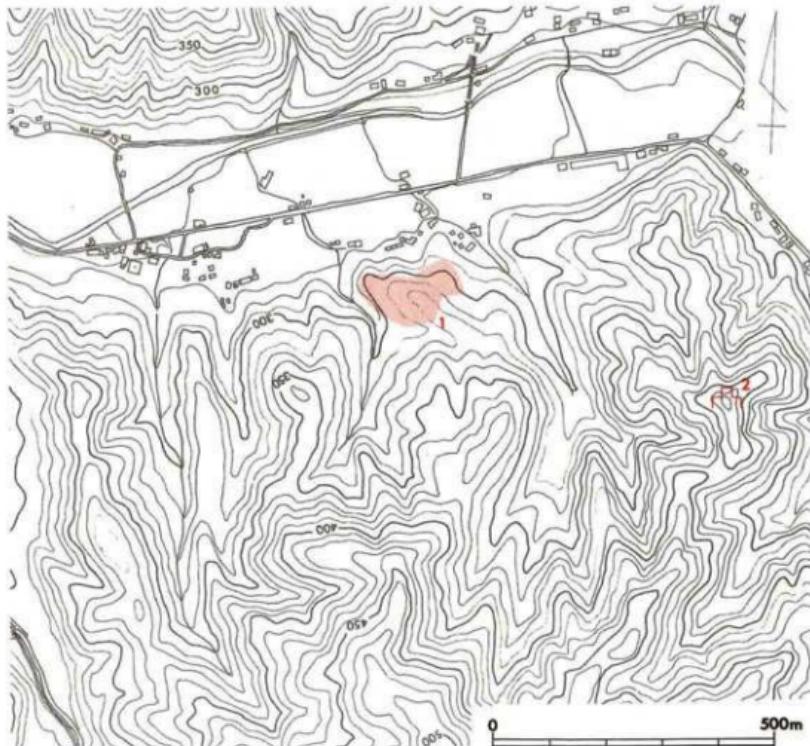
- (1) 監修／児玉幸多・坪井清足『日本城郭大系』第14巻 新人物往来社 1980年
- (2) 島根県教育委員会『中国横断道予定地内遺跡分布調査報告書』1982年
- (3) 天津 竜『石見誌』1925年
- (4) 瑞穂町教育委員会『瑞穂町誌』第3集 1976年

## 第Ⅳ章 森迫城跡

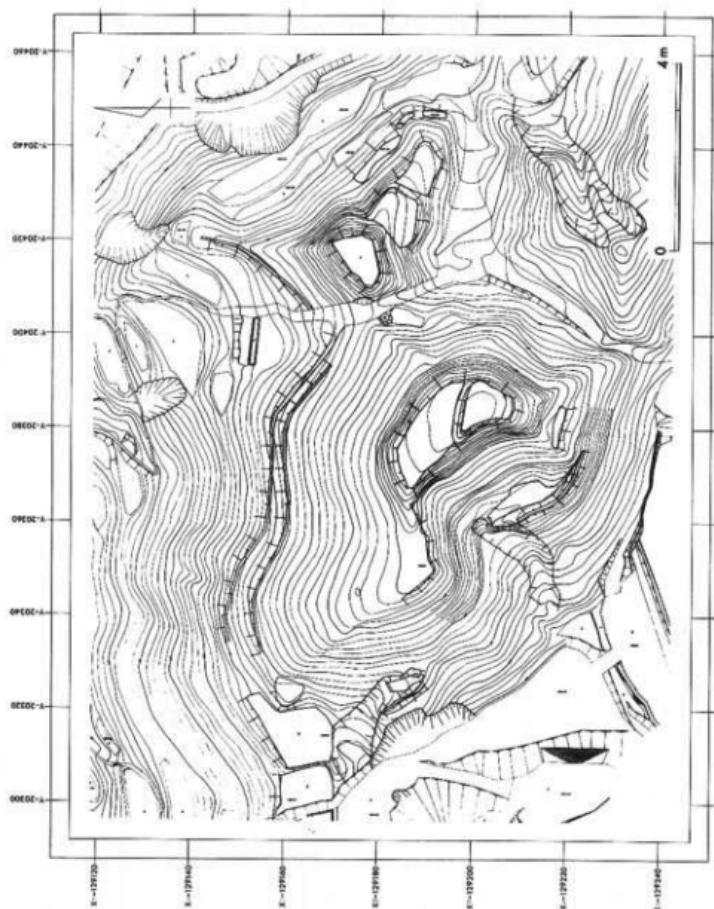
### 1. 調査の概要

森迫城跡は、那賀郡旭町の北東端、邑智郡瑞穂町との境に近い標高335mの丘陵先端と、その斜面に位置している。所在地は、島根県那賀郡旭町大字市木6815-4番地ほかである。江川の支流八戸川の最も上流にあたる市木地区は、三坂峠を挟んで広島県山県郡大朝町と接している。石見国と安芸国との境にあたる市木地区では、八戸川沿いの丘陵に多くの中世山城跡が点在している（第1図、図版132-1）。

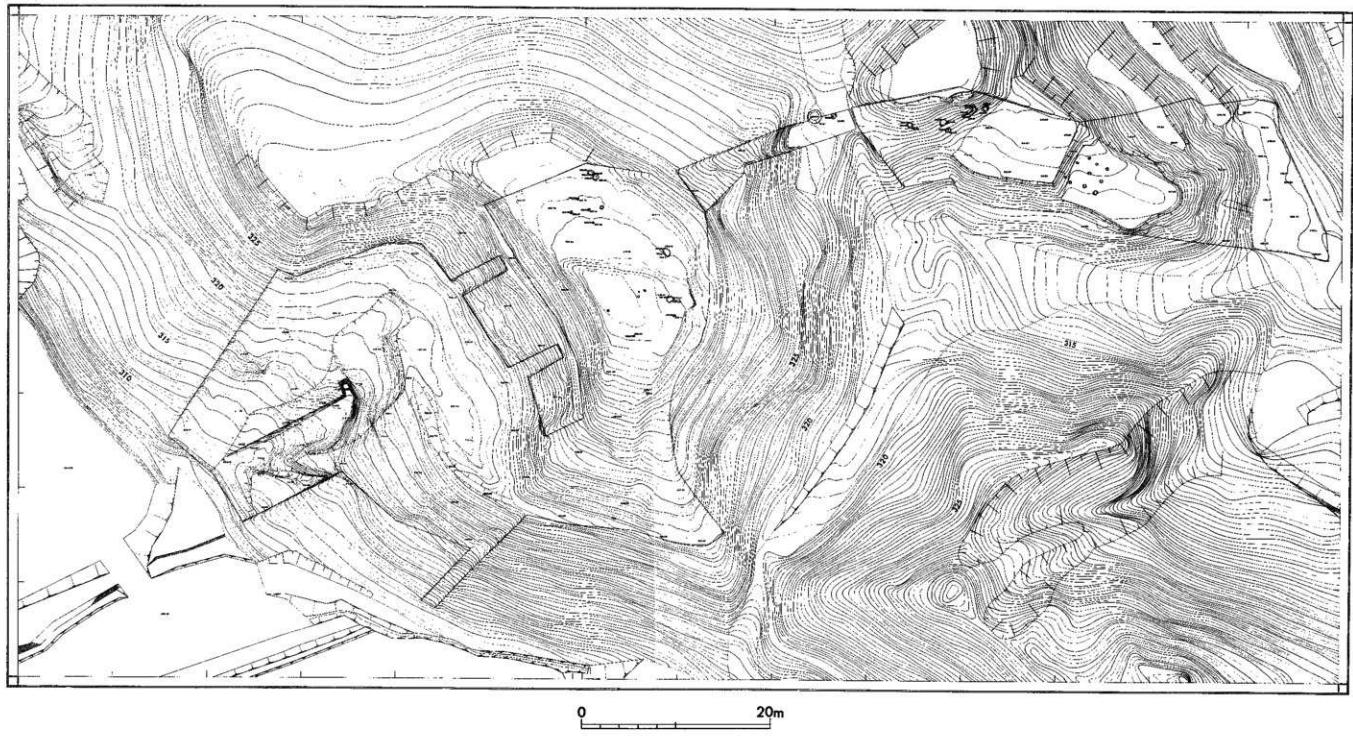
森迫城跡は、現在の瑞穂町市木の集落から北に約1kmの所に位置している。今回調査を行った桜



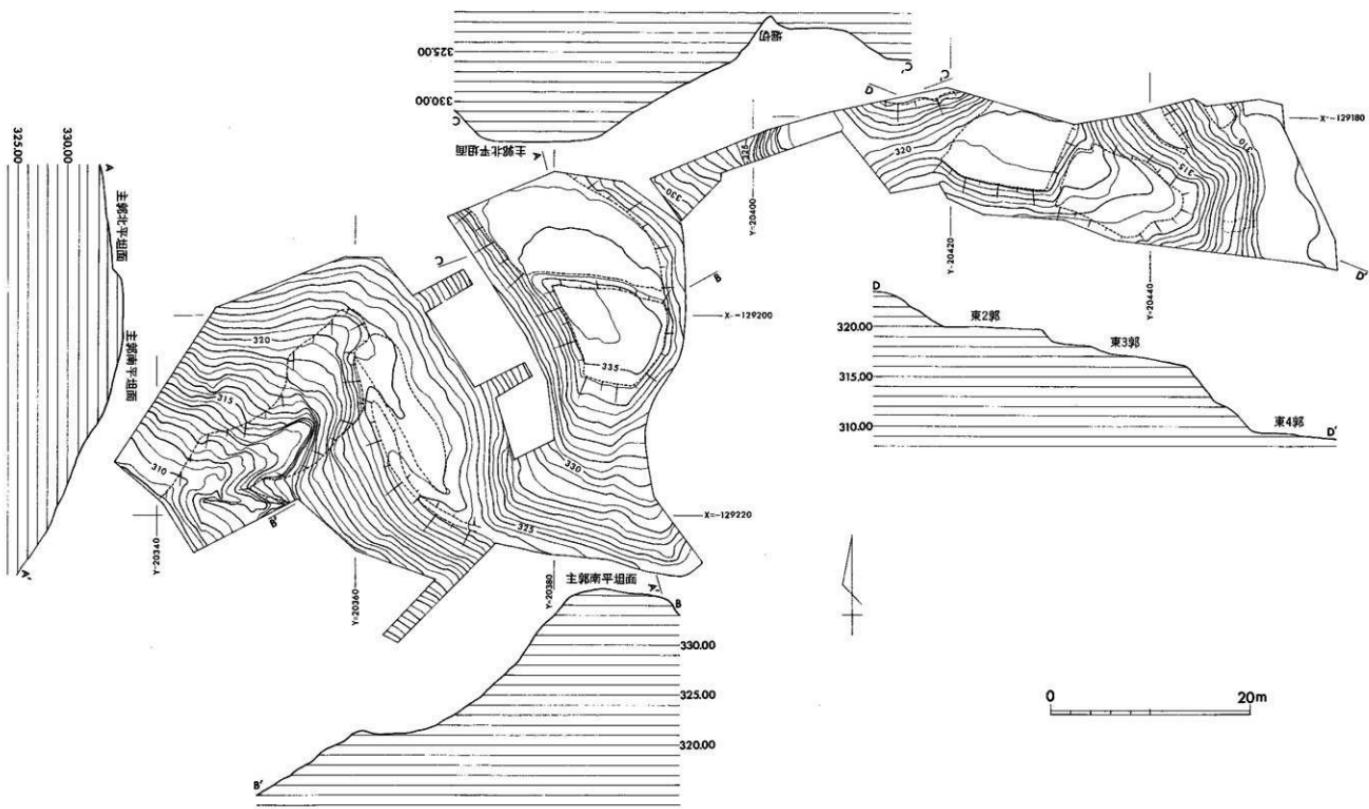
第1図 森迫城跡の位置(1.森迫城跡、2.桜尾城跡)



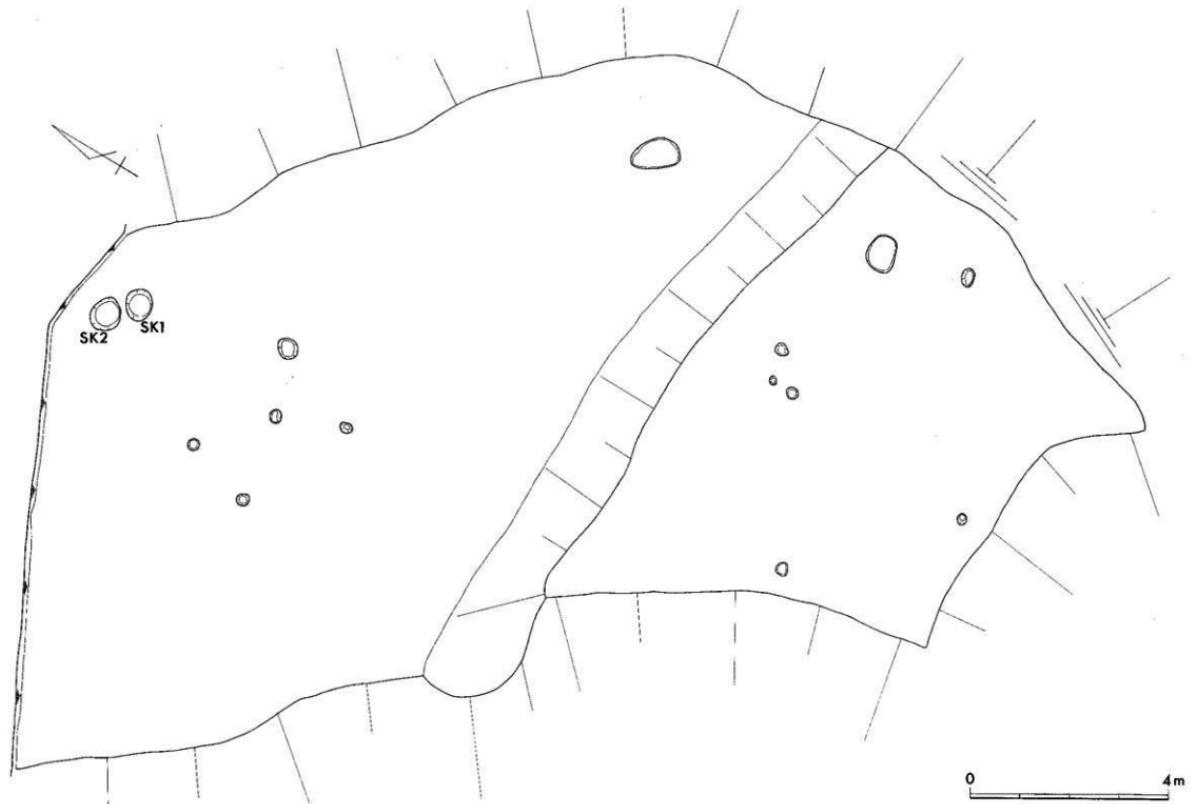
第2図 森泊城跡調査前地形測量図 (1:1,200)



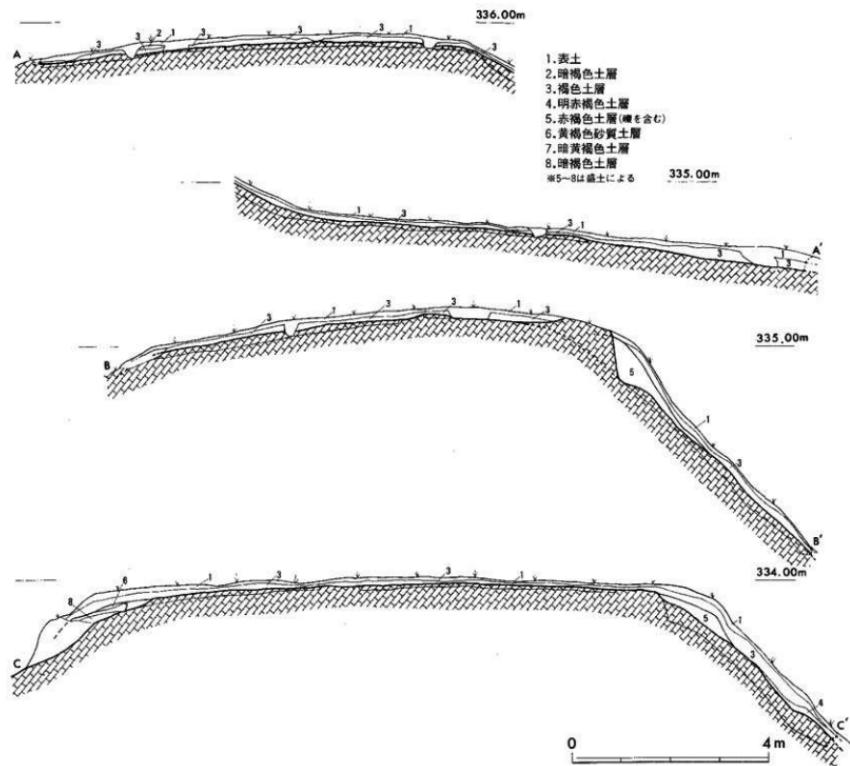
第3図 森迫城跡 地形測量図 (1:400)



第4図 森追城跡断面図



第5図 主郭遺構実測図



第6図 主郭土層断面図

尾城跡・滝ノ屋谷城跡などからは1km程しか離れておらず、森迫城跡の主郭部からは東方に櫻尾城跡を見上げることができる。遺跡は、標高1,021mの丸瀬山から北に広がる山塊の、八戸川に向かって延びた丘陵の先端にあたり、八戸川付近の水田からは約60mの比高差を測る（第2・3図、図版133）。調査前の状況では、比高差約1mの段で区切られた2段の平坦面が最高所にあり、それを挟んで西側に1面、東側に4面の平坦面が見られた。特に西側の平坦面では、斜面下方を土壠状の高まりで区切っているほか、溝状に落ち込む部分もあり、注目された。

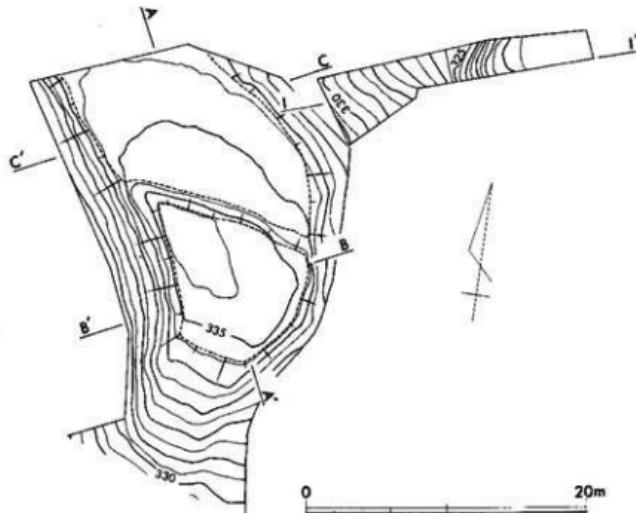
調査区は、工事区域内にかかる總ての平坦面と落ち込みを含むように設定したが、南東斜面は後世の削平を受けているため調査区から除外した。また、西側斜面は急傾斜のため、トレンチによる確認のみとした。調査区の各部分については、標高335mの調査区最高所に位置する2面の平坦面を主郭と呼び、それを中心に西側の加工段を西1郭、東側の4段の加工段を高所に位置するものから順に東1～4郭として調査を進めた（第4図、図版134・135）。調査期間は平成元年9月7日から12月27日までを要した。

## 2. 遺構と遺物

### (I) 主郭（第5図、図版136・137-1）

標高335mの調査区最高所に位置する平坦面で、中央付近の段差によって南北2面の平坦面に分けられている。

南側の平坦面は、南北約10m、東西約6mの不整三角形で、西斜面は急傾斜になっているが、南斜面は調査区南側の尾根に向かって緩やかに延びている。調査時には、既に道によって切られていたが、主郭と調査区南側の尾根筋の間は距離



第7図 主郭土層断面位置図

も短いことから当時は橋等によってつながっていた可能性がある。北側の平坦面は、中央付近の段差により南側の平坦面から約1m低く造られている。南北約10m、東西約14mのほぼ長方形で、北側は、調査区の外まで延びている。調査区外の主郭北端部では、緩やかに傾いた面が、西に向けて延びている。上郭北平坦面の東西の斜面は急傾斜になっている。主郭の2面の平坦面からは、14箇所でピットを検出したが、建物跡と考えられるような並びを確認することはできなかった。また、西側斜面の全面と東側斜面の一部で厚さ1mにも及ぶ盛土を確認した(第6・7図)。主郭部平坦面造成時に山頂部を切り崩し、その土を周囲に盛って、平坦面を確保したようである。

主郭部平坦面の北東隅では、径約60cmの上墳2基(SK1・2)を確認した(図版137-2)。主郭部で見られる他のピットとは異なり、締まりのない褐色の埋土を含んでいる。SK2からは、鉄釘や板状の金属製品が出土したが、土器類は見られなかった。

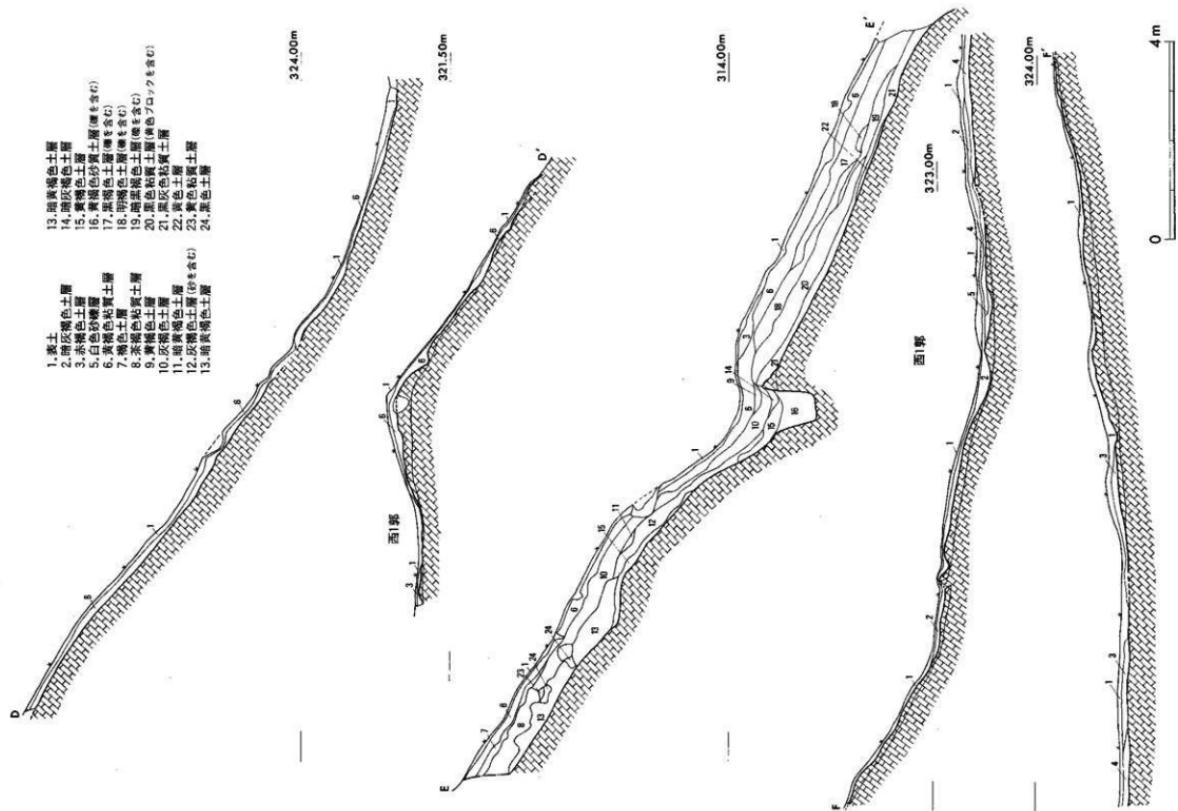
## (2) 西1郭・西側斜面(図版138)

西1郭は、主郭西側斜面の中程、標高322mに位置する。東西約5m、南北約15mの梢円形の加工段で、南端から西側肩部にかけて土壘状の高まりが巡り、それが途切れる西斜面北隅からは深い谷が延びている。加工段は、中央に向かってくぼみ、完全な平坦面にはなっていない(図版139-1)。土壘状の高まりは、土層断面で見ると、地山を削り出して造っており、盛土は行われていない(第8~10図)。

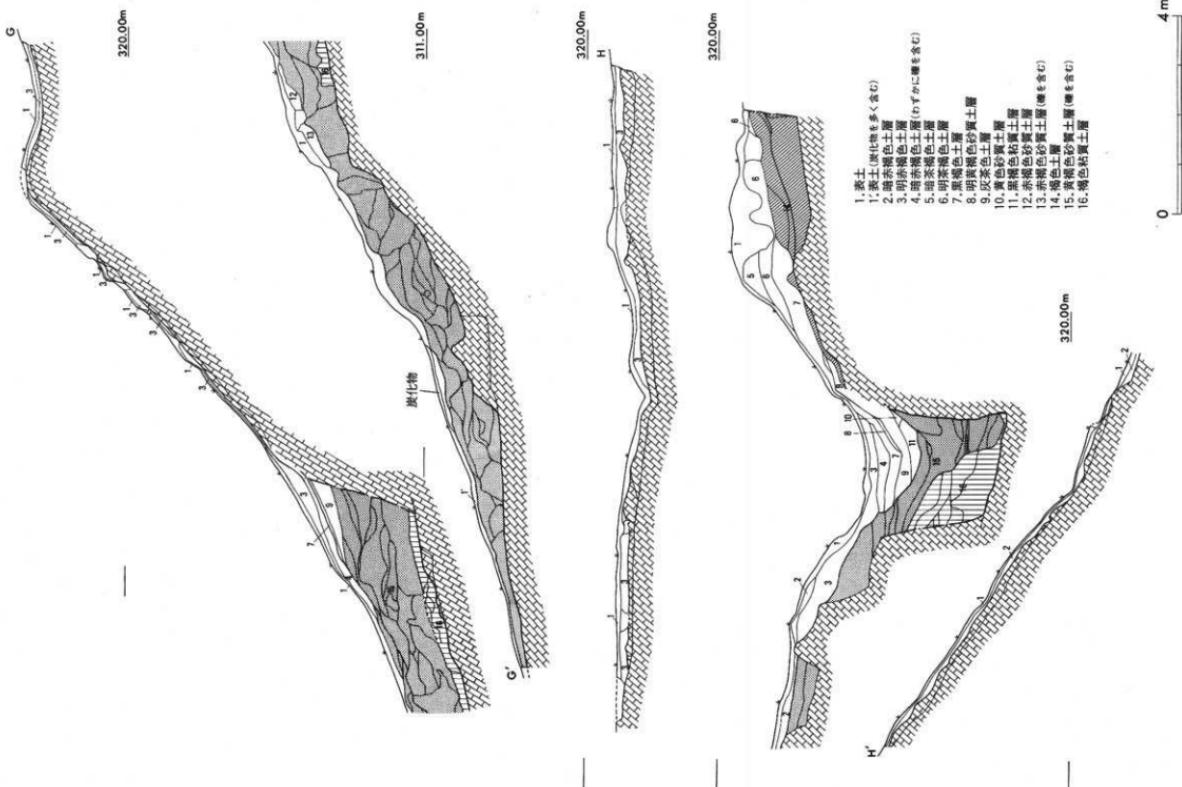
谷は、幅約6mで最も深いところでは肩部から5mにもなる。西1郭の北隅から始まり、下方では周辺の小さな谷を集めながら20m以上も西へ延びる(図版139-2)。両側の立ち上がりは急峻で、場所によっては垂直に近い(図版140)。埋土は厚く堆積していた。谷部上方の表土中より黒曜石の小塊と突堤文を持つ土器片を探集したが、山城に関係する遺物は得られなかった。

西1郭平坦面は、近年にごみ捨て場として使用されていたらしく、一部で炭化物が堆積しており、その中には、陶磁器片や昭和11年の硬貨が含まれていた。

調査前の状況では、西1郭は郭、谷は堅堀であると考えていたが、いくつか不自然な点が見られた。主郭と次項で説明する東1~3郭では明確な平坦面が存在するが、西1郭は中程が僅かにくぼんでおり、完全な平坦面を成していない。また、主郭など他の郭には存在しない土壘を持っており、その土壘は地山を削り出して造成され、盛土を使用していない。他の郭は尾根筋に位置するに対し、西1郭は谷間に位置しており、谷も堅堀と考えるには深すぎる。堅堀を谷あいに配する必要性も考えにくいことなどから森迫城跡の他の郭とは別の遺構として考えたほうが妥当であろう。石見地方は、古くから「たらら」製鉄が盛んに行われており、その原料となる砂鉄の産地としても知られている。砂鉄は、「鉄穴流し」と呼ばれる方法で山を切り崩して採集されており、西1郭の土壘や谷はそれに関係する施設である可能性も考えられる。



第8図 主幹西斜面・西1第1剥離断面図



## (3) 堀切 (第11図、図版141-1)

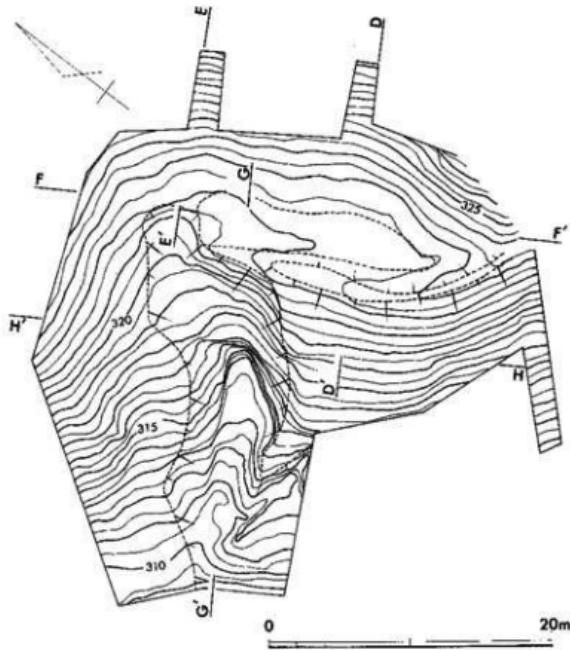
主郭と東1郭の間は、後世の道が通じる谷によって隔てられており削平を受けていることが予想されたが、表土を除去したところ西隅の部分は削平を免れていた。土層断面では谷底部西端にV字形の落ち込みがあり、主郭と東1郭の間に堀切を配することによって分離していた可能性が高い。底部の標高は321mで、直上に位置する主郭北側平坦面とは13m、東1郭とは3mの比高差を測る。主郭に続く西斜面は急峻に造られており、削平を受けている東1郭に続く斜面も同様に造られているとしたら、東1郭はかなり大きな削平を受けていることになる。

主郭に続く西側斜面は、標高326m付近から下方は急峻に造られているが、上方はやや緩やかになっている。この位置は、東1郭との比高差が2m程しかない。東1～3郭は主郭からは独立した形になっているが、この位置に橋を配し、連絡していた可能性も考えられる。

## (4) 東1～4郭 (第12図)

東1～3郭は、東に延びる尾根上に連続して造られた加工段である。調査前の状況では土塁・堀などの施設は見られなかつた(図版141-2、142)。東3郭下方に広がる谷部にも更に広い平坦面(東4郭)があるほか、東3郭と東4郭との間の斜面では、通路状に延びる加工段(帯郭)2面が見られた。

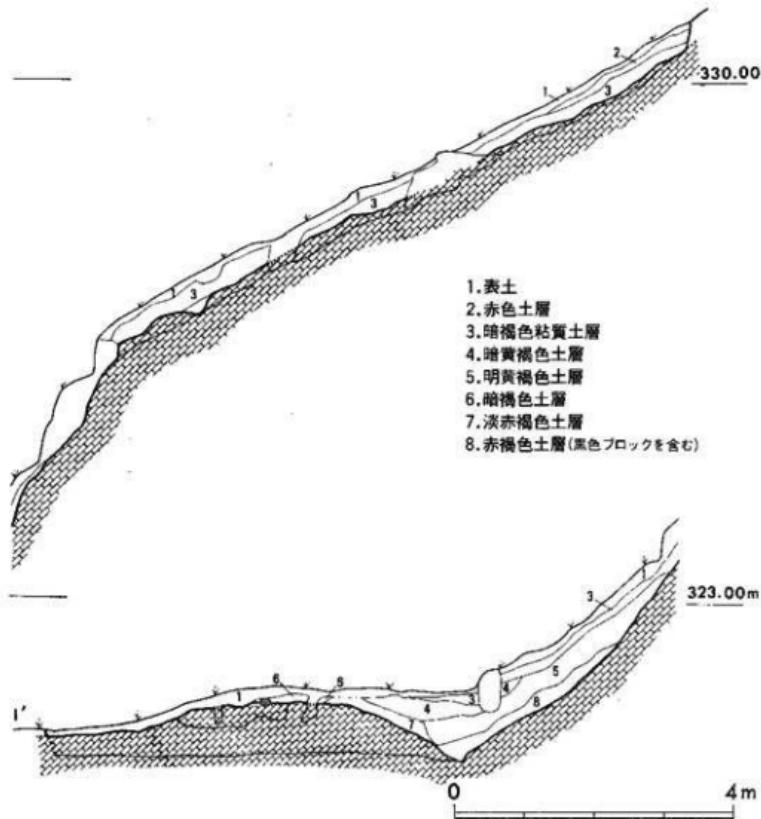
東1郭は標高324mに位置する加工段で、現存する平坦面は東西11m、南北7mの三角形となっているが、西側は削平されている可能性が高く、更に広かったものと思わ



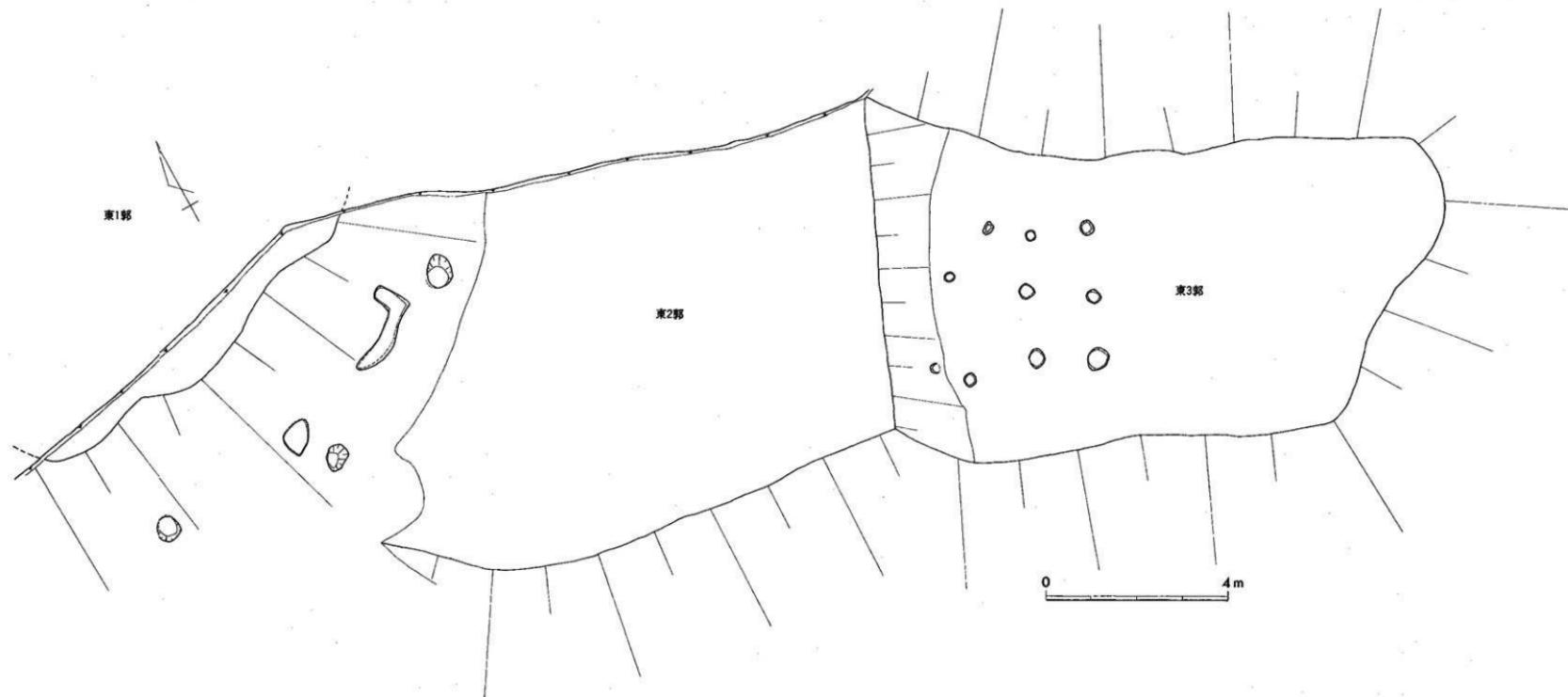
第10図 西1郭谷部土層断面位置図

れる。主郭との比高差は約10mである。平坦面の大半が調査区に掛からなかったため、ピット等の遺構は検出できなかった。平坦面肩部の土層断面でも盛土は見られず、地山を削り出して造成しているようである。東2郭に接する南側斜面下方には不整形のピットがある。柱穴と考えると、柵列等の防護施設が存在した可能性がある。東2郭に接する斜面は急峻で比高差も4mあり、東1郭は、他の郭からは独立して存在しているように見える。

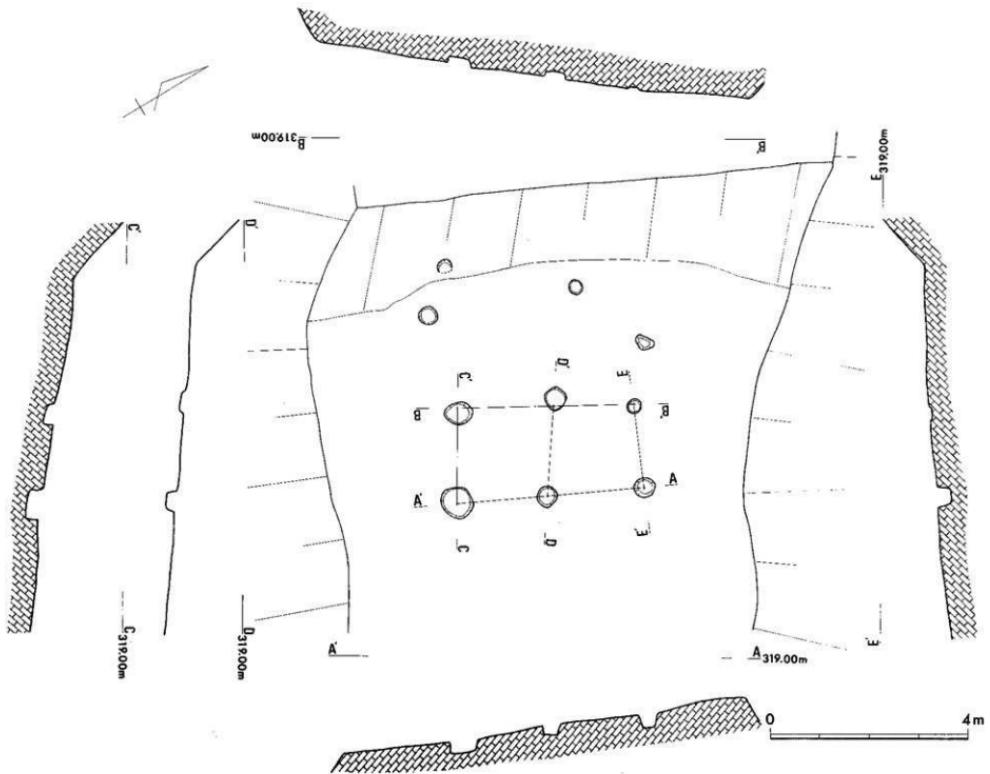
東2郭と東3郭は高さ1.5mの段で接した一連の加工段で、東2郭は標高321m、東3郭は標高319mに位置している。東2郭は東西12m、南北10mの四角形で、北側の一部は調査区外まで続いている。土層断面では各斜面で盛土が見られることから、尾根を削り、その土を周囲に盛ることによっ



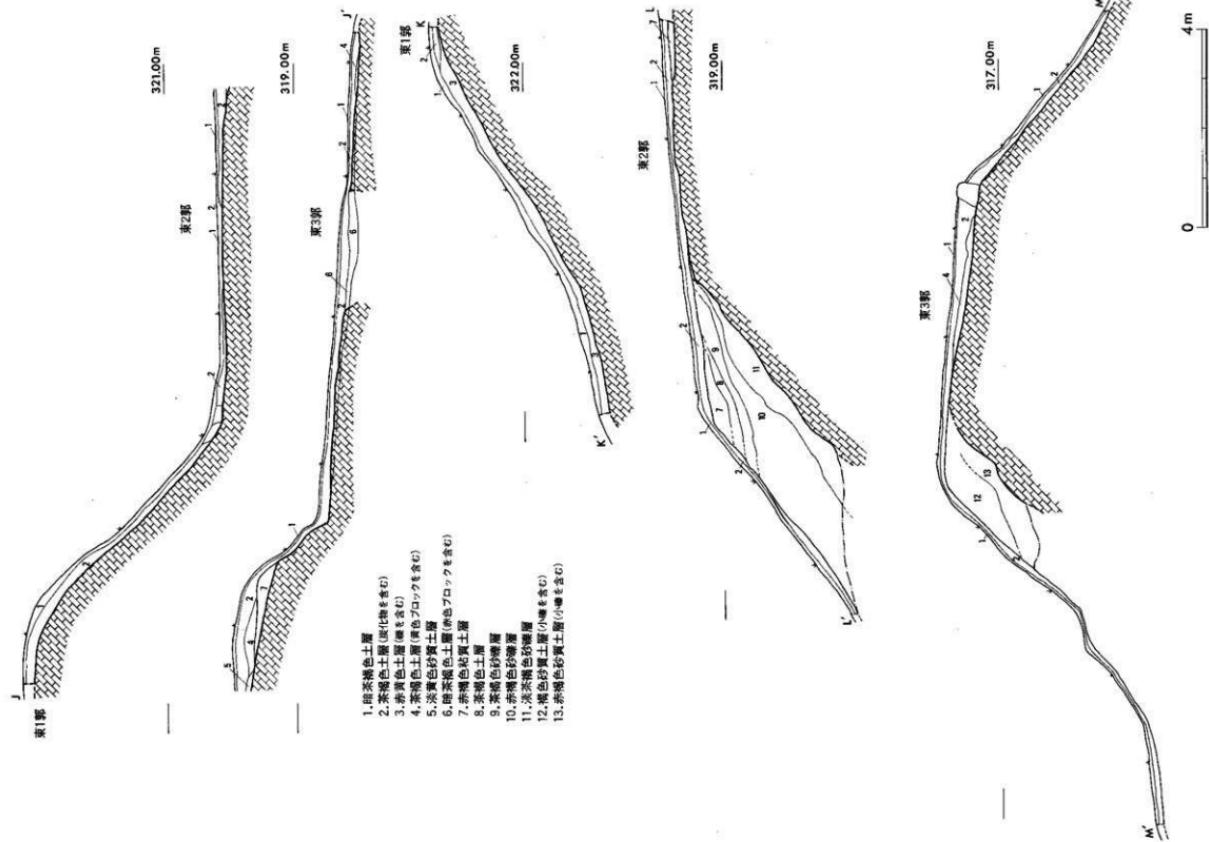
第11図 挖切～主郭東斜面土層断面図



第12圖 東1～3郭遺構実測図



第13図 据立柱建物跡(SB1)実測図

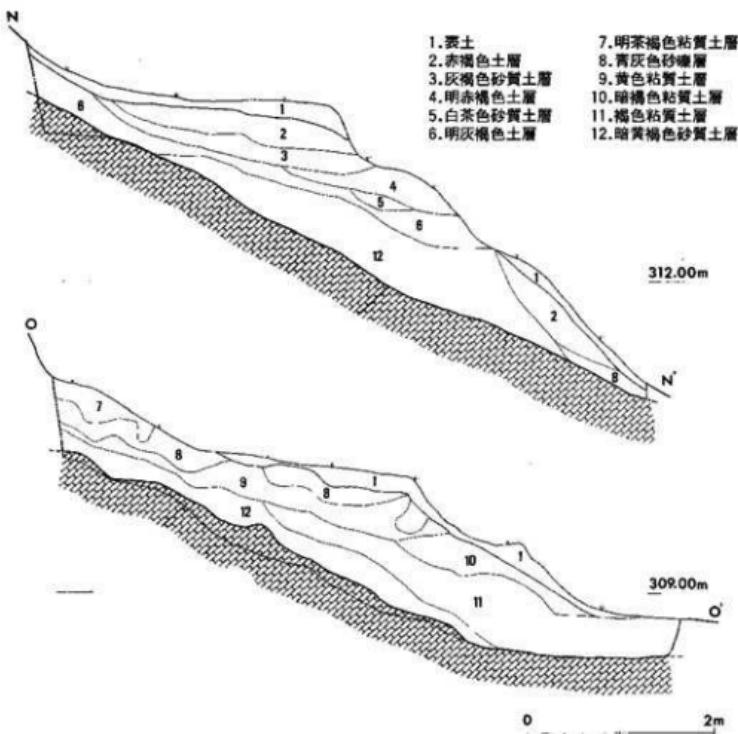


第14圖 東1～東3號土層斷面圖

て平坦面を確保している(図版144)。郭の平面プラン各辺は、直線的に造られている。東3郭は、東西12m、南北7mで東に延びる砲弾形の加工段である(図版143-1)。土層断面では、南側斜面には盛土が見られたが、東側と北側には僅かな盛土しか行われていない(第14図)。平坦面西端の東2郭下方斜面では等高線が乱れ、北端が僅かに突出していたことが分かる。

東3郭では幾つかの柱穴を検出し、2間×1間の掘立柱建物(SB1)の存在が考えられる(第13図、図版143-2)。柱穴は径40cm前後のものが多く、深さは2~20cmと大きな差がある。また、SB1以外にも柱穴状の落ち込みがあり、SB1の建て替えや、他の施設が存在した可能性がある。SB1の柱間は120cm前後であった。

東1~3郭は同一の尾根上に連続して造られた一連の郭群として考えることができるが、その下



第15図 東3~4郭間帯郭土層断面図

方谷部にもやや広い平坦面（東4郭）が確認できた。東4郭は東西5m、南北17mの長方形で、標高310mの谷部に位置し、東3郭との比高差は7mにも及ぶ。主郭から東1～3郭はいずれも尾根上に位置することから、東4郭の立地は明らかに他の郭とは異なる。ピット等の遺構もなく、山城廃絶以後の削平地であったことも考えられる。東4郭には近代に掘られたものと思われる横穴遺構が開口している。また、東3郭との間の北側斜面には通路状の加工段（帯郭）が2条にわたって造られている。

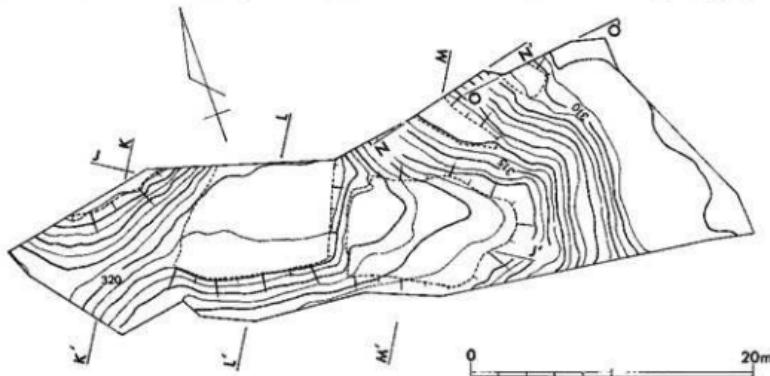
帯郭は調査区北隅の標高314mと312mに位置し、調査区外北側に長く延びている。調査区内には、南端の一部が僅かに掛かった。上面の帯郭は幅2m、長さ14m、下面のものは幅2m、長さ20m以上になり、両帯郭の比高差は2mである。土層断面では両帯郭とも完全に盛土で造られている（第15・16図、図版145）。

この2面の加工段は、植林のための造成地とも考えられるが、付近で行われている植林のための造成地ではいずれも土留に石垣が使用されており、石垣の使用の見られない帯郭は山城の施設である可能性が高い。帯郭の造成については、東3郭の北側斜面では僅かな盛土しか見られなかったが、直下にあたる帯郭が完全に盛土で造られていることから、東3郭付近の造成時にその盛土を利用して帯郭を造ったことが考えられる。帯郭では、ピット等の遺構は確認できなかった。

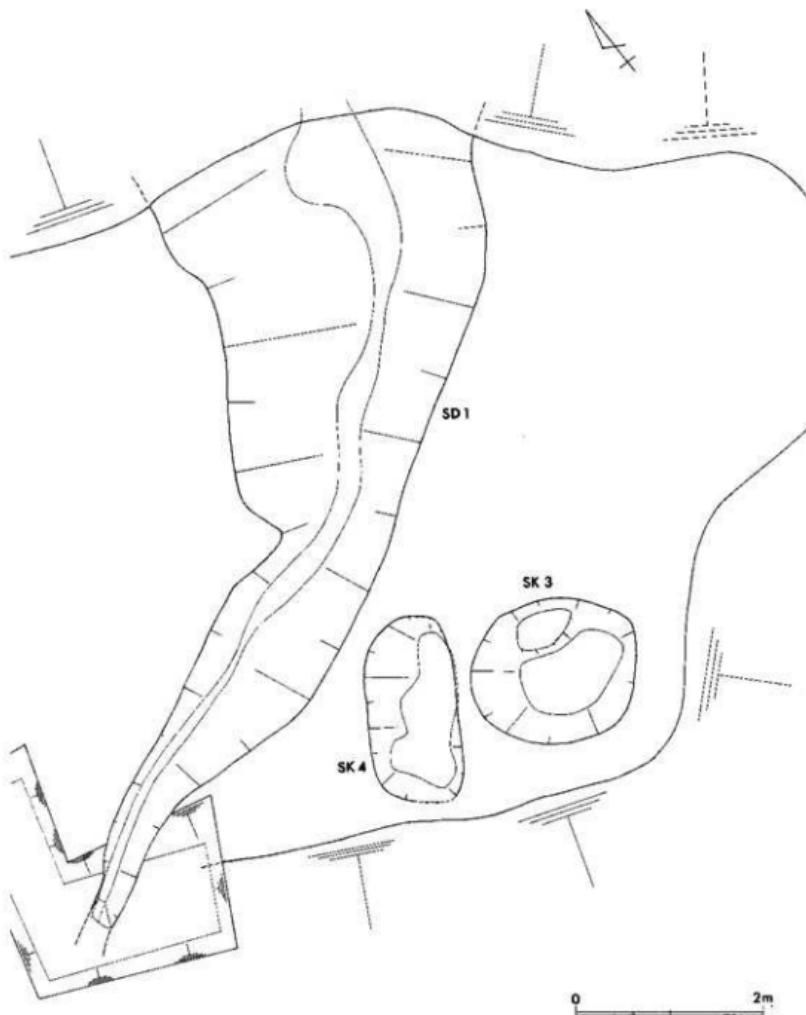
東1～4郭と帯郭では山城に伴う遺物は確認できなかったが、東3郭南側斜面の表土中から須恵器甕の小片を採集した。

#### （5）溝・土坑（図版147-2）

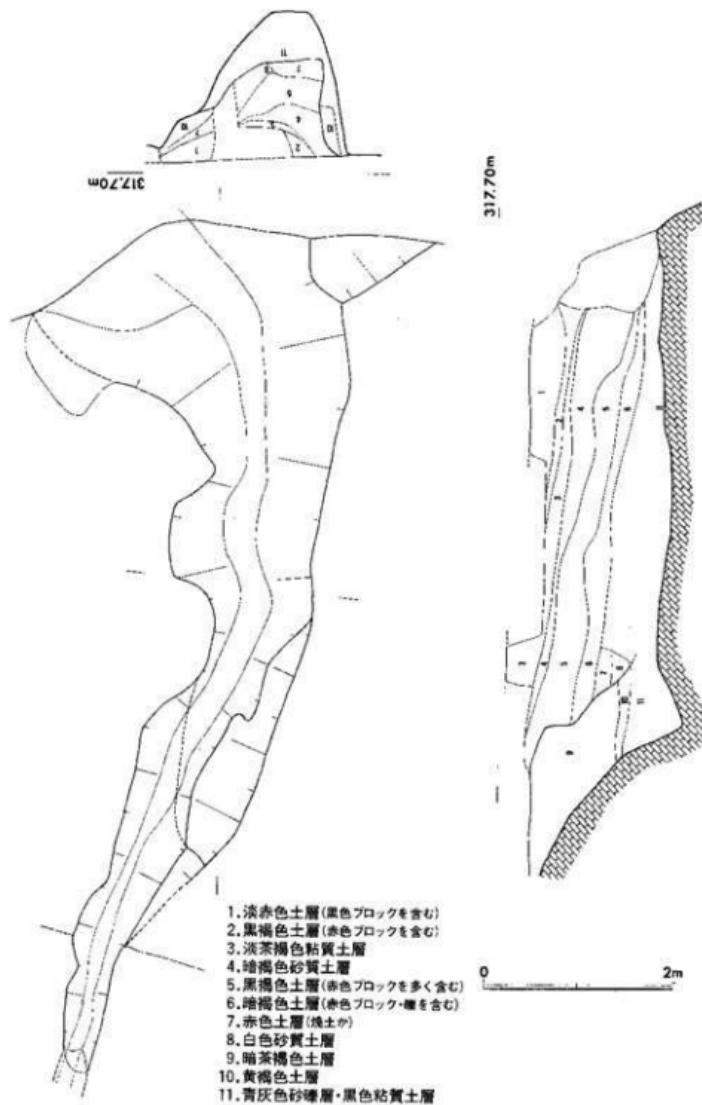
東3郭の盛土下層で溝（SD1）と土坑2基（SK3・4）を検出した。SD1は東3郭を構成する尾根を中程で分けるように横断し、それに隣接するようにSK3・4が掘られている（第17図、図版148）。



第16図 東1～3郭土層断面位置図



第17図 東3郭溝状造構(SD1)平面図



第18図 溝状造構(SD1)土層断面図

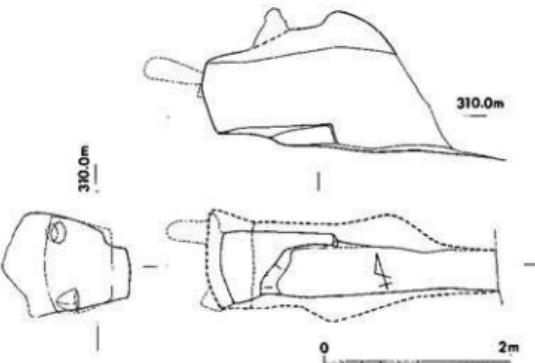
- 2 )。

尾根の南西隅に位置する SK 3 は、径約160cm、深さ約80cmの円形の土坑で、断面は半球形に近い。埋土は赤褐色土で僅かに炭化物を含んでいたが、遺物は見られなかった。

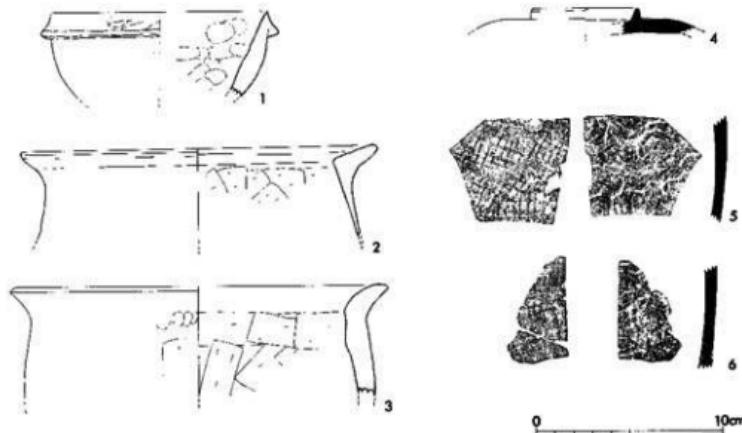
SK 3 と SD 1 の間に位置する SK 4 は、横円形の土坑である。長径約200cm、短径約90cm、深さ約70cmで、主軸は北東—南西方向を指す。断面

は船底形で底部には幅の狭い平坦面がある。埋土は黒褐色土で焼土と思われる赤色ブロックや炭化物を含んでいる。

SD 1 は、幅1~2m、深さ160cmの断面V字形の溝で、東3郭を構成する尾根を北東—南西方向にやや蛇行しながら8mにわたって横断している。土層断面では、南西から約3mのところで埋土が2段に分かれて堆積しており、南西側のSD 1(古)が完全に埋没した後に北東側のSD 1(新)が



第19図 横穴遺構実測図



第20図 森迫城跡出土遺物(1)

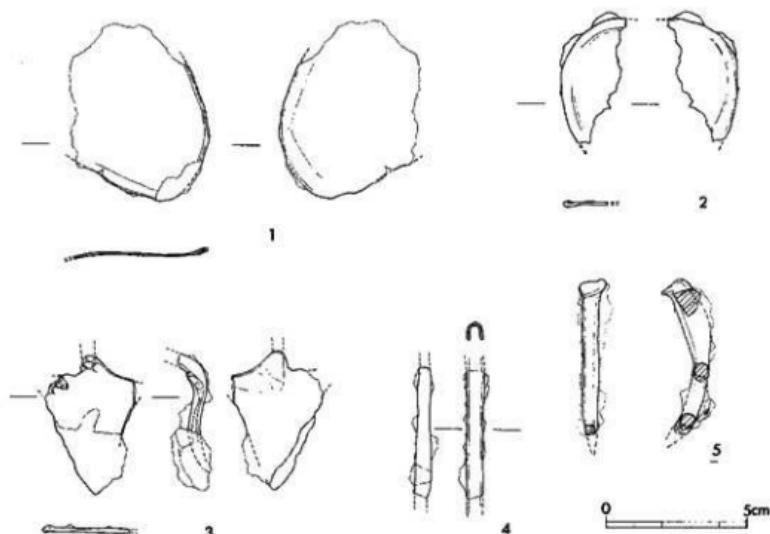
切り込んで造られているようである（第18図、図版146-1）。

SD1(新)は、北東側斜面開口部が大きく開き、奥へ向かうほど狭くなる。深さ約130cmで、縦断面は船底形を呈し、床面には幅の狭い平坦面があるが、両側の立ち上がりの中程にも小さな段が設けられている（図版146-2）。埋土中には、ブロック状になった焼土や炭化物を含んでおり、火に関係した遺構である可能性が高い。上層は、全体に北東方向に向けて緩やかに傾斜しながら堆積している。SD1(古)は、SD1(新)が消滅するあたりから西よりに進路を変え、東3郭西側斜面まで貫通している（図版148-1）。深さ約190cmで、床面幅は広いところでも28cmしかなく、断面はV字形に近い。埋土は褐色土が厚く堆積しているが、床面近くでは確かに砂礫層もあり、水が流れていたことも考えられる。

SD1(新)の埋土である淡茶褐色粘質土中からは土師器窯が出土しているほか（図版147-1）、SD1(古)の底部近くからも土師器窯の小片が出土している。また、SD1(古)の埋土である黒色土中からは東4郭付近で採集されたものと同様の叩き目をもつ須恵器窯の小片が出土している。

#### (6) 横穴遺構（第19図、図版149-1）

東4郭西側の壁面には横穴遺構が開口していた。開口部は高さ約1m、幅約0.4mで底部のやや狹



第21図 森迫城跡出土遺物(2)

い卵形をしている。奥行きは約3m、床面の最大幅は0.74mで、ほぼ長方形となっているが、壁面や天井は大きく弯曲し、最高所は1.44mにも達する。内部は天井と壁面が僅かに崩壊していた。

東3～4郭間斜面は東3郭から流れてきた土が厚く堆積しており、横穴遺構はそれを掘り込んで造っているようである。内部の形状も整えられておらず、古墳時代の横穴墓とは明らかに異なる。埋土の状態などから判断しても山城より新しい時期に掘られたもののように、芋などの農産物を貯蔵するために近代になってから掘られたものであろう。

#### (7) 遺物

今回の調査では、中世山城に伴うと考えられる遺物は確認できなかったが、少量の土器類のほかSK2から鉄釘などの金属製品を採集することができた。

##### ① 土器 (第20図、図版151)

(1) は西1郭の下方斜面表上中から出土したものである。薄く作られた胸部は緩やかに内凹し、口縁部外面には張り付け突帯を持っている。外面は丁寧にナデられているが、突帯上面から内面にかけては強い押さえのために指頭圧痕が多く残る。明灰茶色を呈し、胎土中には2mm程度の砂粒を多く含んでいる。

須恵器類は東3郭付近から小片が3点出土している。(2) は東3郭下方の斜面から出土した杯蓋である。頂部周辺を平らに削った後、薄く作られた輪状つまみをほぼ直立させて張り付け、その上からナデしている。ナデは丁寧に行われており、削った痕跡は殆ど残していない。

(3)・(4) は甕の胸部の小片で、(3) は東3郭平坦面の表土中から、(4) はSD1の埋土中から出土した。外面の印き目は、一見格子に見えるが縦方向と横方向では線の強さが異なり、平行印きであろう。この印き目は、内面の青海波文と共に僅かにナデ消されている。焼成は十分にされておらず、やや軟質で、灰褐色から明黄灰色を呈す。

SD1からは2種類の土器類が出土している。两者とも甕形土器で、器壁が薄く口縁が直角に開くもの(5)と、器壁が厚く口縁が緩やかに外反するもの(6)がある。(5) はSD1直上から小片がまとまって出土したもので、一部には外面にススが付着したものもある。(6) はSD1(古)の底面近くから出土した。外面は削りの後にその痕跡をナデ消しているので、わずかにススが付着している。胎土中には砂粒が多く含まれている。

##### ② 金属製品 (第21図、図版152)

主郭部平坦面の北東隅にあるSK2からは、金属製品の小片が出土しているが、図示し得たものは5点のみだった。

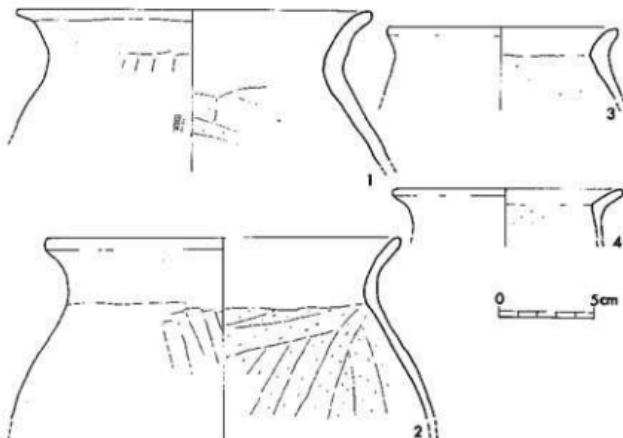
(1)・(2) は板状のもので、おそらく同一固体であろう。復元形は梢円形に近い形狀と考えられ、端部は幅5mm程の部分を折り曲げている。釘穴などは見られない。

(3) も板状のものであるが、(1)・(2)に比べやや厚手に作られているほか、基部が太く作られている。現存部分から判断するとスプード形のもののように、板状の部分が波打っているのも変形したものではなく、当初からこのような形態だったものと思われる。

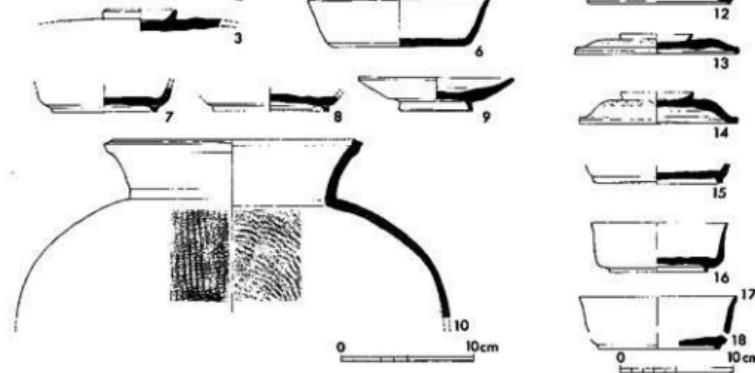
(4) は両端を欠いて

ているが、半截管状のもので、凸面に比べ凹面が粗く作られている。板材の縁金具のようなものであろう。

(5) は残存長55mmの鉄釘で先端を僅かに欠いている。断面はほぼ正方形で、釘頭幅8mm、太さ5



第22図 松ヶ迫遺跡群出土土器実測図(証1報告書より)



第23図 瑞穂町内出土須恵器実測図(1~10.口クロ谷通路、11~18.久永古窯群 / 証2-3文献より)

■で推定60mm程度の長さがあったものと思われる。

これらの金属製品は用途が不明であるが、仮に(4)を板材の縁金具とした場合、(3)は蓋の引き手、(1)・(2)は飾り金具と思われる。しかし、(4)に対し(5)の釘が太すぎることから、蓋の部分と他の部分では板材の厚さが異なるものを想定しなければならない。SK2からは、土器類の出土がなかったため、時期については不明である。

### 3. 小結

今回の調査では、山城の中心部である主郭から東1～3郭の大半を調査したが、山城に伴う遺物は出土しなかった。また、東3郭では山城以前の土器が出土したが、それが伴う遺構の性格については不明である。以上のような状況のため、調査成果についてまとめることはできないが、出土土器と城跡の特徴について述べ、まとめとする。

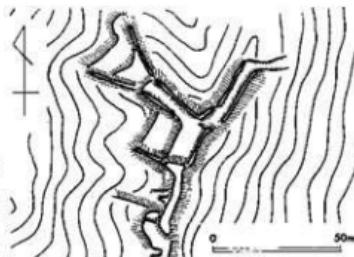
#### (1) 土器について

突帯文土器については類例を見ないが、突帯文の形状や胎土から想像するとおよそ縄文時代晩期から弥生時代前期頃のものではないだろうか。

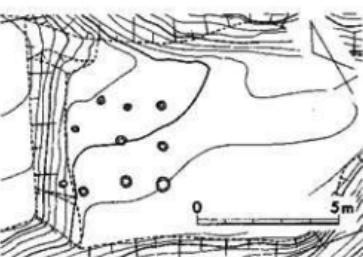
SD1出土の土師器についても類例が殆ど知られておらず、中国山地沿いに分布する土器である可能性が高い。広島県三次市の松ヶ迫遺跡群のB地点遺跡・F地点遺跡の住居跡群出土土器の中に外縁に削りを施す土師器が見られるが、これらに近いものであろうか（第22図）。報告書では、これらの土器が出土した住居跡は6世紀末から7世紀前半の年代が与えられている。

須恵器蓋杯は、瑞穂町内のロクロ谷遺跡出土品に同様のものが見られる（第23図）。ロクロ谷遺跡出土土器では、器高が低く、口縁部にかえりが見られないを特徴とし、8世紀後半から9世紀後半頃と推定されているが、森迫城跡出土のものに比べ、つまみがやや外傾している点が異なっている。ロクロ谷遺跡は、久永古窯跡群と呼ばれる窯跡に囲まれた地域にあり、それらの各窯跡からも同様の須恵器が採集されている。

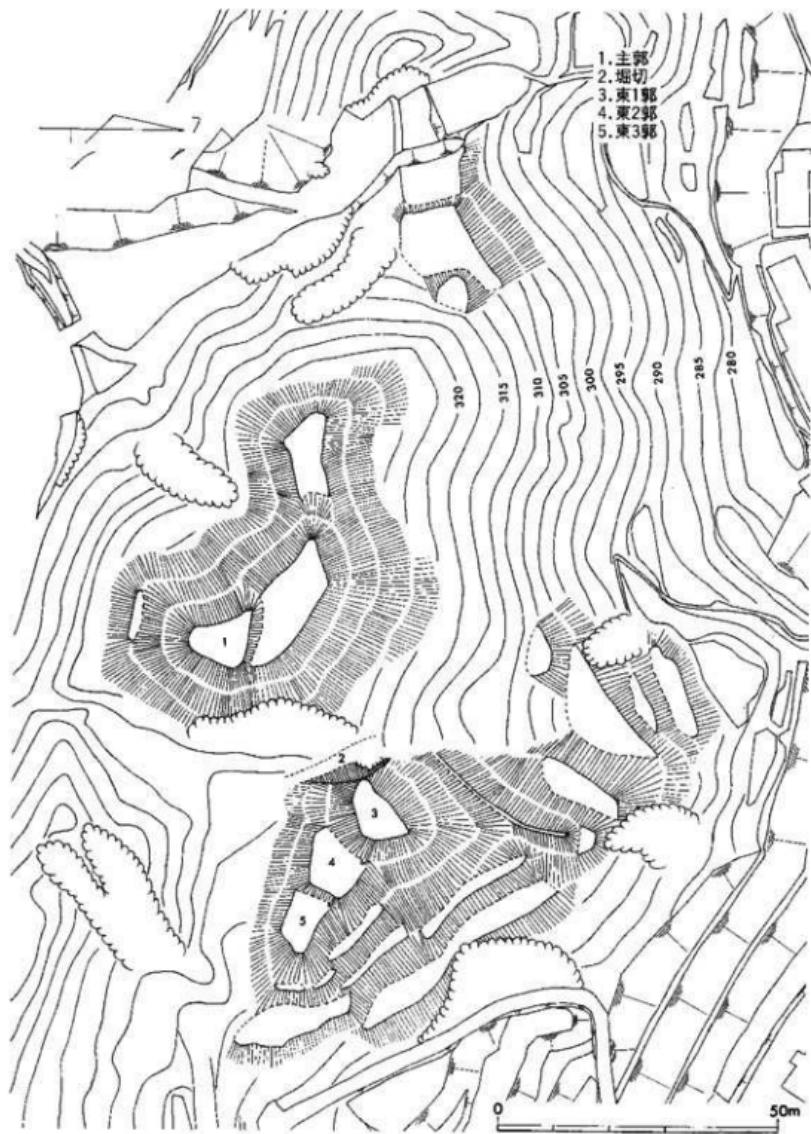
ロクロ谷遺跡では森迫城跡と同様の叩きをもつ甕も出土しているが、ロクロ谷遺跡出土のものはナデ消しを行っていない点が異なる。森迫城跡出土の須恵器甕は蓋杯に比べ焼成が悪く、時期が下がる可能性がある。



第24図 京羅木山城跡群  
(三島正之氏原図、部分: 証4文献より)



第25図 東3郭付近地形測量図



第26図 森迫城 拡張図

## (2) 山城について

西1郭と谷については、前述のとおり後世の削平である可能性が大きい。しかし、何もない斜面に平坦面と土塁を造ったとは思いにくいので、それ以前に山城に伴うような削平地が在ったことも考えられる。

主郭・東1～3郭はいずれも尾根を切り崩し、その十を斜面に盛ることによって平坦面を造成している。東2郭に見られるように、盛土は平坦面を広くすると同時に斜面を急傾斜にしようとする意図があったのではないだろうか。各郭の平面形は、東3郭では不整形だが東1・2郭は方形を意識しているようである。森迫城跡では石垣は見られず、土塁や堅掘についても確実なものは確認できなかった。各郭の基部には柵列等の防護施設の存在が考えられ、東1郭下方のビットも柵列であった可能性があるが、確実なものは見られなかった。森迫城跡で見られる最も特徴的な点は、東3郭壁面北端の突出である。東2郭から通路状に東3郭につながるこの施設は、南端にも僅かに等高線の乱れがあるところがあり、両側に設けられていたようである。通路ほどの小さなもので、防護施設と呼べるほどのものではないが、本来の地形では尾根筋に沿って回り込む筈の位置を逆に突出させており興味深い。毛利元就が富田城を攻めた際に築いたと伝えられる京羅木山城塞群の中には、郭の両端を尾根に沿って七星状に造っているような状況を見る事ができるが(第24・25図)、森迫城跡のものもこのよりなものであったかもしれない。

森迫城跡の築城時期については前述のとおり断定はできないが、繩張り等からある程度の時間軸を設定できないだろうか。南北朝期の山城は概して高く深い山にあり、在地性に乏しく、天険に依存する反面、郭の削平や堀切の掘削、全体の繩張りのまとまり等において、粗雑だと言われており、比高差の比較的低く繩張りとしてのまとまりを持っている森迫城跡の場合とは印象を異にしている。また、森迫城跡に存在しない畝状堅堀群や石垣については、前者は16世紀半ば頃に基本的な形が完成すると考えられている他、後者も繩張り頃から普及し始めると考えられている。仮にそれらの内容が総て事実と考えた場合には、森迫城の築城時期の幅を南北朝期以後から16世紀中頃までと考えられないだろうか。市木地区には16世紀半ば頃に安芸の吉川氏(毛利氏)<sup>(4)</sup>が進入し、福屋氏と争った事が伝えられており、それ以後の市木地区周辺はほぼ吉川氏の勢力下に入ったと考えられることからその頃に森迫城等の市木地区の城跡群が造られた可能性がある。

島根県内の中世城郭の考古学的な調査は現在までにわずか数例を除いてほとんど行われていないが、今後増加することが考えられる。今回の森迫城跡の発掘調査では時期を決定し得るような遺物が得られなかったが、森迫城跡における土木作業の特徴については知見を得ることができた。今後は山城の年代や築城者等について考えていくことが必要であろう。

(林 健亮)

註

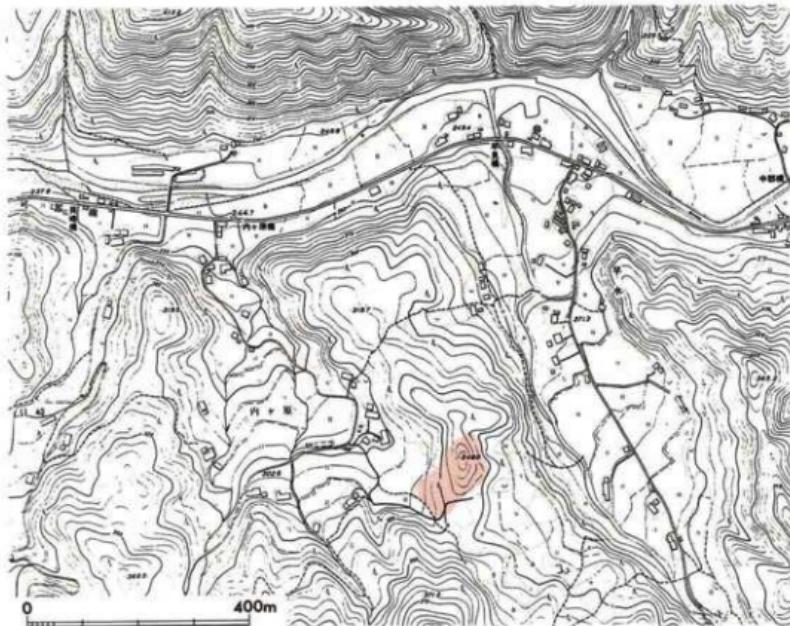
- (1) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター「松ヶ迫遺跡群発掘調査報告」1981年
- (2) 河瀬正利『クロ谷遺跡発掘調査概報』瑞穂町教育委員会 1990年
- (3) 吉川 正「古代の遺跡」『瑞穂町誌第三集』1983年
- (4) 村田修三編『國説中世城郭事典 三』  
三島正之「勝山城 付京羅本山城塞群」1987年
- (5) 村田修二氏は、鉄状堅堀群について、陶隆房が1552(天文20)年に大改修した若山城(周防)の鉄状堅堀群が完成段階に近いものとされ、こうした防衛施設の設置は16世紀前半に始まり永禄年間(1560年前後)に完成すると推定されている。  
村田修二「城の発達」『國説中世城郭事典 二』1987年
- (6) 註(5)村田論文
- (7) 1561年末から1562年初頭頃 第五章参照

## 第V章 内ヶ原城跡

### 1. 調査の概要

うちがはらじょう  
内ヶ原城跡は、島根県那賀郡旭町大字市木字内ヶ原7198-3番地他に所在する（第1図、図版13-1）。『旭町誌』に「早水城」<sup>(1)</sup>と記載されている城跡にあたると考えられるが、城跡西麓にある集落が「内ヶ原」であることや、この集落の周辺に城に関する地名があることから「内ヶ原城跡」と称することにした。

内ヶ原城跡は、西方向に向かって流れる八戸川南岸一帯に広がる丘陵上に位置する。城跡頂上部の標高は約350mで、付近の水田から城跡頂上部までの比高差が約50m、八戸川沿いにはしる県道浜田八重可部線のある河岸段丘との比高差は約100mを測る（図版153）。



第1図 内ヶ原城跡の位置

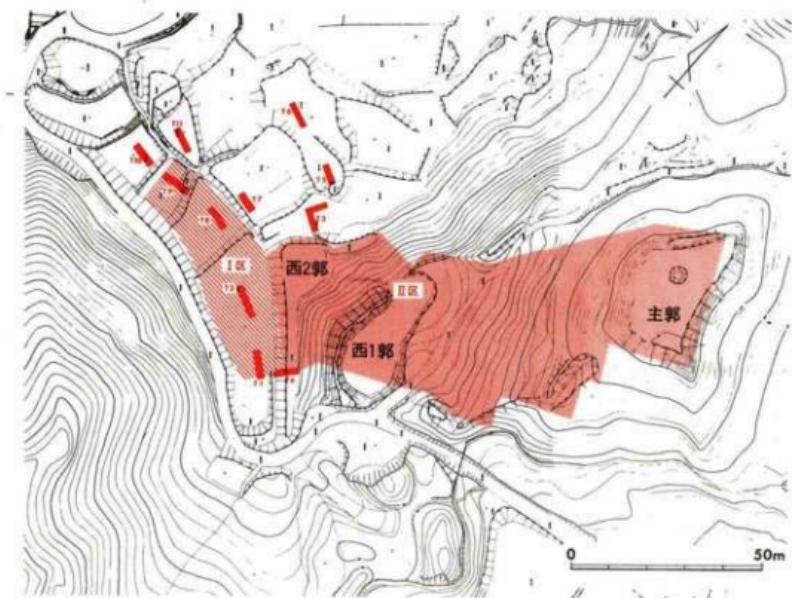
主郭平坦面を中心とする小字名には「城平」、城の構造物に連なる南西谷部には「的場」、内ヶ原入口付近に「矢倉」等、城に関連する地名が散見される（第26図・表2）。

島根県教育委員会では昭和56年度に中国横断自動車道広島浜田線建設に先立って、国庫補助事業として予定地内の遺跡分布調査を実施した。その結果、郭と考えられる平坦面3箇所と土壙状の施設を確認した。<sup>(2)</sup>

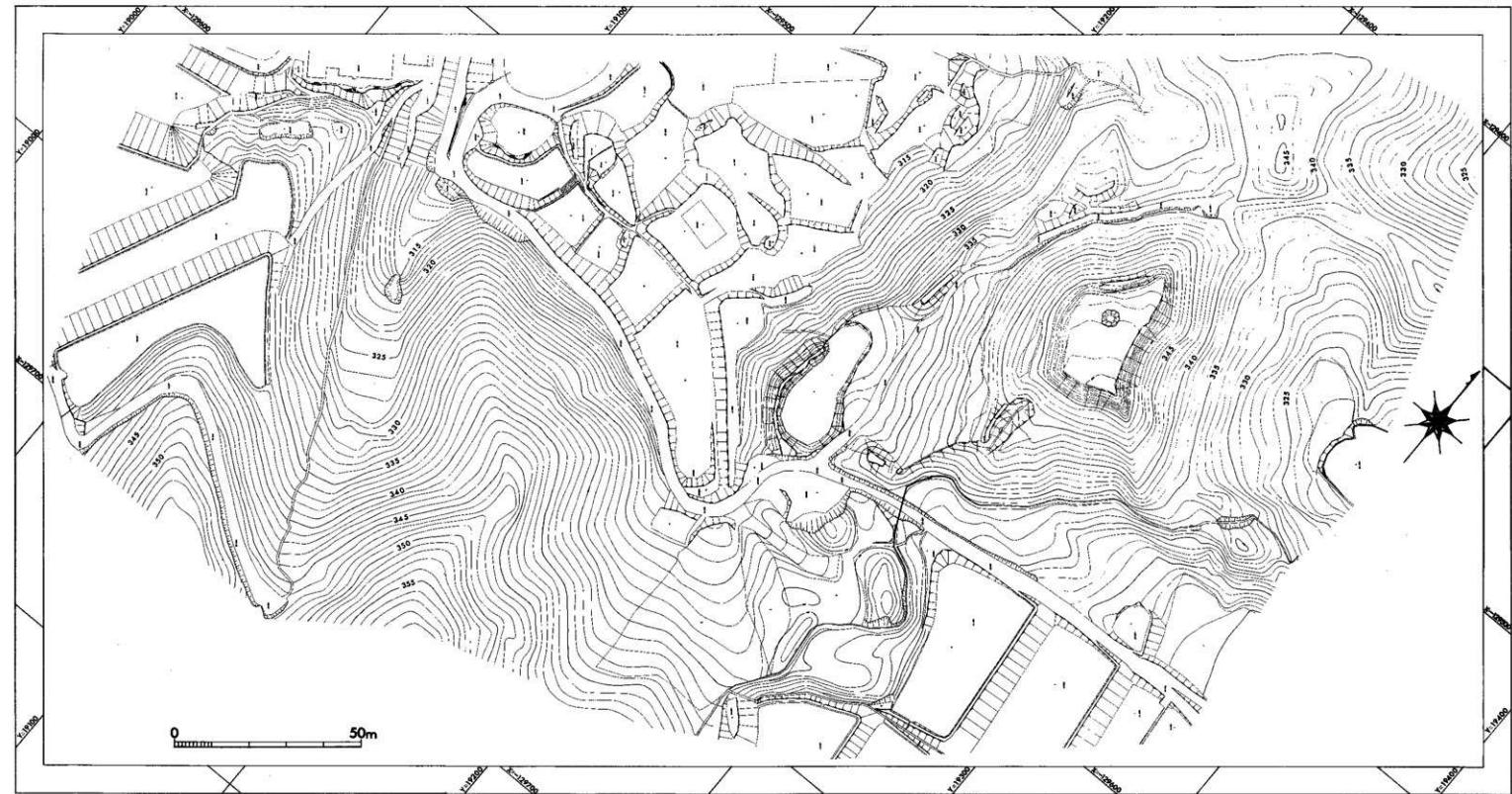
その後、昭和63年度から本調査を実施することになり1次調査において、遺構遺存状態と遺跡の範囲確認を行った。表面観察によると城跡は鉄穴流しと考えられる掘削のため、丘陵頂上部の東側と南側の大半が崩壊しているが、残存部として山城の主郭部分と考えられる丘陵頂上部の人工的な平坦面を始め、郭、土壙と推定される造成地を確認した（第3図）。

これら、人為的な加工が加えられていると推定した場所について便宜的に、丘陵上の平坦面を主郭、その西麓の平坦面を西1郭、さらにその西下面の平坦面を西2郭と称することにした（第2図）。

城跡と推定した場所以外の平坦面等は建物跡等の遺構の存在する可能性も考えられたために、試掘調査をして遺跡の範囲確認を行った。11箇所設定したトレンチのうち、第1・2・7・8・9トレンチ



第2図 内ヶ原城跡調査区配置図



第3図 内ヶ原城跡調査前地形測量図

において遺構及び遺物を確認した。遺構及び遺物を確認した範囲は城跡の南西に位置する谷部である（第2図）。

以上の確認調査により、試掘によって確認した谷部をI区、城跡に直接関係すると考えられる地域をII区と呼称することにして調査区を設定した。昭和63年度は8月18日から12月23日までI区全域とII区の西2郭の部分について調査を実施した。平成元年度は4月25日から10月30日まで城跡調査を主体としてII区の調査を実施した（第2図）。

## 2. 第I区の調査

西2郭と仮称した部分の南西側に位置する谷部である。幅約15m、長さ約60mを測り、西方向に向かって緩やかに傾斜する。現況は植林が行われていたが、それ以前には畠地として利用されていたということであった。

比較的平坦であったため、中世建物跡等の遺構が存在するものと予想された。

### (1) 第1トレンチ（第4図、図版154-1）

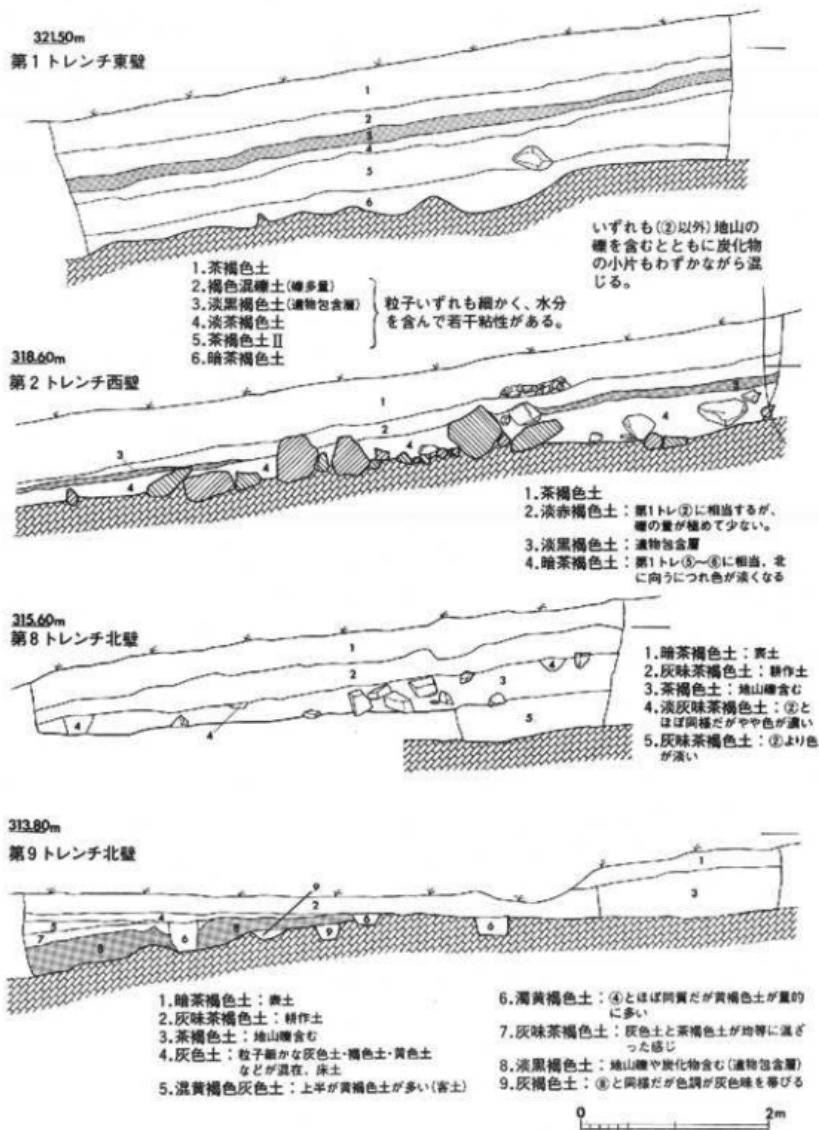
I区東端に設定したトレンチである。1層は茶褐色土層で、厚さ35~40cmある。陶磁器片を含んでいる2層は褐色泥礫土層で、厚さ約20cmある。均一に広がっていることから比較的短期間に堆積したもののように思われ、城造成の際に地山切削等により、堆積した可能性が考慮された。3層は厚さ10~15cmの薄い層で淡黒褐色を呈し、遺物を包含している。以下淡茶褐色土（4層）、茶褐色土Ⅱ（5層）、暗茶褐色土（6層）、基盤層と続く。このうち4・5層は第2トレンチの4層に対応するもので地山漸移層の可能性がある。

### (2) 第2トレンチ（第4図、図版154-2）

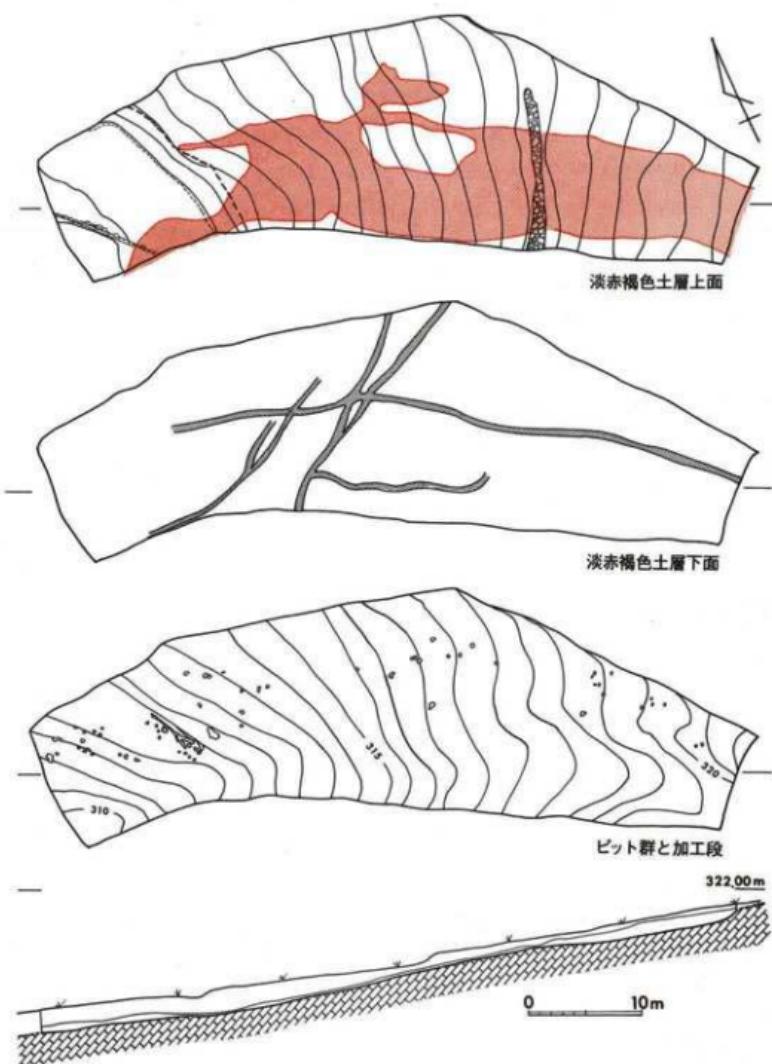
第1トレンチに続いて斜面下方向に設定したトレンチである。1層は茶褐色土層で、厚さ30~60cmある。2層は淡赤褐色土で第1トレンチの2層にあたると思われるが、磚の量が極めて少ない。3層は淡黒褐色土で、厚さ10~15cmのものである。第1トレンチの3層と同じく弥生土器の出土する遺物包含層である。4層は暗茶褐色土で、厚さ15~50cmを測る。直径50cm程度の石を含んでいる。第1トレンチの4・5層に相当すると考えられる。このトレンチにおいて2層の上面に石組状の遺構があることが確認された。この遺構は、幅約80cm、厚さ約15cmを測る。拳大の石が2~3個積み上げられている。

### (3) 第3トレンチ（第4図、図版155-1）

1層は暗茶褐色土で、厚さ30~40cmある。2層は灰味茶褐色土で、厚さ20~40cmである。第1トレンチや第2トレンチの2層赤褐色土や、3層淡黒褐色土（遺物包含層）は見られない。3層は茶褐色土で、厚さ20~40cmあり、10~30cm程度の石を含んでいる。5層は暗茶褐色土で、厚さ20~40



第4図 I区第1・2・8・9トレンチ土層断面図



第5図 I区遺構検出状況

cmある。3層と5層が基盤層になる。

#### (4) 第9トレンチ（第4図、国版155-2）

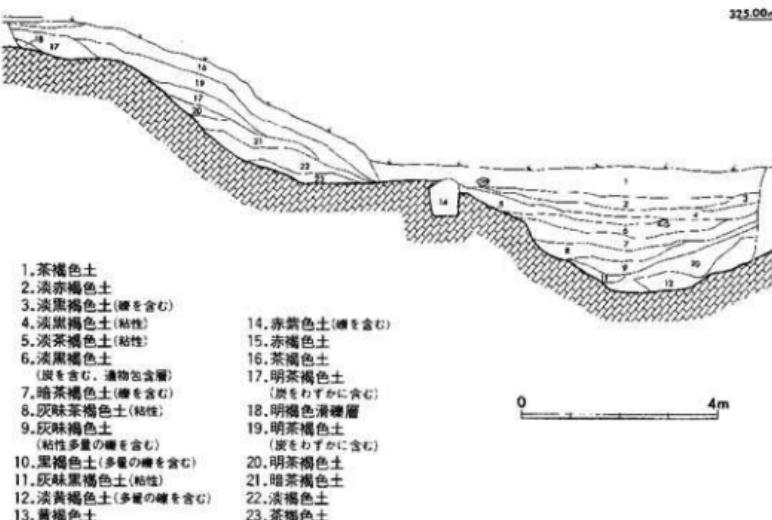
1層は暗茶褐色土で厚さ15~20cmある。2層は灰味茶褐色土で、厚さ30~40cmある。3層は茶褐色土で、厚さ40~50cmである。4層は灰色土で、厚さ5~10cmあり、粘土と思われる。5層は混黄褐色灰色土で、厚さ5~20cmあり、粘土と思われる。6層は潤黄褐色土でピット状の落ち込みである。7層は灰味茶褐色土で、厚さ10~15cmある。8層は淡黒褐色土で、厚さ10~50cmある。弥生土器が出上する遺物包含層であり、その上面からは備前焼壺の破片が検出された。この備前焼は、16世紀中頃のものである。9層は灰褐色土でピット状の落ち込みである。

以上のトレンチ調査の結果、城跡に関係する遺構面（淡赤褐色土層上面）と弥生時代の住居跡（茶褐色土層）の存在が予想されたので、その後この2つの土層を面的に拡張して調査することにした。

#### (5) 淡赤褐色土層上面（第5図上段、国版156）

最上層の茶褐色土を除去したところ、淡赤褐色土がかなり面的な広がりをもってあらわれた。この層は人為的に造成された土のように思われたのでこの上面で遺構の有無を確認することにした。

ピット等は皆無であったが、淡赤褐色土を検出したところで石組遺構を確認した。この遺構は季



第6図 I区南東壁土層断面図

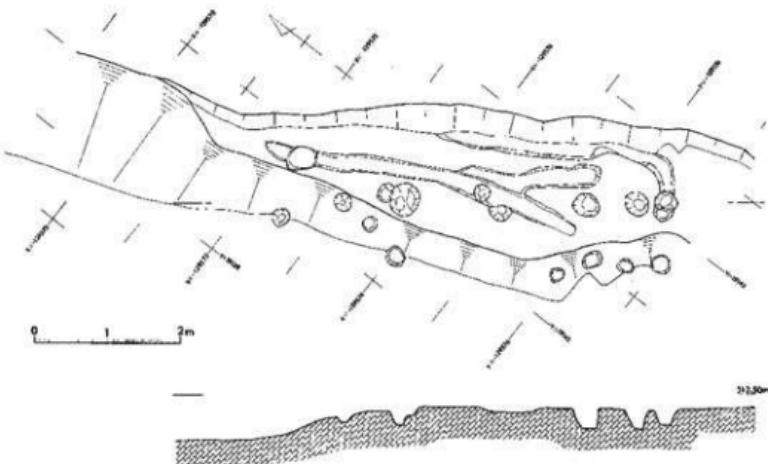
大の石を2～3個積み上げて造られていて、幅40～120cm、高さ約20cm、長さ約13mを測る。I区を横断する形で検出されたが、その他に関連する石組等を検出しなかった。時期は直接遺構に伴う遺物を検出していないために不明である。谷部を横断する形であることや石組造構の状況から考えると畠等の境界に利用されていた可能性も考えられる。

#### (6) 淡赤褐色土層下面（第5図中段、図版157）

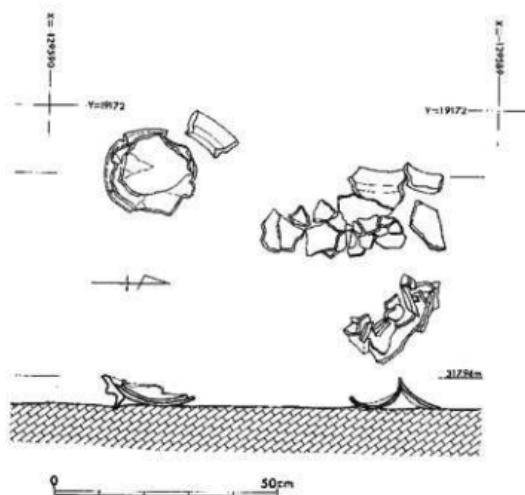
淡赤褐色土を除去して精査を行ったところ、柱穴等の建物跡は検出しなかったが、幅50～60cm、深さ60～90cmの溝状の遺構を検出した。溝状遺構は東西方向と南北方向の溝が途中で合流しており、かつ、溝が途中で浅くなっているところもあるので6本あるように見えるが東西方向に2本、南北方向に2本確認された。時期は確定していないが、I区の下方に「内ヶ原鉄穴」という地名がみられることを考慮すると、鉄穴溝である可能性が高い。なお地元の人の話によると鉄穴流しの技術を応用して、山の斜面の土砂を流し、平地を造成するという土木技術があったということで、淡赤褐色土は鉄穴流しの結果ここに堆積しただけでなく、平地造成のために土砂をここに流した結果堆積したものであることも考えられる。

#### (7) 弥生土器包含層

ピット群 淡黒褐色土・茶褐色土を掘り下げたところでピット群と加工段を検出した。ピットは大きいもので直径約40cm、深さ約20cmを測る。小さいものは直径約15cm、深さ約20を測る。お互いの



第7図 I区掘立柱建物跡実測図



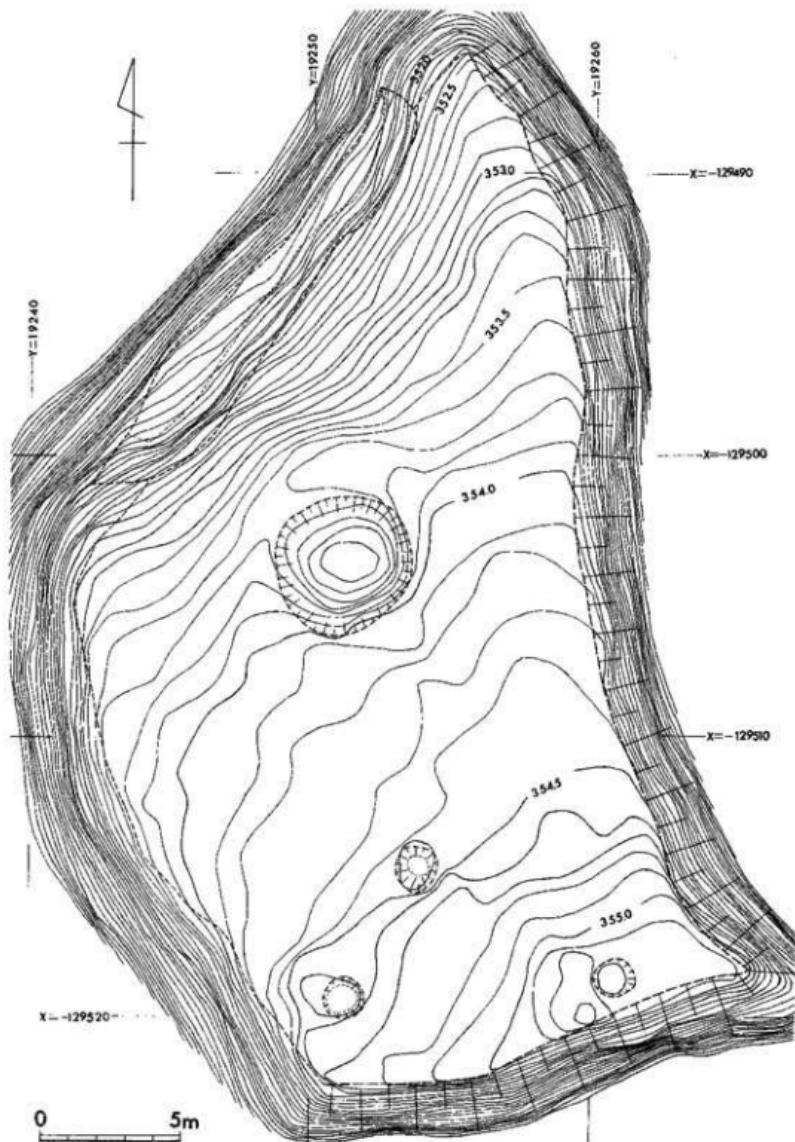
第8図 I区弥生土器出土状況実測図

関係をつかめるものではなく建物跡等を把握するまでには至らなかったが、特に調査区東半のピット群については、付近から多くの弥生土器片が出土していることから弥生時代の遺構である可能性が考慮される（第5図下段・第7図、図版158）。

**土器出土状況** 茶褐色土、淡黒褐色土中より弥生土器片が出土した。これらはほとんどが散在した状態で出土しているが、1箇所だけ集中して出土したところがある。器種は甕形土器で、出土状況は頸部

を打ち欠き、口縁の上に胸部片を2段重ねにして置いた状態であった。土器の周囲には幅約20cmにわたり炭化物がめぐっており、別固体の土器が散布していた。土器の下面に焼上があることが予想されたので精査を行ったが明確な焼土は検出できなかった（第8図、図版160-1）。

**加工段** 加工段は調査区西半の表土下約2mで検出された。丘陵斜面を切削加工して平坦面を造り出したもので、現状での規模は最大幅1.6m、長さ7.5mあまりのものである。平坦面には浅い溝とピットが確認されており、掘立柱建物が建っていたものと考えられる。溝は幅20cm、深さ5cm程度のもので、斜面を切削した壁際には1条（鍵形で長さ約3.5m）、平坦面中央に2条（長さ4.5mのものと1.5mのもの）ある。柱穴と考えられるピットは、大きいもので直径約40cm、小さいもので直径約15cm、深さは共に30cmあまりのものである。平坦部及びその東側斜面で16個確認されているが互いの関係をつかめるものはなかった。溝が数条あることや、小範囲に多くの柱穴と考えられるピットがみられることから同一場所において數度の建て替えが行われたものと考えられる。この加工段周辺ではわずかばかりの弥生土器片しか出土していないので、建物跡の年代については不明であるが、土層の状況などからすると弥生時代の可能性もある（第7図、図版159）。



第9図 主郭発掘前地形図

### 3. 第Ⅱ区の調査

#### (1) 主郭

主郭の東斜面と南斜面のはほとんどは近世の鉄穴流しによって土砂が流出しており、原地形が残存しているのは、丘陵頂部の平坦面と西斜面及び南斜面の一部である（第3図）。

主郭の平坦面は、南北約30m、東西約20mが遺存しており、面積は約484m<sup>2</sup>ある。平坦面は緩やかに南から北へ傾斜しており、最も高い南東端と最も低い北東端との比高差は約3mである。

発掘調査前の表面観察では、南斜面に堅壠状の溝を1箇所と平坦面に直径4～5m、深さ40～50cmを測る溜井戸状の穴を1箇所、直径50～60cm、深さ20～30cmの穴を3箇所確認した（第9図、図版162-1）。

**主郭平坦面の遺構** 土層の状況は表土下に暗黄褐色土が20～40cm堆積し、その下面の黄褐色土が地山となる。主郭は地山を削平して造られており、調査区内においては明確な盛土等はみられなかつた。暗黄褐色土が遺物包含層であり、地山面で遺構を検出することができた。主郭平坦部で検出した遺構はピット群、掘立柱建物跡（SB01）、溝（SD01）、鍵形落ち込み（SX01）、溜井戸状遺構である。

**ピット群** 発掘調査の結果、掘立柱の柱穴と思われるピットを80数個検出した。ほとんどのピットは直径20cm内外、深さは30cm程度で内部に堆積した土は褐色土でしまりがあり、炭化物を含むものが多い。ピット中から土師質土器や鉄釘を検出したものもあることから、これらのピットは城のあつた時期の建物跡等に関係するものと考えられる。

これらのピット群は直線的に並ぶものもあるが、ほとんどお互いの関係をつかめるものはなく掘立柱建物跡と推定できたものは1棟のみであった。ただしピットの数が多數あることや、近接したものが存在すること等から、かなり建て替えを行っていたようである。ピットの大きさから考えると、あまり大きな建物や柵ではなかったものと推測される（第11図、図版161-2・162-2・174）。

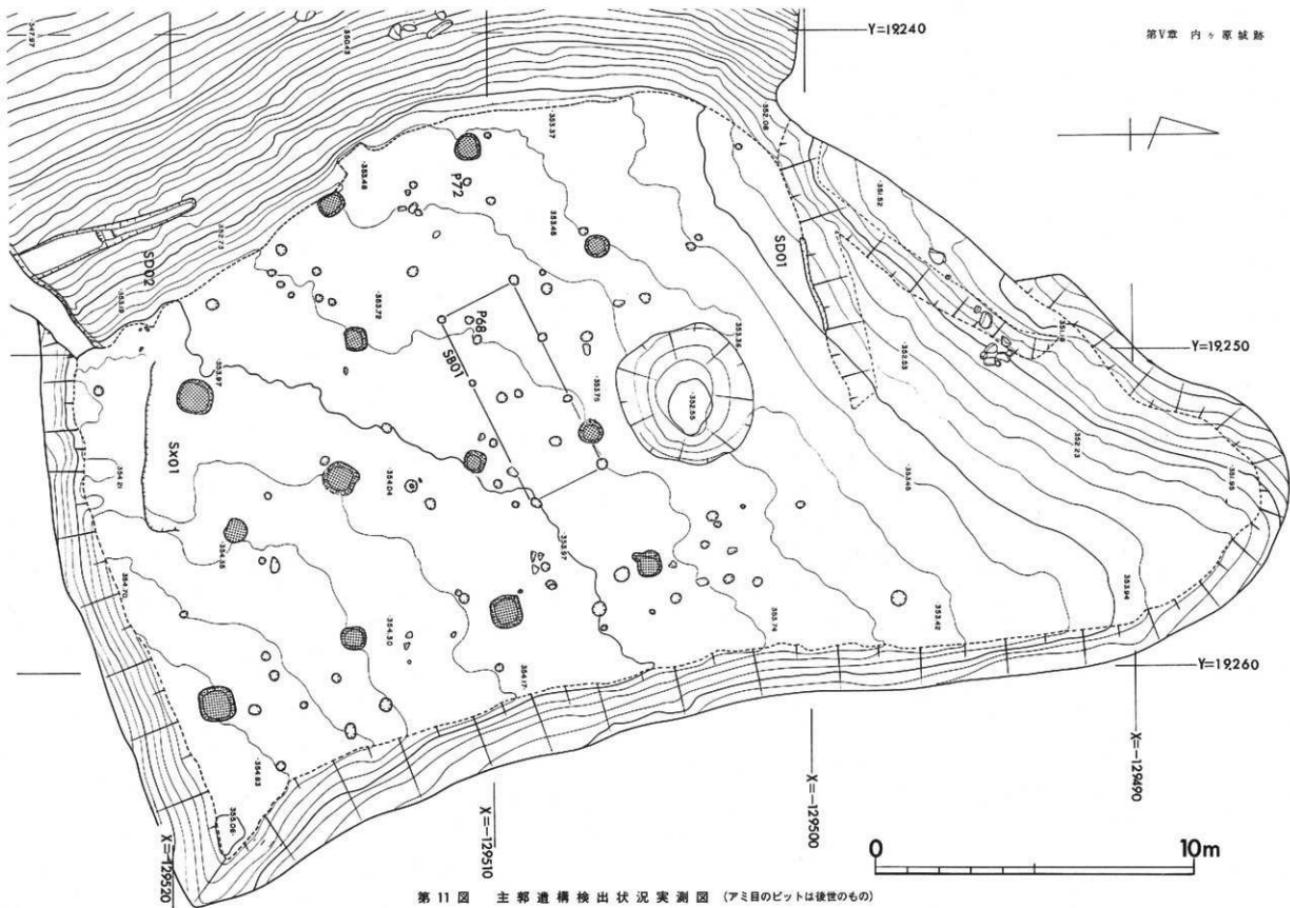
平坦面及び溜井戸状遺構の中に直径約30cm、厚さ約10cmの大の石（地山に含まれている石とは種類の異なる川石状のもの）が數十個認められた。原位置を保っていると思われる石は皆無であったが、持ち運ばれてきた石材と考えられることや、大きさ、形状からすると建物の礎石となる可能性もあり、ここに簡単な礎石建物があったことも考えられる。

なお、直径80～90cmの大型のピットは表面観察で確認したものも含み、内部の土にしまりがなく、土層の観察によると地表面から掘り込んだものであり、近所の住民の話によると戦後この場所に栗を植林したことのあるので、その際の穴と判断された。

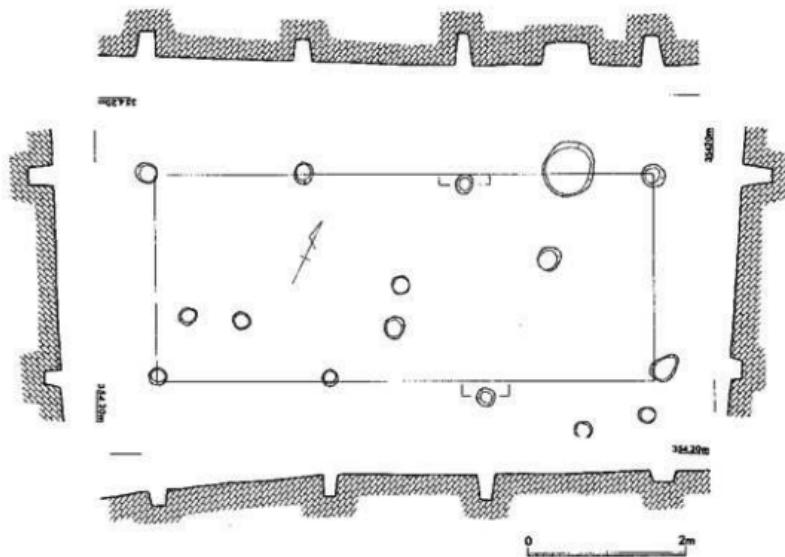
**SB01** 主郭中央のやや北寄りで確認された掘立柱建物跡である。規模は3間（6.30m）×1間（2.60



第10図 内ヶ原城跡調査後地形測量図



第 11 図 主郭造構検出状況実測図 (アミ目のピットは後世のもの)



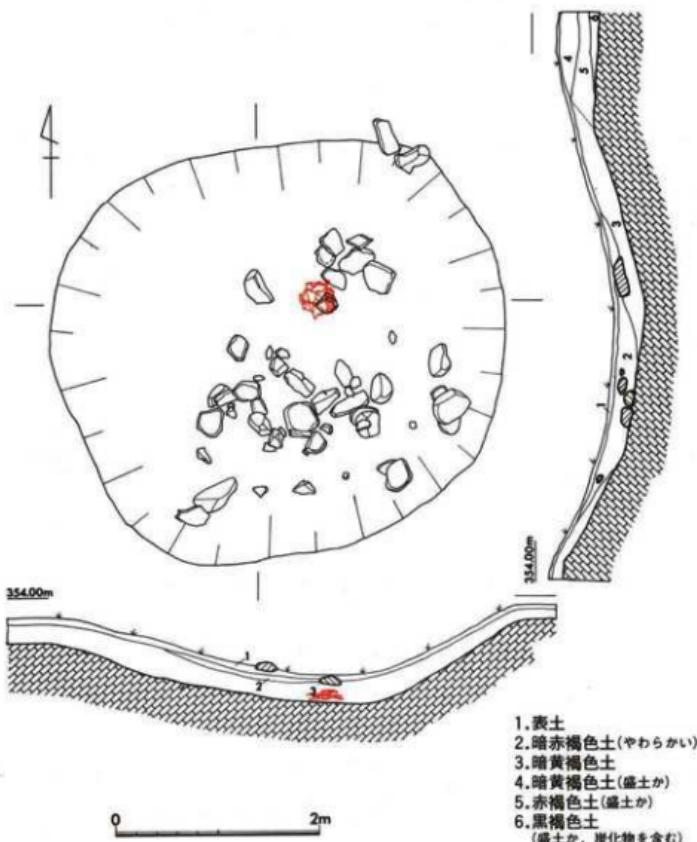
第12図 主郭櫻立柱建物跡(SB01)実測図

m) あり、東西に長い建物跡である。柱間寸法は北側の桁行が西から1.9m, 2.0m, 2.4m, 南側の桁行が西から2.2m, 2.0m, 2.1mとなる。梁間は、2.6mを測る。柱掘形は径20~30cmの円形のもので、深さは15~40cmある（第12図）。

**SD01** 平坦部の北側に位置し、ほぼ東西方向に走る溝である。幅20cm、深さ10cmあまりの細いもので、長さは3mある。ここでは溝として扱ったが両端が閉ざされており排水等の溝とは考えにくい（第11図）。

**SX01** 平坦部の南側で検出した鍵形の落ち込みである。遺構検出面からの深さは約45cmあり底面はほぼ水平になっている。底面平坦部の範囲は5.3×2mある。土層は底面直上から上層に向けて、黄褐色土（炭化物を若干含み、粘性あり）、黒褐色土（炭化物を多量に含み、粘性少ない）、暗黄褐色土（炭化物を含み、しまりあり）となっており、一部に焼土も見られた（第14図、図版163）。炭を多量に含む層は4.3×2.1mの範囲で小判形に広がった状態で認められた。この落ち込み内では黒褐色土上面で、土師質土器、土錐、鉄滓が出上した（第11・14図、図版163）。

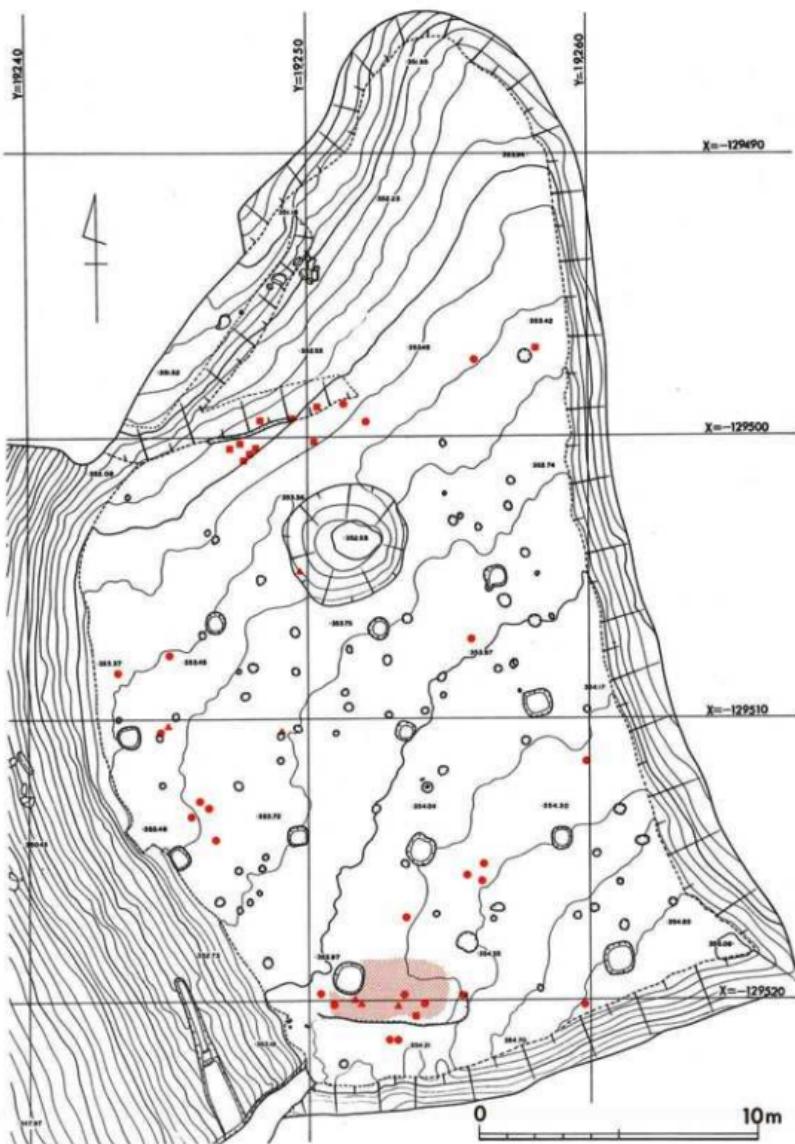
**溜井戸状遺構** 溜井戸状遺構は平面が円形、断面が鐘鉢状を呈するもので、直径約5m、深さ約80cmを測る。表上下に暗赤褐色土や暗黄褐色土が20~30cm程度堆積しており、北端にはこの遺構を握



第13図 潤井戸状遺構実測図(赤色は陶器甕)

り上げた際の盛土と思われる暗黄褐色土や赤褐色土、黒褐色土が40~50cm程度堆積している。

この遺構の埋土からは、川石と思われる直径約30cm、厚さ約10cmの石を十数個検出した他、陶器製の甕を検出した。甕は遺構の底部ではとんど移動した形跡もなく、ほぼ1固体分検出できた。甕は石見焼のもので近世以降の所産であり、城の時期に伴うものではない。石はもともと平坦面にあつたものがこの遺構に投棄されたものと推定される(第13図、図版166・167)。



第14図 主郭遺物出土状況実測図（●土師質土器 ■土錘 ▲鐵製品・鉄滓 アミ目は炭のひろがり）

また、この遺構には、底部や壁面に粘土を張るなどの水を通さないようにするための構造がなく、溜井戸として利用されたとする積極的な根拠は得ることができなかった。何らかの物を焼却するために利用されていたとしても、明確な焼土、炭化物等を検出していない。以上のことから、この溜井戸状遺構の用途等を判断することはできなかった。

**遺物の出土状況** 遺物は大半が主郭平坦面から出土した。遺物の種類は、上師質土器の小片と十鍾、鉄釘、鉄滓等である。遺物の出土範囲は大きく3つに分けることができる。1つめは主郭平坦面の南端にある落ち込み(SX01)の周辺、2つめは主郭平坦面の西端、3つめは溜井戸状遺構の北側の部分である(第14図)。

1つめの主郭平坦面南端の落ち込み(SX01)の周辺では、土師質土器の小片の他、鉄滓が出上している。また、この落ち込みでは焼土が確認されている。明確な遺構ではないが、鉄滓を伴っていることが注意される。

2つめの主郭西端では土師質土器の小片と鉄釘、鉄滓が出上している。この中でもピット内から土師質土器片や鉄釘が出土していることから、主郭平坦面のピットが城に伴う時期のものであることが確認できた(図版165-1)。

3つめの溜井戸状遺構の北側では土鍾片が集中した形で8点検出された(図版165-2)。

### (2) 主郭西斜面

主郭の西側斜面からは溝(SD02)とテラスを確認した(第10・11図、図版174-1)。

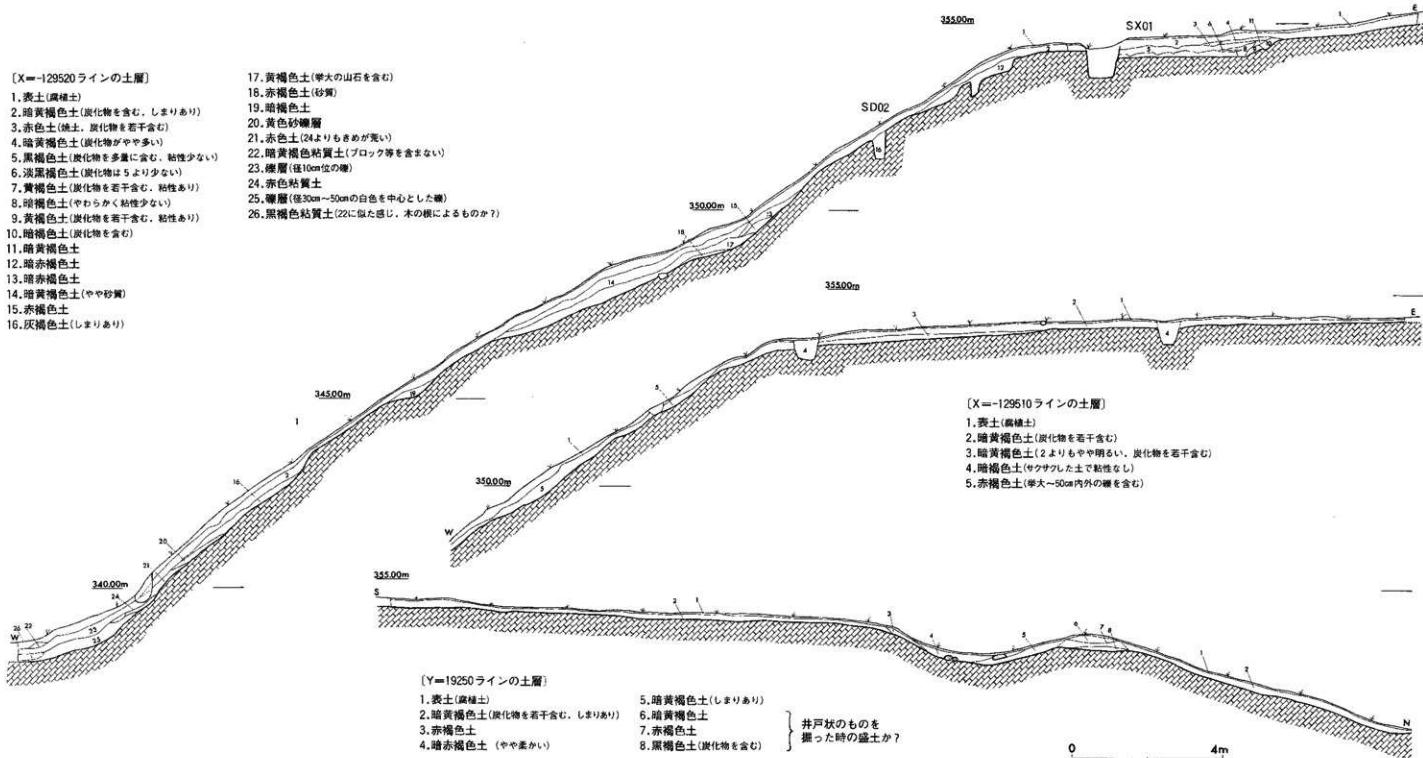
**SD02** 主郭平坦面から-2.5mのところで検出した溝である。確認した長さは5.7mあり、北端は閉ざされているが南端は不明である。幅は、北側が約40cm、南側が約100cmある。底面は南から北に向かって階段状に深くなっている。深さは南半部で75cm、中央部で145cm、北半部で190cmを測る。溝内には灰黒色土が認められたが遺物等は出土しなかった。

**テラス** 主郭西側斜面の中腹で、幅2~3mのテラスを確認した。確認し得た長さは約40mで、南から北に向けて緩やかに傾斜している道状のものである。標高は南端で340.98m、北端で338.94mを測る(図版171-1)。

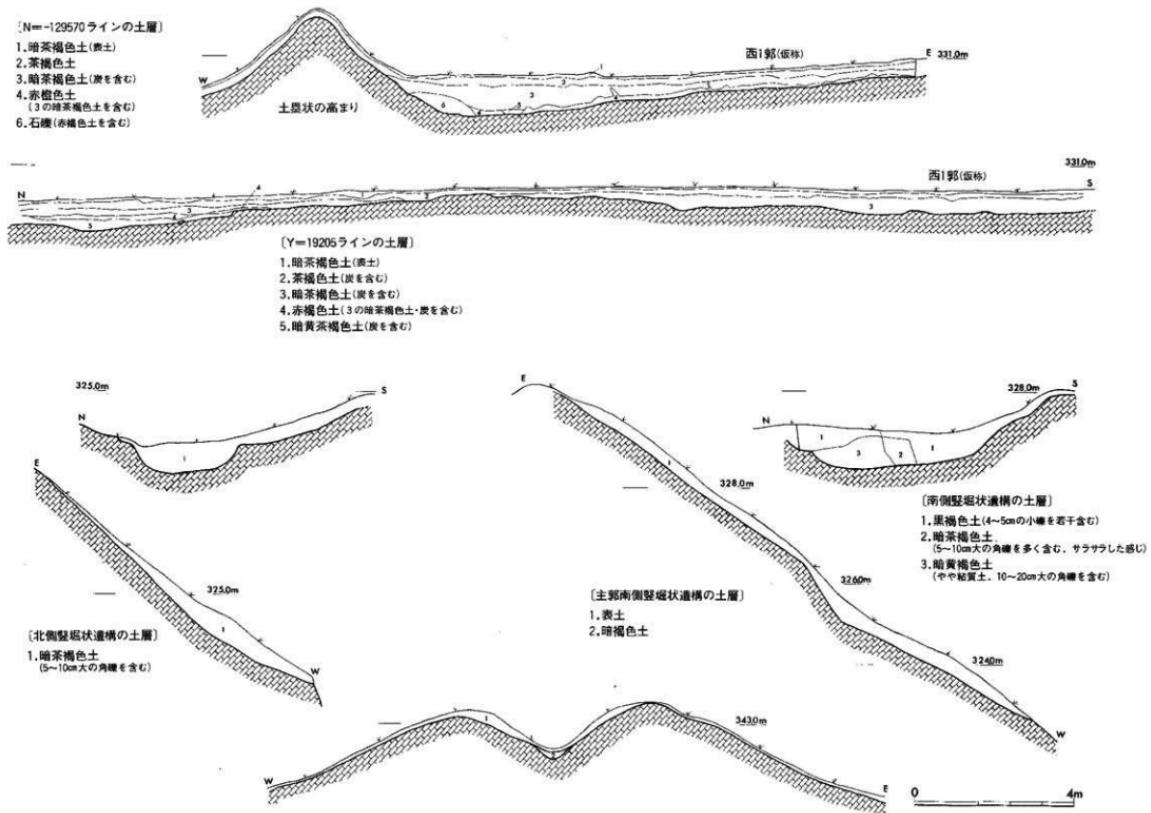
### (3) 西1郭

主郭の西斜面に位置する最初の平坦面で西側に土壘状の高まり(以下土壘と仮称する)がめぐらされている。この高まりは残存長で約30m、幅約4mで、平坦面からの高さは約2mを測る。北半ではほぼ直線をなし、南側ではわずかに東寄りに屈曲している(第10図、図版169)。

調査の結果、この土壘の実際の高さは約3mであることが判明した。土壘を断ち割ってみると地山削りだしのみで造られていた。一般的に土壘はこうした条件下では地山削剤と盛土によって構築されるのであるが、このような築き方は珍しい(第16図)。



第15図 II区土層断面図



第16図 西1郭・堅堀状造構土層断面図

平坦面は、幅約10m、長さ約30mを測る。当初、建物跡等の存在が予想されていたところで、調査前は椎茸の栽培に利用されており、戦中戦後は畠として利用されていた場所である。調査の結果、直径80cm程度の落ち込みが数個確認できたが、十層の観察により地表面から掘り込んだことがわかり、菜を植えた際の穴であると判断された。出土遺物は陶磁器の小片が数点と鉄器小片、砥石1点を検出したが何れも城の存在した時期よりも後世のものと考えられる。

#### (4) 帯郭・西2郭

西1郭の南斜面には幅約2m、長さ約35mの帯郭状のテラスが認められた。十層の観察によると重層的に盛土を行って築かれていることがわかる。なお、この盛土中からは用途不明の金属製品や黒曜石の小塊等が検出された。

帯郭の西端にある平坦面が西2郭と称したところである(図版170)。幅約8m、長さ約12mを測る。西1郭から続く斜面を削平して平坦面を造成し、南側の帯郭の続きがめぐる。西側にも土塁がめぐっていたと考えられるが、後世の削平のためか土塁は認められなかった。ここは、後にごみ捨て場として使われていたらしくガラスの破片やビニール等が陶磁器類に混じって大量に検出された。

#### (5) 堅堀状遺構

堅堀状遺構としたものは、主郭南斜面に1つと西1郭斜面に2つ確認された。

主郭南斜面のものは、幅約3m、長さ約25m、深さ約1mを測る。表土下には暗褐色土が約20cm堆積しているだけであった(第16図、図版171-2)。

西1郭斜面のものは土塁の下方に2つ位置している。南側のものは幅約3m、長さ約12m、深さ約70cmを測る。北側のものは幅約2.5m、途中で崩壊しているが残存長で7m、深さ約60cmを測る。何れの堅堀状遺構も埋土が単層であることが注意される(第16図、図版172)。

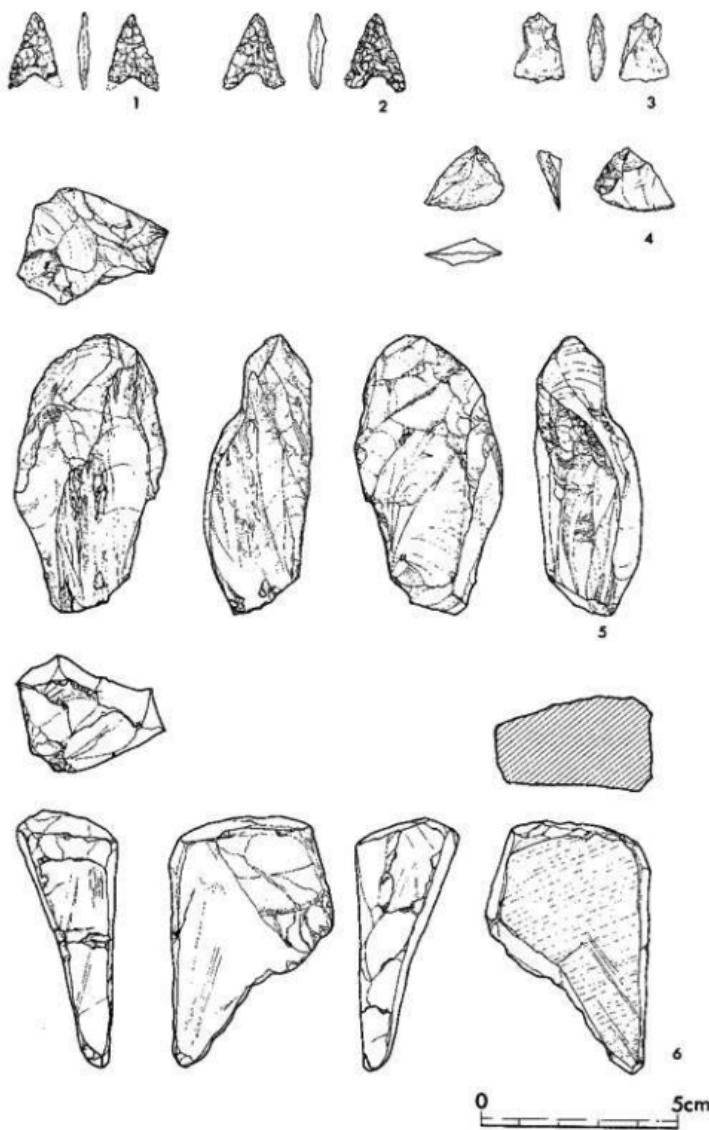
### 4. 出土遺物

#### (1) 石器ほか(第17図、図版175)

1は黒曜石製の石鎚で、I区(N4W12)の茶褐色土下面から出土した。長さ約2.0cm、推定復元最大幅約1.3cm、厚さ約0.2cm、重さ約0.7gを測る。両面に1次調整の後の細かな2次調整が観察できる。また、一部に欠損が認められる。

2は安山岩製の石鎚で、I区第5トレンチの淡褐色土中より出土した。完形品で、長さ約2.0cm、最大幅約1.6cm、厚さ約0.4cm、重さ約0.7gを測る。1同様、両面に細かな2次調整が施されている。1・2共にわたぐりが深く、基部はいずれも凹基式である。

3はI区(N4W12)の茶褐色土下面から出土した石英の石片である。使用痕は認められない。長さ約1.8cm、最大幅約1.1cm、厚さ約0.4cmを測る。



第17図 石器実測図

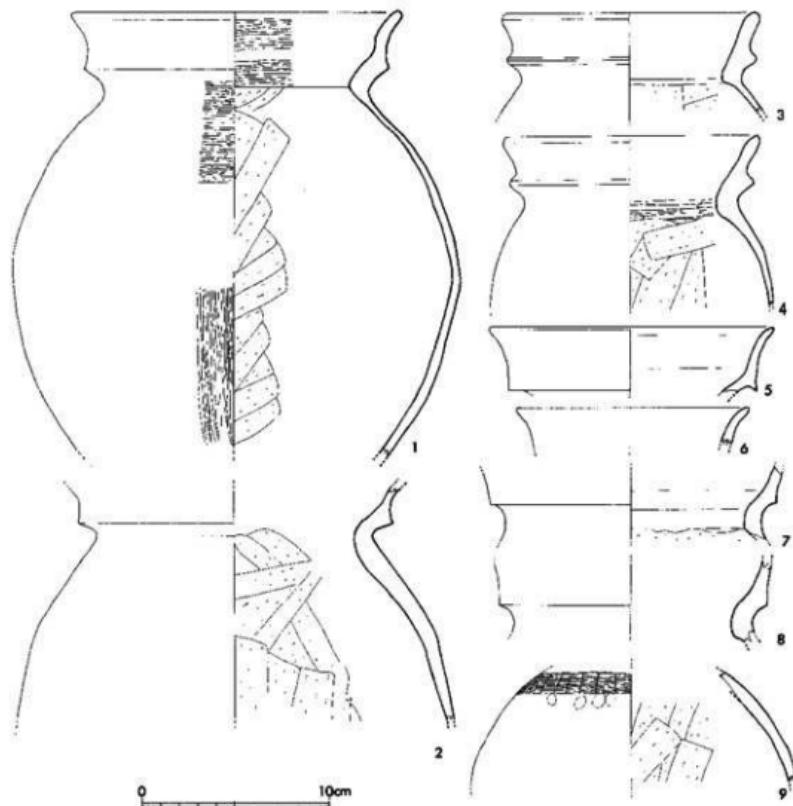
4はⅠ区第2トレンチの茶褐色土中から出土した黒曜石の石片である。長さ約2.0cm、最大幅約1.4cm、厚さ約0.5cmを測る。2次調整の跡が観察でき、刃部には使用痕が認められる。

5はⅠ区(N2W10)の暗茶褐色土中から出土した黒曜石の石塊である。最大長約7.0cm、最大幅約3.7cm、最大厚約2.6cmを測る。

6はⅡ区(N4W8)の茶褐色土中より出土した凝灰岩製の砥石である。幅約3.7cm、最大厚約2.7cmを測る。長方形を呈すると思われるが欠損のため長さは不明である。

(2) 弥生土器 (第18・19図、図版176・177)

弥生土器はいずれも第Ⅰ区の茶褐色土あるいは淡黒褐色土中より出土したものである。図示し得

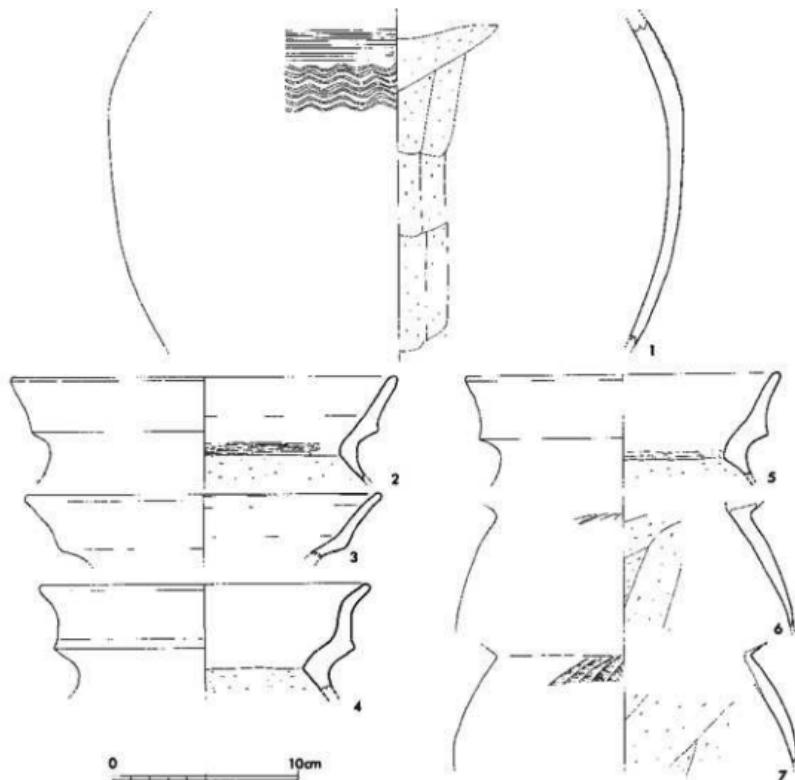


第18図 弥生土器実測図(A)

た土器は16点で、器種としてはほとんど變形土器である。第18図-7・8は頸部がやや長く壺形土器のようにもみえるが、小片のため不明確であることから、ここでは便宜上變形土器の範疇に含めておくことにする。これらには大きくみて口径23~25cmの大形、口径17~20cmの中形、口径13~15cmの大形のものがある。

大形のものは第19図-1のみである。肩部に櫛描の直線文と波状文が施され、外面は丁寧なナデ、内面はヘラ削りが行われている。

中形のものは10点あり、最も多い。これらは口縁部の形態にバラエティーがあり、複合口縁であるが、逆「ハ」の字形に直線的に延びるもの（第19図-2），口縁部が大きく外反し頸部以下は極端



第19図 弥生土器実測図(B)

に器肉が薄くなるもの（第18図-1・2、第19図-4・5）、直立ぎみに立ち上がり頸部がやや長いもの（第18図-7・8）、口縁部の器肉が全体に薄く大きく開くもの（第19図-3）などがある。これらの口縁部は、内面へラ磨きで外面ヨコナデのもの、内外面ともヨコナデのものがあり、胴部外面にはヘラ磨きあるいはナデ、内面はヘラ削りのものがある。文様は肩部に櫛状工具による列点文を施したものがある。このほか、口縁部がないため不明確であるが中形に属するものとして第19図-6・7がある。

小形のものは5点あり、複合口縁であるが単純口縁の外面に突帯を付したような形態をとるもの（第18図-3・4）、口縁部が外反し端部が薄くなるもの（第18図-5・6）がある。第18図-9も小形に属するものであろう。口縁部はいずれも内外面ともヨコナデ、胴部外面はナデ、内面はヘラ削りが行われている。文様としては肩部に櫛状文を施したもの（第18図-9）がある。

これらの上器は出土状況からみてそう大きな時期幅は存在しないものと思われる。このことは、おおまかにみれば土器のもつ器形、文様、手法等についてもいえることである。さて、これらの土器群はいつごろの時期に属するものであろうか。石見山間部ではこれまでのところ資料が少ないと認め、当該時期の編年については確立されたものがない。そこで、仮に出雲地域の編年と対比してみると、明確に九重式土器や鍵尾II式土器の範疇に入るものはみられず、両型式の中間にあたる的場式土器<sup>(2)</sup>の特徴と類似するものが多い。ただし、的場式土器では口縁部外面に只あるいは櫛状工具で直線文を施すものが多いのに対し、この内ヶ原土器群にはそれが全くみられない。このことは地域性の違いに起因する場合、從来出雲地域で示されている的場式土器を口縁部に直線文を有するものとそうでないものによって細分することが可能な場合などが考慮されよう。これらについては今後の資料の増加を待って検討すべき課題といえる。

第1表 弥生土器一覧表

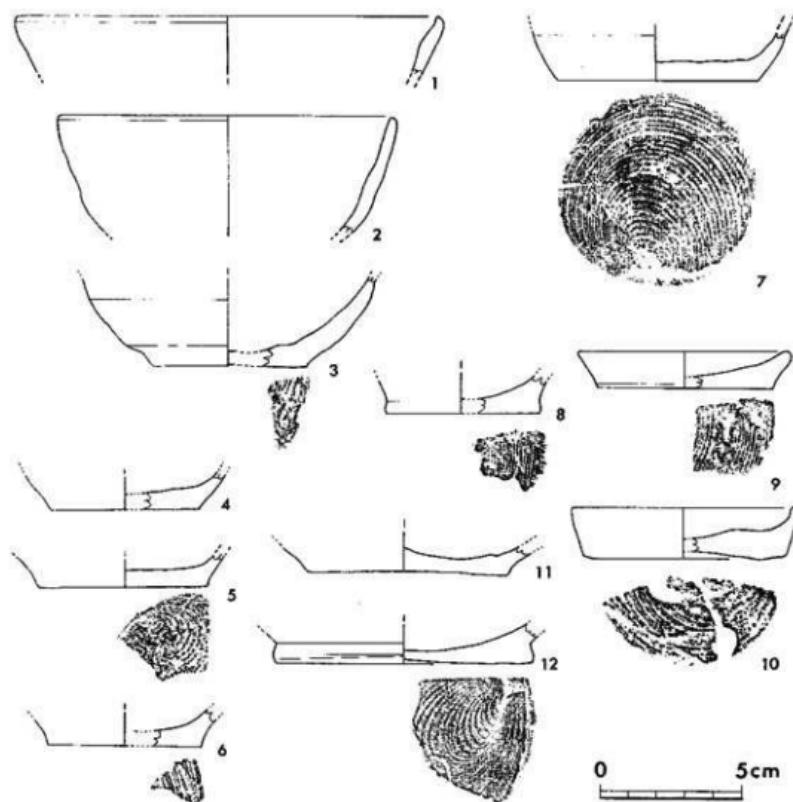
掲図番号	法量(cm)	形態・文様の特徴	手法の特徴	胎土・色調等	備考
18-1	口 横 17.6 胴部最大径24	複合口縁。頸部はゆるくくくの字状に屈折。胴部は卵形、最大径は中央よりやや上。口縁部の器肉は厚いが、頸部以下は3~5mm。無文。	口縁部外面ヨコナデ、内面ヨコ方向のヘラ磨き。頸部へ胴上半の外面ヨコ方向へラ磨き。胴下平テ方向へラ磨き。内面接部以下は頭著なヘラ削り。	1~2mm大の石英・長石等の砂粒を多く含む。 茶褐色土 No 3 881208 881212	I区N3W11
18-2	横部径 14.8	複合口縁。頸部はくくの字状に屈折。頸部~肩部の器肉は厚く10mm。無文。	口縁部外面ヨコナデ。内面はヘラ磨きか。頸部以下は外面ナデ、内面ヘラ削り。	1~3mm大の石英・長石等を多く含む。外面暗黄褐色、内面輪茶褐色。	I区第8トレンチ 淡黒褐色土 880830
18-3	口 横 13.8	複合口縁であるが、単純口縁の外面に突帯を付したような形態。器肉は口縁部は厚いが、頸部以下は2mmしかない。	口縁部外面ヨコナデ。内面はヘラ磨きか。頸部以下は外面ナデ、内面ヘラ削り頭著。	1~2mm大の石英・長石等を多く含む。黃褐色。	I区N3W14 暗茶褐色土 881212

辨認番号	法 標 (cm)	形態・文様の特徴	手 法 の 特 徵	胎 土・色 調 等	備 考
18-4	口 径 13.7	複合口縁。口縁部は外反し、端部は薄くなる。器肉は厚いが、頸部以下は薄い。 無文。	口縁部外面ヨコナデ。内面はヨコナデの後、簡単なへラ削きあるいはナデ。頸部以下は外面ナデ、内面顯著なへラ削り。	1~2mmの石英・長石等を多く含む。暗赤褐色。	I区N3W14 暗赤褐色土 881212 16-3と同一個体の可能性あり。
18-5	口 径 15.1	複合口縁。口縁部は外反し、端部は薄くなる。器肉は薄くシャープなつくり。	口縁部内外面ともにヨコナデ。	1~2mmの石英・長石等を多く含む。明赤褐色。	I区NSW11 茶褐色土 881201
18-6	口 径 12.4	口縁部は外反し、端部は薄くなる。器肉は薄くシャープなつくり。	口縁部内外面ともにヨコナデ。	1~2mmの石英・長石等を多く含む。外面明赤褐色、内面黒褐色。	I区N4W14 茶褐色土 881213
18-7	頸部径 13.6	複合口縁。頸部はゆるい「コ」の字形。	口縁部内外面ともにヨコナデか。内面頸部以下はへラ削り。	1~2mmの石英・長石等を多く含む。暗赤褐色。	I区N4W14 茶褐色土 881213
18-8	頸部径 12.7	複合口縁。頸部はゆるい「コ」の字形に屈曲。	口縁部内外面ともにヨコナデか。内面頸部以下はへラ削り。	1~2mmの石英・長石等を多く含む。明赤褐色。	I区N4W14 茶褐色土 881213
18-9		肩部に横状工具により複数箇所文を施す。	外面はナデ、内面はへラ削り。	1~2mmの石英・長石等を多く含む。暗黄褐色、外曲に炭化物付着。	I区N3W14 茶褐色土 881205
19-1	測量直径 31	肩部に横状工具(7本単位)による直線文(3種類描文に近いところもある)、波状文を施す。器肉は5~10mmあり、全体に厚い。	外面はていねいなナデ、内面は顯著なへラ削り。	1~4mmの石英・長石等を多量に含む。外面明黄褐色を呈し、炭化物付着。内面黄灰色。	I区N3W11 茶褐色土 881208
19-2	口 径 20.8	複合口縁。頸部は近い「コ」の字形。	口縁部内外面ともにヨコナデ。内面頸部ヨコ方向のへラ削き。内面頸部以下はへラ削り。	1~3mmの石英・長石等を多く含む。暗赤褐色。外曲に炭化物が多く付着。	I区N2W11 茶褐色土 881201 881205
19-3	口 径 19.1	複合口縁。口縁部は大きく開き、端部は薄い。口縁全体の器肉が薄い。	口縁部内外面ともにヨコナデ。	1~2mmの石英・長石・金屬母等を多く含む。黄褐色。	I区N3W11 茶褐色土 881206
19-4	口 径 17.8	複合口縁。口縁部は大きく外反。頸部は「く」の字形に屈折。	口縁部内外面ともにヨコナデ。内面頸部以下はへラ削り。	1~3mmの石英・長石等を多く含む。外面黄茶褐色。内面灰褐色、外曲に炭化物付着。	I区第2トレント 茶褐色土 880826
19-5	口 径 16.8	複合口縁。口縁部の器肉は厚いが、頸部以下肉は薄い。	口縁部内外面ともにヨコナデ。内面頸部はヨコ方向へラ削き。内面頸部以下はへラ削り。	1~4mmの石英・長石等を多量に含む。暗赤褐色。	I区N2W11 茶褐色土 881201
19-6	頸部径 13.7	頸部は「く」の字形に屈折。頸部にへラによる列点文の痕跡あり。	外面ナデ。内面顯著なへラ削り。	1~2mmの石英・長石・雲母等を多く含む。明黄褐色。	I区N3W11 茶褐色土 881205
19-7	頸部径 13.7	頸部は「く」の字形に屈折。肩部に横状工具による列点文を施す。	外面ナデ。内面顯著なへラ削り。	1~2mmの石英・長石等を多く含む。明黄褐色。	I区N3W11 茶褐色土 881205

## (3) 土師質土器 (第20図、図版178)

土師質土器は、完形に近いものは無く、小片が多い。図示し得たのは図中の12点であり、その大半が主郭の平坦面から出土している。12のみ、西の2郭付近から出土したものである。器種は碗が4点(1~3・7), 盆が2点(9・10), 器種不明の底部片が6点(4~6・8~11・12)である。碗は口縁部が2点(1・2), 底部が2点(3・7)出土している。

1は、口径約15cmを測るもので、口縁の端部がやや内側に屈曲するものである。胎土は黄褐色を呈し、砂粒をほとんど含まない。



第20図 土師質土器実測図

2は口径約12cmを測るものである。胎土は黄褐色で1mm以下の砂粒をわずかに含む。1・2共に、内外面とも回転ナデによる調整が行われている。

3は底部径約5.5cmを測るもので、やや内湾して立ち上がる。胎土は黄褐色を呈し1mm程度の砂粒をわずかに含む。底部外面には風化が著しく明確ではないが回転糸切り痕がみられる。

7は、底部径約7.0cmを測るもので、やや内湾して立ち上がる。胎土は赤褐色を呈し砂粒をほとんど含まない。内面は渦巻き状の押圧痕がみられ、外面は回転ナデによる調整が施されている。底部外面には回転糸切り痕が明確に認められる。

小皿のうち9は、器高約1.3cm、口径約7cm、底部径約6.3cmを測る。胎土は黄褐色を呈し、1mm以下の砂粒をわずかに含む。やや外反して立ち上がり、口唇部は厚い。外面は回転ナデによる調整が施される。底部には、風化が著しいものの回転糸切り痕が認められる。

10は、器高約1.8cm、口径約7.5cm、底部径約7.0cmを測る。胎土は赤褐色を呈し、1mm程度の砂粒を含む。垂直ぎみに立ち上がり、口唇部に向かって薄くなり、やや内湾する。内外面とも回転ナデによる調整が施され、底部には、回転糸切り痕が認められる。

器形を確認できなかった底部片は4～6・8・11・12である。

4は、底部径約5.3cmを測るもので、胎土は黄褐色を呈し、1mm以下の砂粒を含む。内面に炭化物がわずかに付着していることが確認できる。

5は、底部径約6.0cmを測るもので、胎土は黄褐色を呈し、1mm以下の砂粒をわずかに含む。内面はほぼ水平にナデ調整され、炭化物の付着が認められ、外面は回転ナデによる調整が行われている。

6は、底部径約5.5cmを測る。胎土は黄褐色を呈し、1mm以下の砂粒を含む。内外面は共に回転ナデによる調整が行われている。

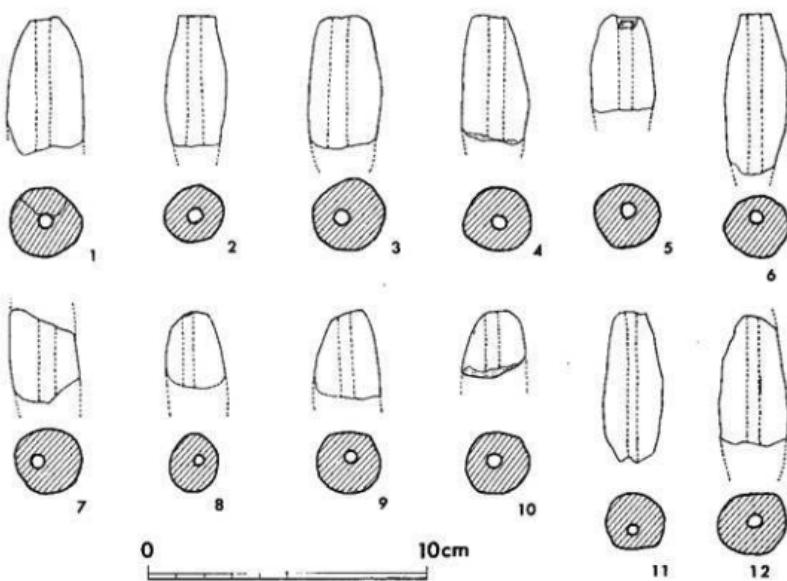
8は、底部径約5.5cmを測る。胎土は黄褐色を呈し、1mm以下の砂粒を含む。4～6・8は何れも底部外面に回転糸切り痕が認められた。

11は、主郭で検出したピットの内部(P72)から出土したもので、底部径約7.0cmを測る。胎土は赤褐色を呈し、1mm程度の砂粒を少量含む。内面は中心部が少し高くなり、周囲には回転押圧痕が認められる。外面は回転ナデが施されており、底部外面は焼けた跡のように黒褐色を呈す。

西2郭から出土した底部片(12)は底部径約9.3cmを測る。胎土はわずかに赤みがかった白色を呈する。内外面ともにいねいな回転ナデが施されており、底部外面には回転糸切り痕が明確に認められる。胎土や質からみて、他の遺物よりも新しいものの可能性が高い。

#### (4) 土錘(第21図、図版179-1)

土錘は全部で12個出土している。そのほとんどが主郭平坦面の溝井戸状遺構の北側からまとまって



第21図 土錐実測図

出土した。6のみは主郭西斜面から出土している。

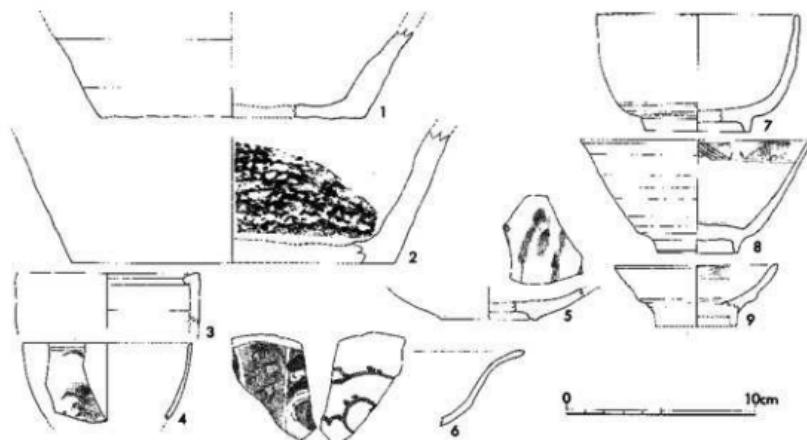
完形のものがないために大きさその他を正確に判断することはできないが、直径は約2.0~2.5cm、長さは6~7cm程度と推定される。胎土は黄褐色を呈し（6のみは、灰褐色を呈する）、1~2mm程度の砂粒を含む。

十錐の形は、いずれも両端がすぼんだ形のものであるが、端部が直線的になるもの（2・6など）と、丸くなるもの（1・3・5・8・9・10・11など）がある。

##### (5) 陶磁器類（第22・23図、図版182）

陶磁器類は、40数点出土しており、その大半がI区より出土している。II区から出土したものは11点のみである。小片のものが多く、図示し得たものは図中の10点である。

第22図-1は、無釉やきしめの壺で、I区第9トレンチの赤褐色土中から出土したものである。底部には「ごま」といわれる自然灰の釉が融着しているのが観察できる。底部径は14cmを測るもので、粘土組を巻き上げた後にろくろによる整形が施されている。胎土は紫褐色で砂粒等はほとんど認められず、密である。胎土や焼成の状況より、戦国期（16世紀中頃）の、備前の壺と考えられる。



第22図 陶磁器実測図

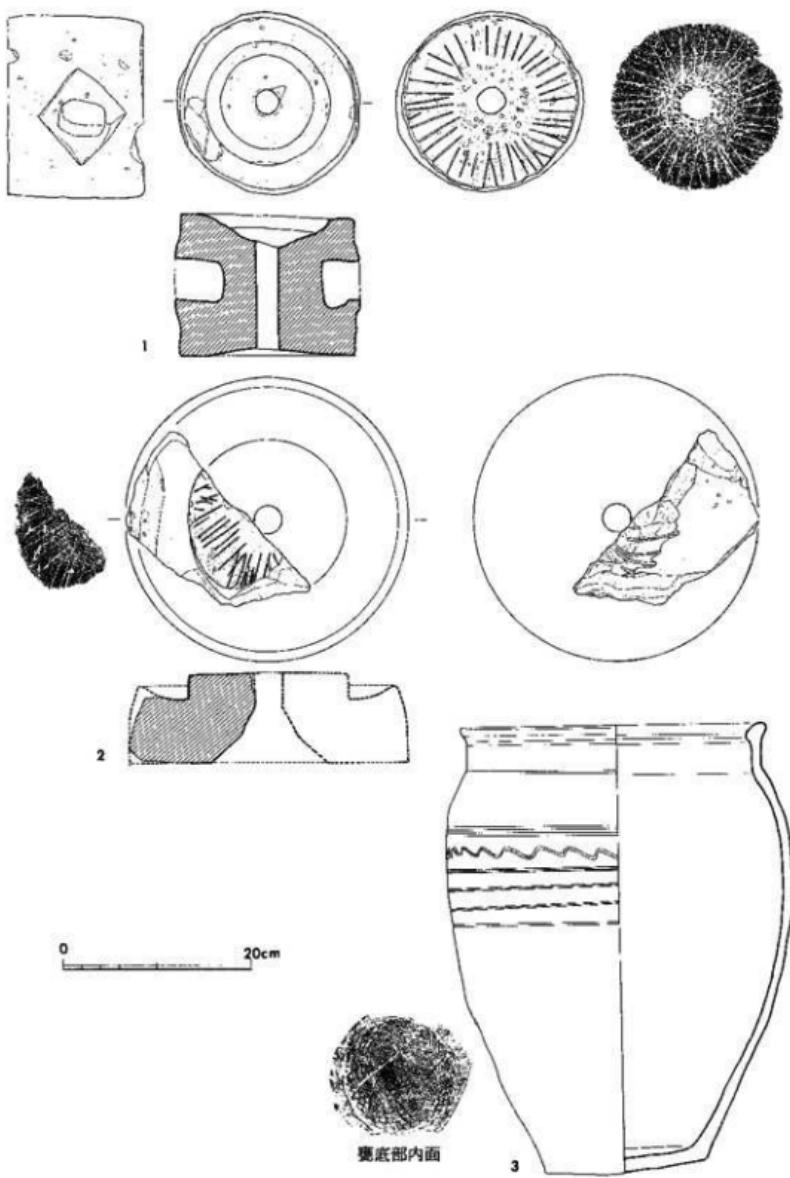
第22図-2は、鉄釉の壺の底部で、I区(N6W12)の茶褐色土中から出土したものである。底  
部径は、17cmを測る。胎土は、赤茶褐色を呈し、砂粒等は含まれていない。外面は、ろくろによる  
回転ナデ調整が施され、薄い鉄釉が施されている。内面には格子状のタタキが顯著にみられる。江  
戸時代初期よりみられる形態であるが、後世にも同様の形態がみられることから時期は確定できな  
い。

第22図-3は、香炉の口縁の一部で、I区(N6W8)茶褐色土中から出土したものである。口径  
は9.5cmを測り、胎土は淡青灰色を呈する。外面には、淡灰緑色の釉が施され、内面には口縁の周  
囲のみに釉が施されている。江戸時代前期以降のものと考えられるが、時期は不明である。

第22図-4は、I区(N6W8)の茶褐色土中から出土した碗で、口径8.7cmを測る。胎土は黄白  
色で、器壁は薄い。外面口縁に二重円、胸部に花草文が染付けられ、全面に貫入がみられる。器種  
は不明であるが、江戸時代後期のものと考えられる。

第22図-5は、I区(N6W8)の茶褐色土中から出土した小皿の底部で、底部径5.1cmを測る。  
胎土は乳白色で、淡青灰色の釉が施されている。内面には、淡青紫の染付けが施されている。高台  
には、重焼の際に乱雑に付着した釉が観察できる。江戸時代前期の(1640~60年代)の伊万里焼と  
考えられる。

第22図-6は、I区表土中より出土した染付けの小鉢であり、口径は18.0cmを測る。外面にはいわ



第23図 石臼・陶器実測図

ゆる蛸唐草文、内面には縦に区画して割り付けた中に芙蓉文が施されている。胎土は白色で焼成も良く非常に硬質である。江戸時代前期（17世紀）よりみられる形態であるが、後世にも同様の形態がみられることから時期は確定できない。

第22図-7は、II区（N5W11）の茶褐色土中から出土した碗である。口径10.7cm、器高6.1cmを測る。胎土はやや黄白色で細かい。高台は平坦ではとんど肥厚はみられない。内外面ともに透明な釉が施され、細かい貫入が全面にみられる。高台付近は釉が施されていない。江戸時代以降のものと考えられるが時期は不明である。

第22図-8は、1区（N5W11）の茶褐色土中から出土した高台付き磁器碗である。口径は12.3cmで、器高は6cmを測る。高台に肥厚はほとんどみられない。胎土は乳白色を呈する。外面には薄い青磁釉が施されている。内面には、口縁に四方摩文の便化した文様がみられ底部に五劍菱文が施されている。江戸時代後期のものと考えられる。

第22図-9は、I区第7トレンチの黄褐色土中から出土したもので、小皿もしくは小盆であると思われる。口径8.7cmを測るもので、わずかに高台の欠損部が観察できるが、その形状は不明である。外面には青磁釉が、内面には無色の釉が施されている。胎土は密で青灰色である。内面の口縁部に四方摩文の便化されたもの、底部に二重円が染付けられている。江戸時代後期のもので、第22図-8と同じ窯で生産された可能性も考えられる。

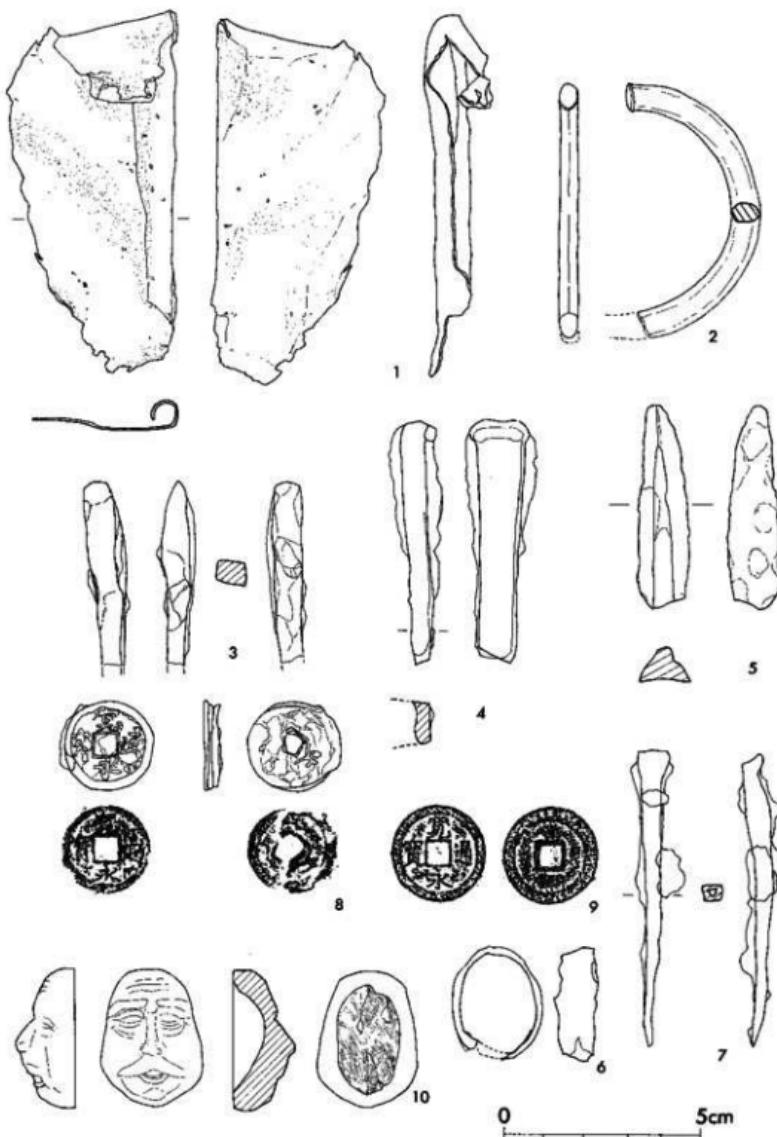
第23図-3は、主郭の溜井戸状遺構から出土した甕である。口径約33cm、器高約48cmを測る。肩はほとんど張らず、口縁はほぼ垂直に立ち上がっている。口唇部はやや外反しており、肥厚している。肩に2本の沈線がまわり、その下に波状の沈線がまわる。さらに、胴部には螺旋状に沈線がまわっている。胎土は赤茶褐色を呈し、緻密である。内外面ともにナデによる調整が施され、内面底部分には格子状タタキ目の跡がみられる。口縁上部に、内外面ともに薄い鉄釉が施されている。江戸時代以降のものと考えられるが、詳細は不明である（図版176-4）。

#### (6) 石臼（第23図、図版180・181）

この石臼は、1区の第10トレンチの地山上面から出土した。

上石は完形で、直径約20cm、高さ約15cmを測る安山岩製のもである。上面は周縁が一段高くなっている。中央部には径2.2cmの心棒孔兼供給口が貫通している。側面には挽き木の打込孔が2個所対称な位置に設けられており、この孔の周辺には菱形の装飾が認められる。裏面は、ふくみが約4mmと大きく、供給口を中心にして放射状に溝が切られている。溝は細かく切られており一定のパターンは認められず、使用のためかなり擦り減っている。

下石は復元すると、上面の直径19.5cm、受皿部の直径32.5cmを測る。全体の約1/4程度が残存しており、上面には放射状の溝が粗雑に切られている。周縁は使用のためかなり擦り減っている。心



第24図 金属製品・土製品実測図

棒孔が末広がりにあけられており、孔内に溝が切られている。上石と同じく安山岩製のものである。

#### (7) 金属製品その他 (第24図、図版183)

1は、I区の茶褐色土から出土したもので、最大長9.0cm、最大幅4.3cmを測る。素材は鉄であるが、鋒はほとんどみられない。端部は人為的に折り曲げられている。用途は不明である。

2は、I区（帝郭と仮称した地区の法面）の茶褐色土から出土した半円形を呈するもので、断面径約0.7×0.5cm、外径約6.5cmを測る。素材は銅と思われ、青緑色を呈する。もともとは円形であると思われるが、半円形の可能性もある。用途は不明である。

4は、I区の黄褐色土から出土した鉄製品で、長さ約6.0cm、幅約1.0cm、厚さ約0.3cmを測るものである。

3は、II区（西1郭）の茶褐色土から出土したもので、残存長約4.5cm、幅約0.7cm、厚さ約0.6cmを測るものである。

5は、II区（西1郭）から出土したもので、残存長約5.0cm、幅約1.2cm、厚さ約0.8cmを測るものである。3・5ともに用途は不明である。

6は、II区堅堀状遺構の埋土中から出土したものである。幅約1cm、厚さ約0.2cmの板状のものを環状に曲げたもので、長軸約3.0cm、短軸約2.2cmを測る。素材は鉄であるが、用途は不明である。

7は、II区（主郭）のピット68の埋土から出土した断面四角形を呈する鉄釘である。長さ7.4cmを測り、頭部が鍔形に曲がる。

8・9は、II区（西2郭）から出土した寛永通宝である。8は3枚が鋒により付着した形で検出された。9は、遺存状態が良好で、径2.45cm、重さ3.9gを測る。

10は、I区の表土から出土したもので、長軸約3.5cm、短軸約2.5cm、厚さ約1.5cmを測る。熟年男性の意匠が模らされた上製の人形（顔部）で、型造りされたものと思われる。

## 5. 小 結

今回の発掘調査の結果、主として弥生時代の遺構と中世山城に関係する遺構を確認することができた。

#### (1) 弥生時代の遺構について

第I区とした谷部にあたり、表土下約70cmの淡黒褐色土・茶褐色土を掘り下げたところでピット群と、加工段が検出された。調査区東半のピット群は、大きさや形状などからすると杆穴と推定されるものであったが、この区域では明確な堅穴式住居跡や掘立柱建物跡といったものを確認することができなかった。いずれにしても、何らかの集落に関係する遺構と判断された。

第I区西半部では、加工段とピット群を検出した。これは、加工段とピット群の位置関係などか

ら掘立柱建物跡と考えられるものであったが、数度の建替が行われているようで、建物跡の規模等については確認することはできなかった。

これらのピット群・加工段は、出土した弥生土器の特徴から弥生後期後半のものと判断される。この推測が正しいとすれば、これまで石見地方では、弥生時代の掘立柱建物跡が全く知られていないかっただけに新知見を得たということができよう。谷部の西向き斜面に当たり、湿気の多いところでもあることから集落立地としては最適の地とはいえないまでも、こうしたところにも集落関係遺構の存在することが判明したといえる。今後の調査にあたっては、このような立地条件のところも十分注意しておく必要がある。

なお、遺物・遺構の検出量や土器の形式からみて、この地点において集落が営まれたのは比較的短期間であったと考えられる。

## (2) 山城跡について

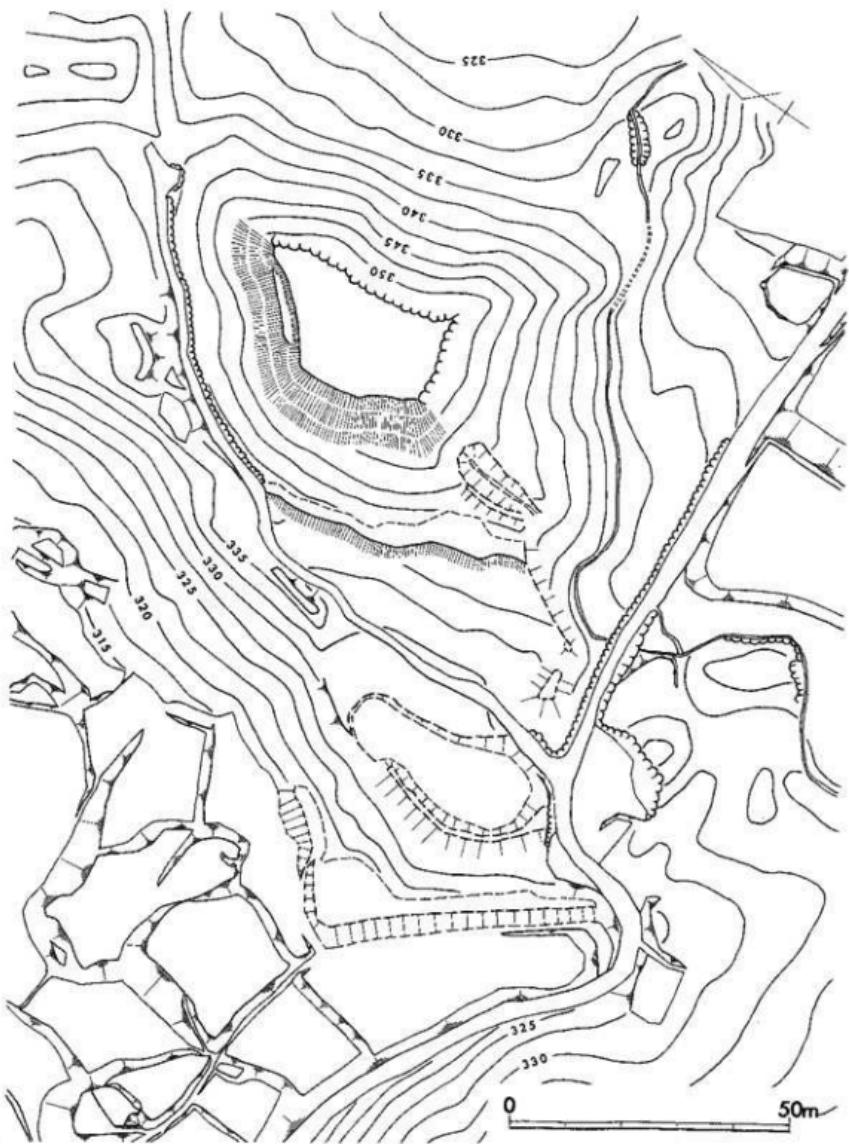
発掘前の表面的な観察に基づき、便宜的に丘陵頂部の平坦面を主郭、その西麓の平坦面と土壘状の高まりを西1郭、さらにその西側下方の平坦面を西2郭と仮称して調査を進めてきた。主郭としたところは、東斜面と南斜面の大半は近世の鉄穴流しによって破壊されていたが、丘陵頂部の平坦面においていくつかの遺構を検出することができた。このうち山城に直接関係すると判断されたものはピット群、SB01、SD01である。約80個検出されたピット群は径20cm、深さ30cmあまりのもので、いずれも柱穴になるものと思われ、1棟の掘立柱建物跡（SB01）を確認した。SB01は、主郭のほぼ中央に位置する東西方向に長い建物（3間×1間）である。多くのピットがあることからこの周辺において、さらにいくつかの小規模な建物跡や柵跡の存在が予想されるが、現段階では確定することができなかった。SD01は覆土の状況がピット群と類似していることから山城に関係するものと判断されたが、性格等については不明である。

このほか、SX01とした鍵形の落ち込み内からは士師質土器、十錘、鉄滓が出土しており山城に関係する遺構の可能性がある。ここでは鉄滓のほか灰、焼土が確認されており、小鋳冶を行った場所とも推測されるが、確証を得るまでには至らなかった。

また、沼戸戸状遺構としたものが山城に関係するものかどうかは不明である。内部の堆積土量が少ないと底面で近世以降とみられる石見焼の甕が出土していることから後世の掘り込みである可能性が高い。

主郭西斜面で検出したSD01は埋土の状況から城に伴うものと判断されたが、用途等については不明である。主郭西斜面中腹のテラスは、主郭平坦部から西1郭と称した部分にかけての斜面が後世の改変をほとんど受けていないと考えられたことから山城に伴う可能性が強い施設と判断された。

西1郭と仮称した平坦部では建物跡等を確認することができなかった。土壘状の高まりは地山を

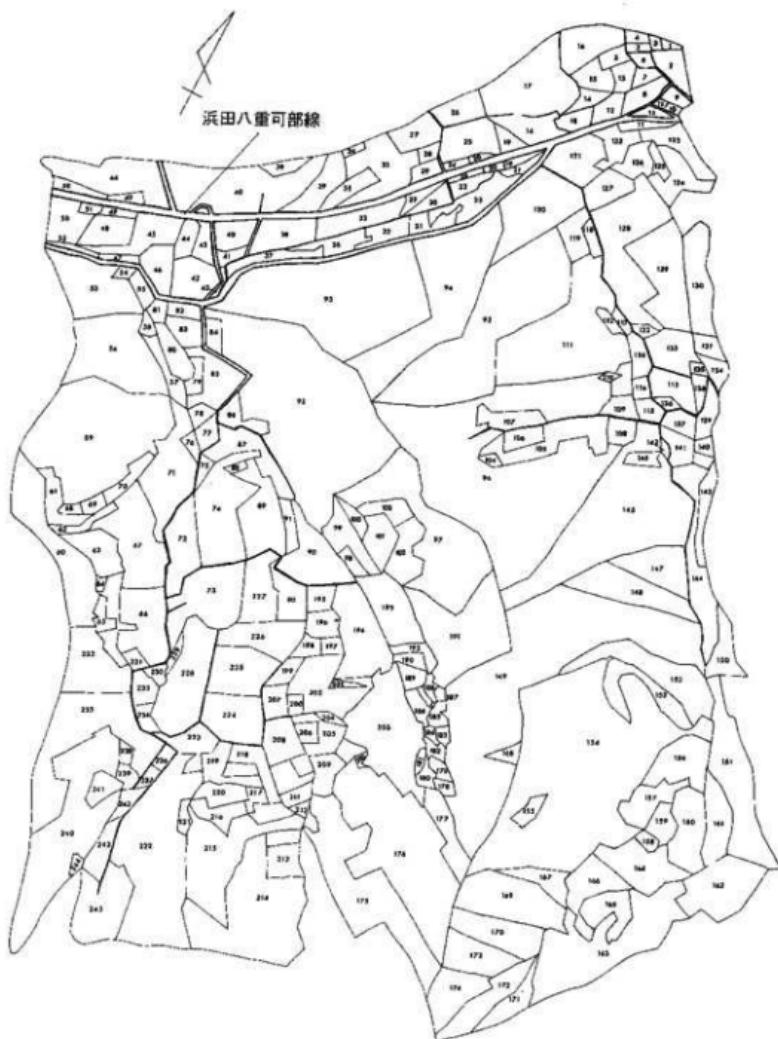


第25図 内ヶ原城縄張図

第2表 内ヶ原城跡周辺小字名一覧表

No	小字名	No	小字名	No	小字名	No	小字名
1	中野屋上ミ	33	久保田	65	西田下モ	97	峰ノ瀬戸
2	寺田家ノ上	34	橋田沖	66	西田屋ノ沖	98	峰ノ前
3	友田	35	細尾原沖	67	西田下	99	家ノ前
4	寺田家ノ瀬戸	36	細尾原下モ	68	益	100	家ノドモ
5	寺田	37	坂の上道下	69	追門	101	峰ノ前
6	家ノ前	38	桑の坪	70	益	102	峰ノ前瀬戸
7	水口瀬戸	39	大枝	71	追古屋敷	103	峰ノ前家上
8	前橋本	40	神田	72	屋敷名	104	上リ前
9	橋本	41	宮本	73	部屋ノ瀬戸	105	上リ原下タ
10	ソラ田	42	矢倉坂道下	74	茶山田	106	上リ原
11	橋元	43	矢倉道下	75	茶山屋地	107	上リ原下タ
12	門田上エ	44	東表	76	追古屋敷下タ	108	上リ原
13	寺田道上ヘ	45	口ノ切	77	中間ノ根	109	家ノ上
14	草種田	46	堂ノ前	78	中間	110	上リ原瀬戸
15	寺田上ミ門田下道下	47	家ノ下道下タ	79	中間瀬戸	111	家ノ瀬戸
16	寺田家ノ下モ	48	山尾給上エ	80	中間ノ上	112	上リ原下タ
17	寺田下モ	49	番シヨウウ給	81	家ノ門	113	早見煙満手
18	南屋	50	山尾給	82	松屋	114	橋ケ原
19	細尾原家ノ沖	51	番所後	83	門田	115	橋ケ原
20	細尾原家ノ下モ	52	大道下タ	84	矢倉	116	橋田屋
21	細尾原上ヨリ松田マデ	53	大道上タ	85	家ノ瀬戸	117	家通り
22	家ノ瀬戸	54	家ノ下モ	86	家ノ向イ	118	家ノ瀬戸
23	細尾原	55	堂	87	益田	119	橋田屋瀬戸
24	細尾原家ノ門	56	隅田屋瀬戸	88	益田	120	細原上ミ
25	細尾原家ノ上	57	道ノドタ	89	風呂ノ上	121	アナ田
26	落井尻	58	隅田屋	90	貝富み	122	ソラ田
27	代田	59	エノキ下	91	ケントウ上	123	橋木前エ
28	庄田	60	中尾	92	末ヶ追	124	ソリ
29	細尾原家ノ下モ	61	追ノ瀬戸	93	細原下モ	125	橋本前エ
30	竹添	62	追ノ上エ	94	細原瀬戸	126	橋本
31	細尾原後	63	西田尾下モ	95	カクシ山	127	上リ原沖
32	細尾原瀬戸道ノ下タ	64	追屋敷	96	楓田屋瀬戸	128	上リ原ドタ

No	小字名	No	小字名	No	小字名	No	小字名
129	横田屋下モ	159	横ノ上	189	大烟	219	上小田瀬戸
130	家ノ前	160	横ヶ原ソリ	190	峰ノ屋	220	小田前瀬戸
131	川端	161	ソリ	191	大畠瀬戸	221	森田屋瀬戸
132	上リ原下タ	162	横ヶ原	192	家ノ筋	222	森ノ上
133	横田屋前	163	家ノ上	193	家ノ瀬戸	223	森川屋
134	ヒリ原下タ	164	横ノ上	194	小武家名	224	四百田
135	岩坪ドモ	165	横ヶ原	195	小武家	225	内ヶ原神田
136	折田屋	166	ソリ	196	庄田	226	沖田
137	家ノ上	167	西本屋上ミ	197	片クレ	227	嫌田
138	家ノ沖	168	大畠瀬戸	198	内ヶ原カタクレ	228	家ノ沖
139	横川原	169	家ノ上ミ	199	治郎兵衛屋小田	229	梅ノ木下タ
140	明天	170	家ノ上	200	治郎兵衛屋小田	230	家ノ前
141	家ノ前下モ	171	家ノ七ミ	201	中野屋田	231	西田敏子
142	上リ原	172	柳原	202	花ノ木	232	西田屋ノ空
143	明天	173	家ノ上ミ	203	鉢穴	233	梅ノ木
144	岩坪	174	大ヤキ	204	ヒヤケ町	234	家ノ瀬戸
145	明天上ミ	175	谷	205	貳百牧名	235	柿ノ木
146	早見畠溝手	176	迫田	206	家ノ前	236	家ノ向イ
147	岩坪下モ	177	横ヶ原峰	207	二ツ町	237	森迫
148	城平下モ	178	的場	208	西名	238	中田屋
149	城平	179	宗判田	209	家ノ瀬戸	239	中田屋上エ
150	岩坪下モ	180	内ヶ原鉢穴	210	タチガ曾根	240	中田屋瀬戸
151	岩坪	181	ソツハリ	211	門田	241	沖田屋空
152	岩坪下上ヘ	182	中屋上ミ	212	曾根	242	休ミ
153	横田屋瀬戸	183	鉢穴	213	小田屋ノ空	243	内ヶ原森ノ前
154	鉢穴打	184	ソツハリ	214	ノリコシ	244	休ミ
155	横ヶ原上ニ	185	中屋瀬戸	215	小田瀬戸	245	休ミ
156	横ヶ原境山	186	納屋瀬戸	216	小田		
157	家ノ下タ	187	中屋	217	門田		
158	西本屋	188	家ノ瀬戸	218	御田屋		



第26図 内ヶ原城跡周辺切図

削り出して造られたもので、通常みかける土壁とは異質なものであった。この施設は鉄穴流し等の際に使用される溜池等の可能性もあり、山城に直接関係すると判断される材料を得ることができなかつた。

帯郭・西2郭と仮称したところも、上盤状の高まりが地山削り出しであり、平坦部において柱穴等を確認することができず、山城に直接関係する積極的な根拠は認められなかった。

堅堀状遺構として扱ってきたものについても、深さが浅く、配置状況から見ても防御機能を有しているとは言い難いものであり、山城に直接関係する施設かどうか疑わしい。

このようにみてくると、内ヶ原城跡は丘陵頂上部を削平して平坦部をつくり、西側斜面に道状のテラスと溝（SD02）を設けたもので、土壘、堅堀、複数の郭などは備えていなかつたものと思われる（第25図）。

築城の時期については、遺物が少なく不明と言わざるを得ない。強いて山城に直接関係するものとして取りあげるとすれば、上師質土器、土錘、陶器片などであろう。土師質土器には碗（大型の皿とした方がよいかもしれない）と皿があり、高台の付くものは1例もなく底部はすべて糸切のままである。口径7.7cmあまりの小皿、口径12cmあまりの碗、口径15cmあまりの碗がある。土師質土器の編年的研究は山陰地方ではほとんど行われていないので、仮に広島県草戸千軒町遺跡の資料と比較すれば概ねⅣ期の範疇に入るものと思われる。<sup>(4)</sup> この草戸千軒町Ⅳ期は15世紀代を中心とする時期とされている。このほか、土錘については時期を確定することは困難であるが、16世紀中頃とみられる無釉やきしめの壺片が1点出土している。

以上、微小な資料からではあるがこの山城は少なくとも15世紀～16世紀中頃には使用されていたものと考えられる。

（小 笹 基、松 本 岩 雄）

## 註

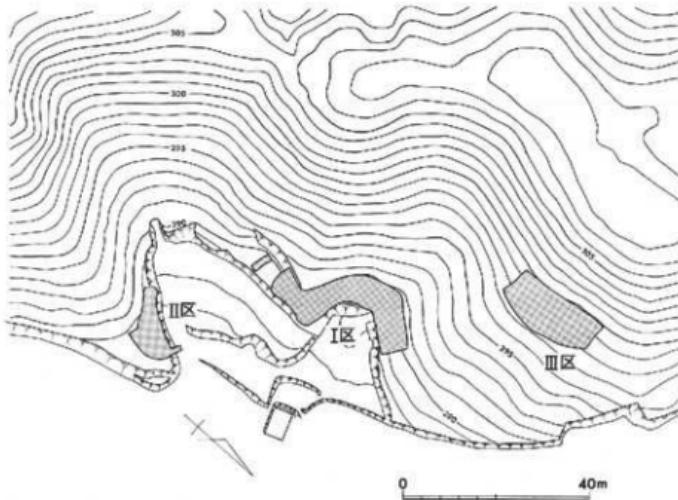
- (1) 旭町教育委員会『旭町誌』1977年
- (2) 烏根県教育委員会『中國横断道予定地内遺跡分布調査報告書』1982年
- (3) 烏根県教育委員会『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ 1977年
- (4) 鈴木康之『草戸千軒町遺跡Ⅳ期の土師器土器』『中近世土器の基礎研究』V 日本中世土器研究会 1989年

## 第Ⅶ章 後河内古墓群

### 1. 調査の概要

遺跡は、那賀郡旭町大字本郷396-3番地に所在し、低丘陵の北側斜面に位置している。この丘陵には古墳時代後期の群集墳として知られるやつおもて古墳群があり、中国横断道は古墳群の北東を迂回するように計画されていた。しかし、周辺にも古墳などが存在することが予想されたため、1988年度に第1次調査として、やつおもて古墳群が所在する丘陵の北斜面と隣接する尾根で遺跡の確認調査を行った。その結果、3箇所で江戸時代の古墓が存在することが判明した。1989年の第2次調査は第1次調査の結果をもとに3つの調査区を設定し、10月下旬から12月上旬にかけて全面調査を実施した。調査区は南から順にⅡ区、Ⅰ区、Ⅲ区である（第1図）。

Ⅰ区は遺跡の中央部あたり、等高線が緩やかなS字を描く東向きの丘陵斜面に位置する古墓群である。古墓群は、丘陵斜面をL字状に削り出した長さ40m、幅2~3mの平坦面上に営まれている。古墓は、総数18基を数え、基本的には地形に沿うように造られている。これらの古墓には、いずれも墓壇上に人頭大の集石が認められたが、このうち、3号・11号・16号墓の3基については集石のみで墓壇は確認されなかった。墓壇の平面形は長方形、方形、隅丸長方形を呈するものがほとんど



第1図 調査区配置図

であったが、その他に14号墓のように円形を呈するものもみられた。前者からは鉄釘が出土しているが後者からは確認されておらず、組み合わせ式の木棺の他に木桶も棺として使用されていたものと考えられる。遺物としては、集石の間から青磁、白磁染付、瓦質容器などが出土している他、墓壙中からは鉄釘をはじめ、人骨片も検出されている。

Ⅱ区はⅠ区より南東に約30m離れた北向きの丘陵斜面の裾部に位置し、Ⅰ区とはほぼ同じ等高線上にある古墓群である。古墓はわずかな平坦面に3基が近接するように営まれている。いずれも墓壙上に集石を伴っている点はⅠ区の古墓群と同様であるが、このうちの20号墓は大形の隅丸方形の墓壙上に基壙状の集石を伴っている。また、21号墓からは、碗形溝や鍛冶溝、埴堀など鍛冶に関わる遺物が墓壙中より多量に出土しており興味深い。

Ⅲ区はⅠ区より北西に約30m離れた東向きの丘陵の斜面中腹にあり、Ⅰ区との比高差は約8mである。調査前には緩い傾斜の変化が認められた地点で、第1次調査では、集石が確認されており、他の調査区と同様に古墓と考えていた。ところが、集石の平面形を検出したところ小規模な堅穴式石室であることが確認され、古墳であることが判明した。墳丘は不明な点が多いが、丘陵斜面上方に「コ」字形の溝がまわる4m程度のものと考えられる。埋葬施設は、内法で長さ1m、幅0.45m、高さ0.7mの小形の堅穴式石室で、主軸を等高線と平行に置くものであった。蓋石はすでに失われており、石室の中からは遺物は一切検出されなかった。

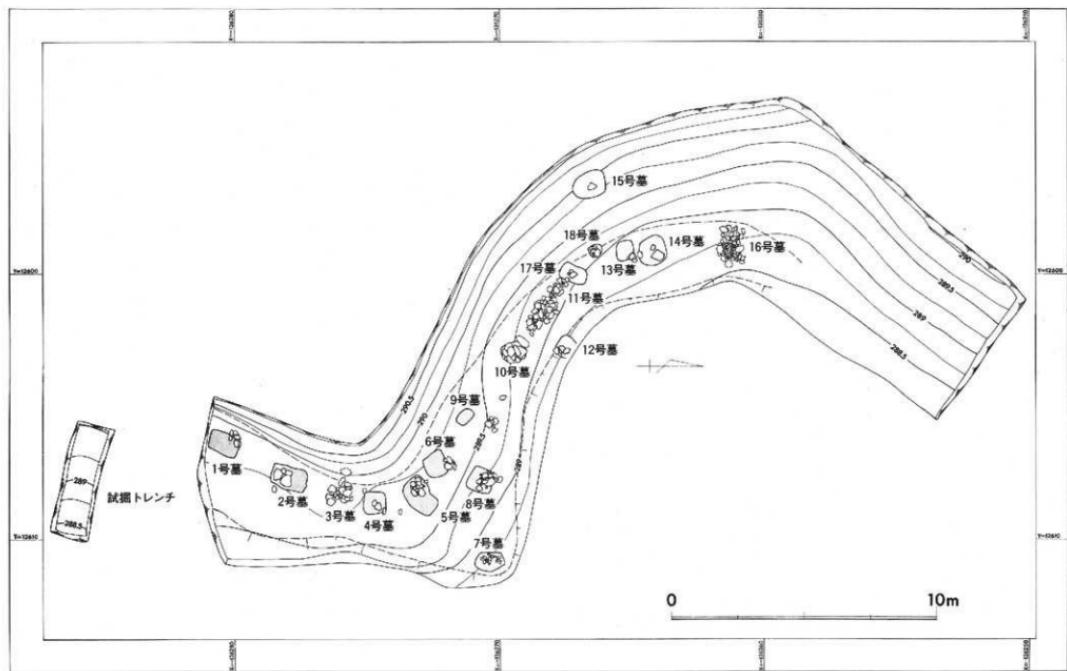
## 2. I 区

### (1) 遺構の配置状況（第2・3図）

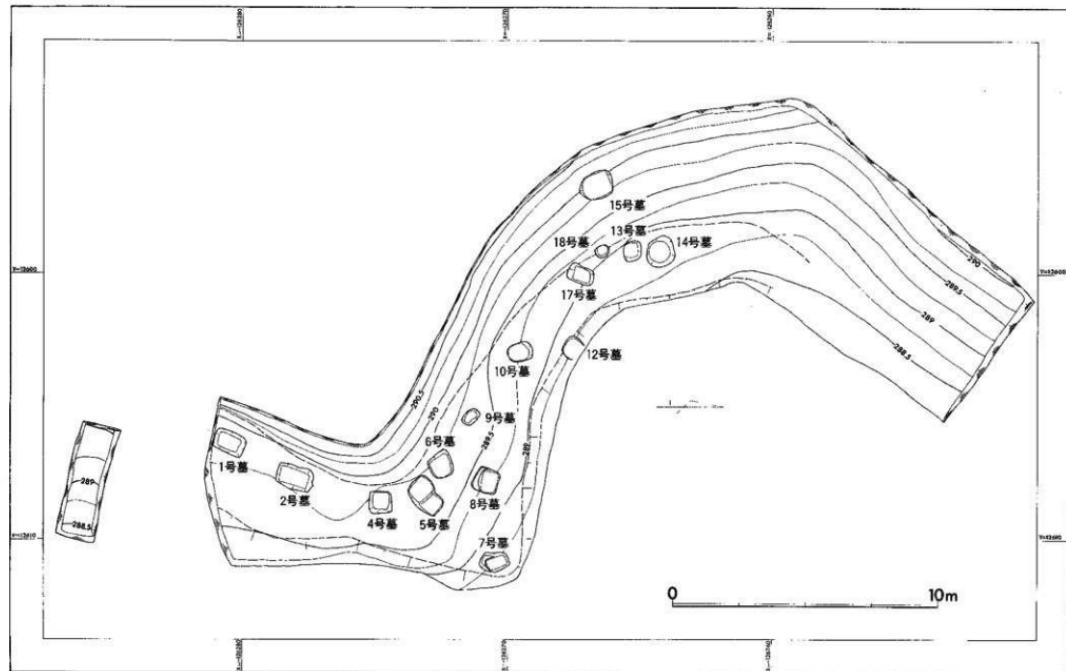
Ⅰ区は、丘陵が谷状に小さく湾曲したところの東斜面裾部にある。調査前には、丘陵斜面を削り出して造成された平坦面が長さ40m、幅2~3mにわたってみることができたが、調査を行った結果、古墓が営まれている範囲は長さ25mであった。

古墓は、総数18基が確認されているが、その配置にはいくつかの特色がある。1つは、平坦面の山寄りに地形に沿うように造られているもので、1~6号墓、9・10・13・14・17・18号墓と多い。基本的には、墓壙の主軸を斜面と平行するように置いているが、10号墓や17号墓のように直交するものも含まれている。2つめは、平坦面の縁辺部寄りに営まれているもので、7・8・12号墓がある。主軸は、7号墓が斜面に対して斜めになっているが、他はほぼ平行に置かれている。3つめは、平坦面上の斜面に造られているもので、15号墓のみである。主軸は斜面に対し平行である。

墓壙の形態には、長方形・方形・隅丸方形・円形・橢円形がある。このうち、1~8号墓までの調査区南東寄りのものは、隅部が整然と掘られ長方形・方形のものしかみられない。これに対し9~18号墓までの調査区北西寄りのものは、隅丸長方形・円形・橢円形と隅が丸くなつたものが多く対照的なあり方となっている。また、3・11・16号墓は、集石の下に墓壙をもたないもので、他の遺



第2図 I 区 遺構 実測 図 (横出町)



第3図 I 区 遺構実測図 (先掘後)

構とは、機能が異なる遺構であるとも考えられる。

### (2) 1号墓（第4図）

丘陵斜面をL字状に削り出した平坦面の山寄りにあり調査区南端に位置している。隣接する2号墓からの距離は南西へ1.4mである。

墓壇上には集石があるが、その位置は墓壇の中心よりずれており、北西隅にあたる。集石は墓壇の検出面から30cm上のところにあり、50cm×55cmの範囲で人頭大の石が5個、1～2段に積み重ねられた状態で検出された。

墓壇は斜面に平行して營まれ、平面形は南北に長い長方形を呈しており、主軸はN23°Eである。規模は長さ1.2m、幅は北短辺で0.85m、南短辺で0.75m、深さ0.8mである。墓壇はほぼ垂直に掘り込まれており、その底面は平坦である。

墓壇の埋土は2層で、上層より灰褐色砂質土層、茶褐色砂質土層の堆積がみられたが、木棺等の痕跡はなく、遺物も検出されていない。

### (3) 2号墓（第5図）

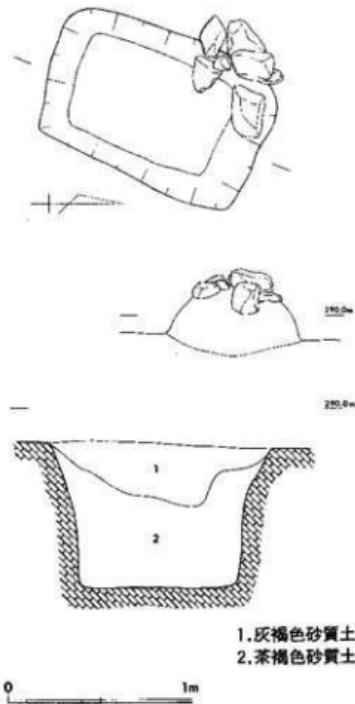
平坦面の山寄りに位置し、3号墓からの距離は南へ1.0mである。

墓壇上には、南半分に片寄って4個の集石が認められる。集石は、墓壇の検出面から10cm高い暗灰褐色土上にあり、その範囲は南北0.7m、東西0.6mで、東側に40～50cm前後の大きめな石2個と西側に20～30cm前後の小さい石2個を並べている。この集石は陥没しておらず、木棺が腐朽した後に墓壇を埋め直してから置かれたものとみられる。

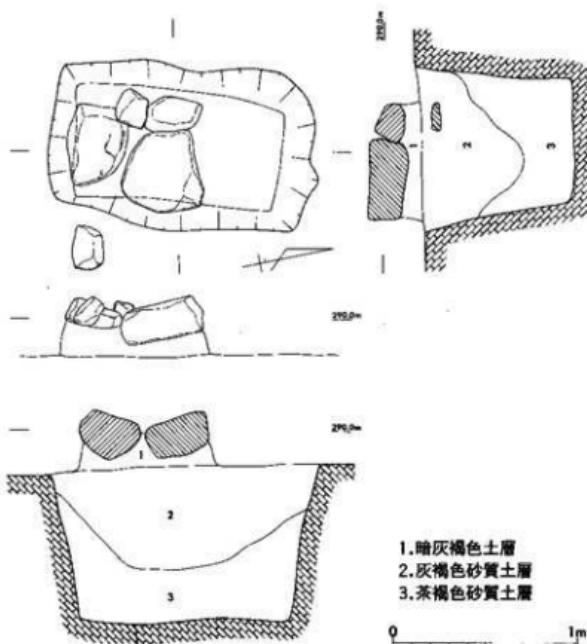
墓壇は斜面に平行に營まれ、平面形は南北に長い長方形を呈しており、主軸はN11°Eである。規模は長さ1.4m、幅0.9m、深さ0.85mである。墓壇はほぼ垂直に掘り込まれ、その底面は平坦になっている。

墓壇の埋土は2層で、上層より灰褐色砂質土層、茶褐色砂質土層の堆積がみられたが、木棺等の痕跡はみられなかった。

遺物は検出されていない。



第4図 1号墓実測図



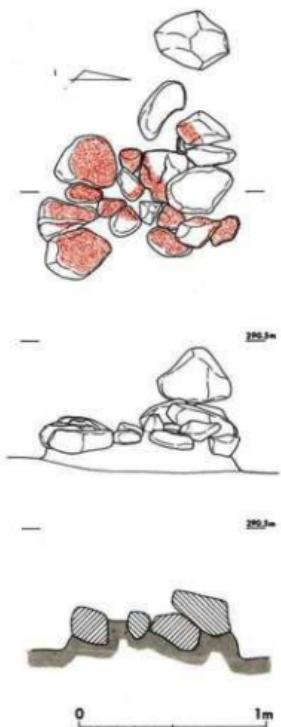
第5図 2号墓実測図

## (4) 3号墓 (第6・7図)

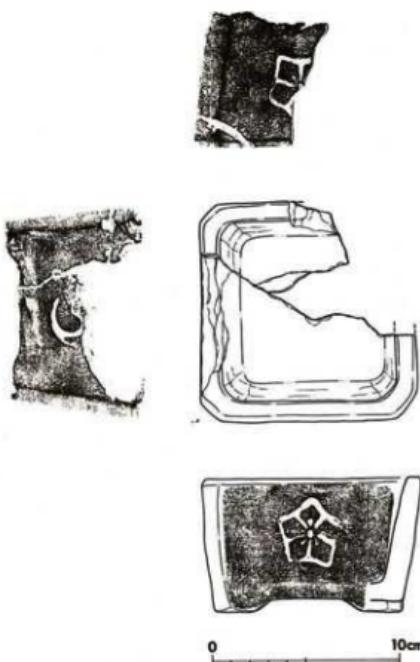
平坦面の山寄りに位置し、4号墓からの距離は南へ0.4mである。

集石は、南北1~1.1m、東西0.8~1.2mの範囲にみられ、ほぼ1段に並べられているが、部分的には2段に積まれたところもある。石の表面は、主に集石の中心部が赤く焼けており、石の間からは瓦質容器1点が検出された。集石の下には、炭を含んだ黒褐色土が10cm前後の厚さで認められたが、墓壙は検出されなかった。墓壙がないことや、集石が焼けていることからみて「墓」とは異なった機能をもつ遺構とも考えられる。

瓦質容器は、上面観が一辺11.7cmの方形で、隅部を「面取り」状に落とした形態をとるものである。体部は、やや外傾しながら立ち上り器高は7cmで、底部は四隅に高さ0.7cm程の低い脚がついている。外面には、「結梗」の紋章が対面する辺にそれぞれ押捺されており、一部に欠損があるため不明な点はあるが、この間の辺には「巴」とみられるものもある。胎土は密、焼成は良好で、色調は淡黒色を呈している。



第6図 3号墓実測図(赤色は焼けた部分)



第7図 3号墓出土遺物実測図

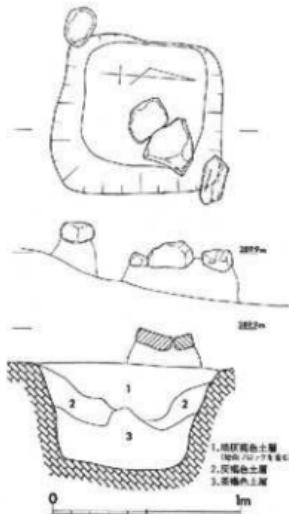
## (5) 4号墓 (第8図)

平坦面の山寄りにあり、5号墓から南へ0.7mのところに位置している。

墓壇上には4個の集石があり、墓壇の中央から北東隅にかけて3個、南西隅に1個の小ぶりな石が置かれていた。集石は、墓壇の検出面から10cm程度高い位置で検出されており、陥没はみられないことから、木棺が腐朽した後、墓壇を埋め直してから置かれたものとみられる。

墓壇は斜面に平行に營まれており、主軸はN4°Wである。墓壇の平面形は方形を呈しており、規模は長さ0.5m、幅0.5m、深さは0.5mである。墓壇は壁が外傾しながら立ち上がっており、底面は北側が5cm程低くなっている。墓壇の埋土は3層で、上層より暗灰褐色土層、灰褐色土層、茶褐色土層の堆積がみられたが、木棺等の痕跡はみられなかった。

遺物は検出されていない。



第8図 4号墓実測図

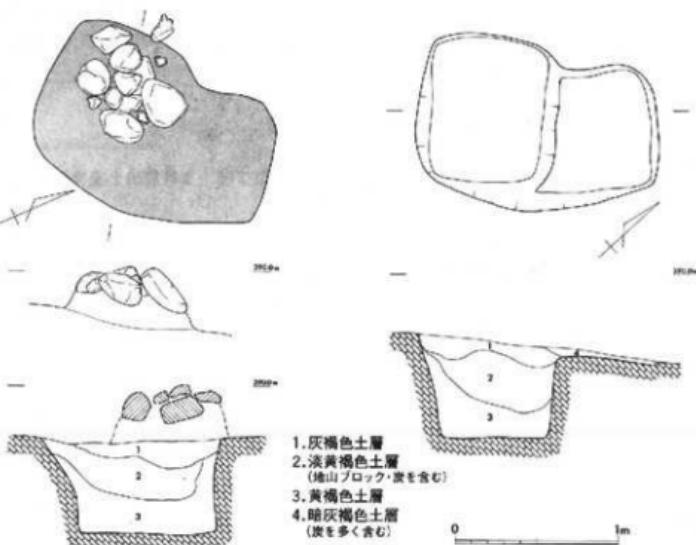
## (6) 5号墓(第9・10図)

丘陵がやや張り出した部分の平坦面山寄りに位置しており、東側に隣接する6号墓との距離は僅かである。

墓壙上には、やや北西寄りに入頭大の石9個よりなる集石があり、その範囲は南北0.5m、東西0.7mである。集石は、1段または2段程度積まれているが、墓壙の検出面からは15cm上にあり、陥没がみられないことから、木棺が腐朽した後に埋め直したものとみられる。

墓壙は、斜面に平行に営まれ、平面形は北西から南東に長い長方形を呈しており、主軸はN43°Eである。規模は、長さ1.0m、幅0.85m、深さ0.65mを測り、墓壙は壁が外傾するように掘り込まれているが、底面は平坦である。

墓壙の埋土は3層で、上層より灰褐色土層、淡黄褐色土層、黄褐色土層の堆積がみられたが、木棺等の痕跡はなかった。墓壙の東側には、長さ0.8m、幅0.65m、深さ5cm程の浅い掘り込



第9図 5号墓実測図

みが墓壙の埋土を切る形で設けられており、炭を多く含む暗灰褐色土層が堆積していた。火葬に伴う遺構とみられ、5号墓は2つの墓が切り合っているとも考えられる。

遺物としては、人骨小片の他、鉄釘、不明鉄製品がある。人骨は、火を受けた火葬骨である。部位は不明であるが、いわゆる「長管骨」・「短骨」であることが確認でき、その大きさから成人と思われる。鉄製品は墓壙中より出土したもので、鉄釘1は断面が方形で頭を折り曲げ、長さは5cmである。2は、断面が長方形で、幅が0.8cmあり、釘以外の鉄製品とみられるが、用途は不明である。

#### (7) 6号墓（第11図）

平坦面の山寄りに位置し、隣接する8号墓からの距離は南へ0.8mである。

集石は、墓壙の北側にずれた状態で認められ、人頭大の石2個と小さい4個の石が置かれている。集石は墓壙の検出面から10cm程度上にあり、南北40~50cm、東西50cmの範囲に、1段から2段程度積まれた状態で検出された。

墓壙は斜面にはば平行に営まれ、平面形は方形を呈しており、主軸はN23°Wである。規模は長さ、幅とも0.9m、深さ10cmと浅く、遺骸を納めた木棺を埋納したものではないようである。墓壙の断面形は、立ち上りがにくく大きく外傾しており、底面は基盤層の筋理の関係もあって、凸凹が著しい。

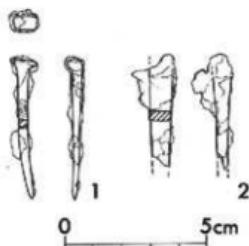
墓壙の埋土は、1層で灰褐色土層のみが堆積している。

遺物等の検出はされていない。

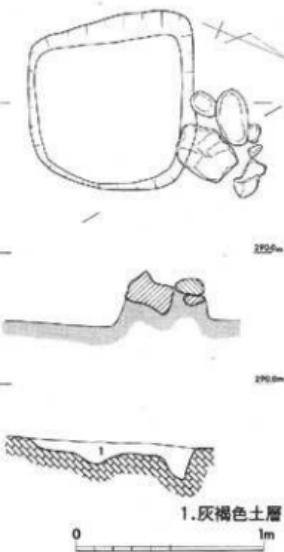
#### (8) 7号墓（第12・13図）

平坦面の縁辺部にあたる緩い斜面に位置し、隣接する5号墓からは北東へ2.4m、8号墓からは東へ2.2mのところにある。

集石は、墓壙上のやや西寄りのところにあり、墓壙の検出面とほぼ同じ高さに並べられていた。集石の範囲は、南北0.8m、東西0.4mで、10cm前後の拳大の石が積み重ねられず、1段に敷かれたような状況を呈する。集石に陥没は認められていないので、木棺腐朽後に墓壙を埋め直した後、集石が



第10図 5号墓出土鉄釘他実測図



第11図 6号墓実測図

行われたものとみられる。

墓壙は南西から北東に下がる斜面に対しやや斜めに営まれ、主軸はN17°Eである。

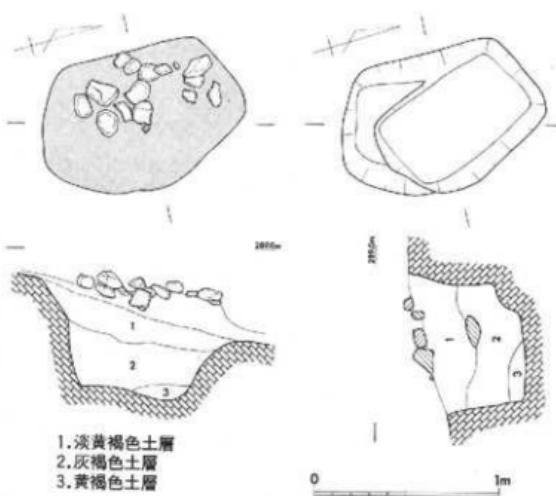
墓壙の平面形は南側に浅い掘り込みがあるため、いびつな形になっているが、深く掘り込まれた部分は長方形を呈し、長さ0.9m、幅0.6m、深さ0.5mを測る。墓壙の断面形は、壁の上部がやや外傾するものの、垂直に近く掘り込まれており、平坦な底面に至っている。底面は南北方向ではやや傾斜があり、北側が7cm程度低くなっている。

墓壙の埋土は3層で上層より、厚さ15cmの淡黄褐色土層、厚さ25cmの灰褐色土層、底面北東部分に黄褐色土層の堆積がみられたが、木棺の痕跡などは確認されなかった。

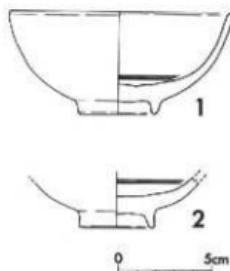
出土遺物としては、集石の間から出土した肥前系青磁碗2点がある。1は破片ながら全形を窺うことができるもので、復元口径11.8cm、器高5.5cmである。丸味を帯びた体部と低い高台を有しており、外面は薄緑色、内面は灰白色の上釉がかけられている。また、見込の中央にはコンニャク印判による「五弁花文」と2条の沈線が施されているほか、重ね焼きをする際に上の製品の高台があたる部分の上釉を剥ぎとった「蛇ノ目釉ハギ」という技法もみられる。2は、1と同大、同様の手法によって作られたもので、外面に薄緑色、内面に灰白色の上釉がかけられており、見込中央にはコンニャク印判による「五弁花文」がある他、「蛇ノ目釉ハギ」の技法もみられる。時期は共に18世紀後半である。<sup>(2)</sup>

#### (9) 8号墓（第14・15・16図）

平坦面のやや縁辺部寄りにあり、隣接する6号墓より北へ0.8m、5号墓より北へ1.4mのところに位置している。



第12図 7号墓実測図



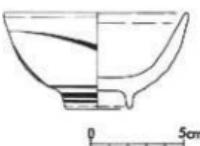
第13図 7号墓出土遺物実測図

集石は、墓壇の北側にずれた状態で、ほぼ墓壇検出面と同じ高さで確認された。集石の範囲は、南北1m、東西0.6~0.7mで、人頭大の石7個を下に据え、これより小ぶりの石を、その間や上に積んでいる。集石に陥没はみられず、木棺腐朽後、墓壇を埋め直してから置いたものと思われる。

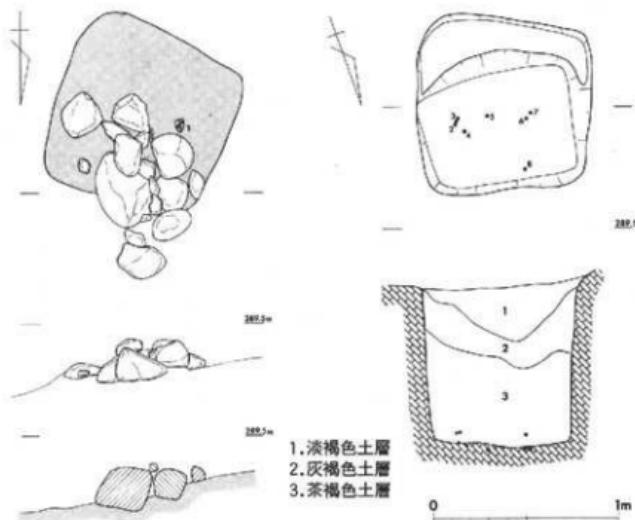
墓壇は、斜面に平行に営まれ、平面形は南側に浅い段をもつたため南北0.9m、東西0.9mとほぼ正方形に近い形を呈している。深く掘り込まれた部分は長さ0.9m、短辺0.7m、深さ0.9mで長方形を呈しており、主軸はN70°Wである。墓壇の壁面はほぼ垂直に掘り込まれており、底面は西側がやや低くなっている。墓壇の埋土は3層で、上層から淡褐色土層、灰褐色土層、茶褐色土層の順に堆積しているが、木棺等の痕跡はみられなかった。

出土遺物としては、集石の横から肥前系白磁碗1点が検出されたほか、墓壇中では鉄釘が確認されている。白磁碗は、小片であるが、復元口径10cm、器高5.2cmを測るもので、丸い体部と低い高台をもっている。内外面とも灰白色の上釉がかけられており、外面には淡い青色で描かれた文様がある。時期は18世紀後半とみられる。

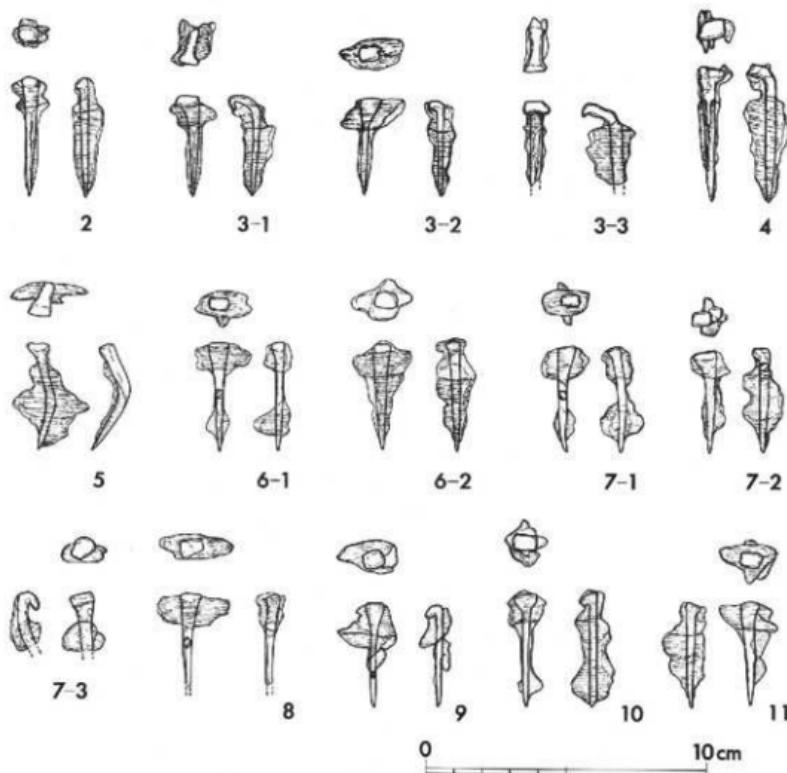
鉄釘は、いずれも断面方形の鍛造品で、頭部は折り曲げただけのものである。寸法は、大きく分ければ、長さ4.5~4.8cmのもの(4・5)、長さ3.5~4cmのもの(2~3-2, 6-1~7-2, 8~11)の2種類があ



第14図 8号墓出土遺物実測図



第15図 8号墓実測図



第16図 8号墓出土鉄釘実測図

る。また、釘身にはいずれも棺材の1部である木質が付着しており、木目の方向から2種類に分けることができる。<sup>(3)</sup> a類は、釘頭・釘先の両方とも木目が横方向にみられるが、釘身を軸として直交しているもので、2~3~3~6~1~7~1~7~2~10~11がある。b類は、釘頭・釘先の両方とも木目が平行して横方向にみられ、中央に矧ぎ面があるので、5~6~2がある。釘身に残存している木質は、松か杉と思われる。

## (10) 9号墓(第17図)

平坦面の山寄りにあり、6号墓からの距離は北西へ1.2m、10号墓からは南東へ2.3mである。

集石は、墓壇からははざれて、北側0.5mのところにある。その範囲は南北0.5m、東西0.65mで、人頭大の3個の石を中心に、石の間や上にやや小ぶりの石が置かれ、1段から2段積み重なった状

態となっている。集石は、基盤層より10cm程度浮いた状態で検出された。

墓壇は斜面にはば平行に營まれ、平面形は椭円形を呈しており、主軸はN47°Wである。規模は、長径0.7m、短径0.5m、深さ0.2mと浅く、遺骸を納めた木棺を埋納するようなものではない。おそらく、火葬に関するものと思われるが、詳しいことは不明である。墓壇の埋土は、灰褐色土層のみである。

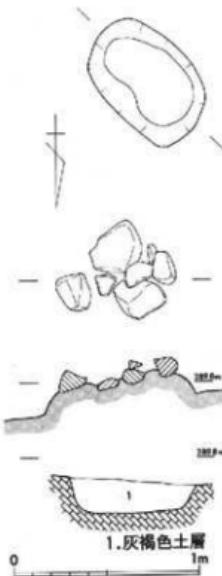
遺物は検出されていない。

#### (11) 10号墓（第18図）

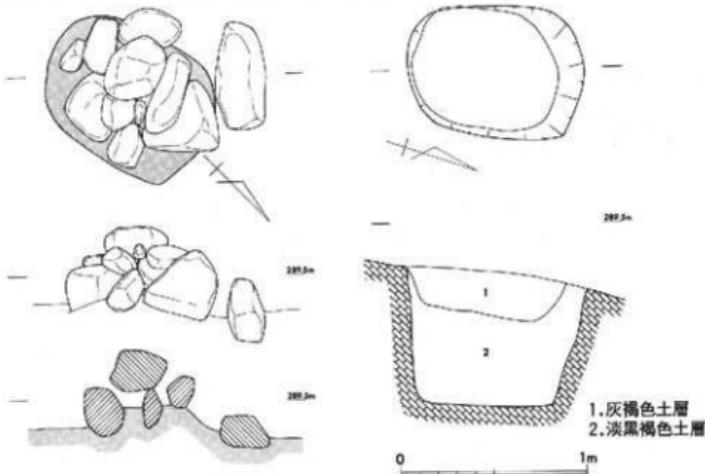
平坦面の中央部にあり、隣接する11号墓からは南東へ0.5m、12号墓からは南へ1mのところに位置する。

集石は、墓壇上を覆うように認められ、その範囲は南北0.95m、東西0.8~1.0mである。集石は墓壇上面に置かれており、30~50cm大の石を2~3段、高さ40~50cm前後に積み上げている。集石に陥没はみられないで、木棺腐朽後、墓壇を埋め直してから、集石が行われたものとみられる。

墓壇は緩やかな斜面に対し直交する形で營まれ、平面形は、



第17図 9号墓実測図



第18図 10号墓実測図

隅丸長方形を呈しており、主軸はN19°Wである。規模は長径0.95m、短径0.7m、深さ0.7mである。墓壇の断面形は、南壁はほぼ垂直、北壁は外傾しながら立ち上る形を呈しており、底面は平坦である。

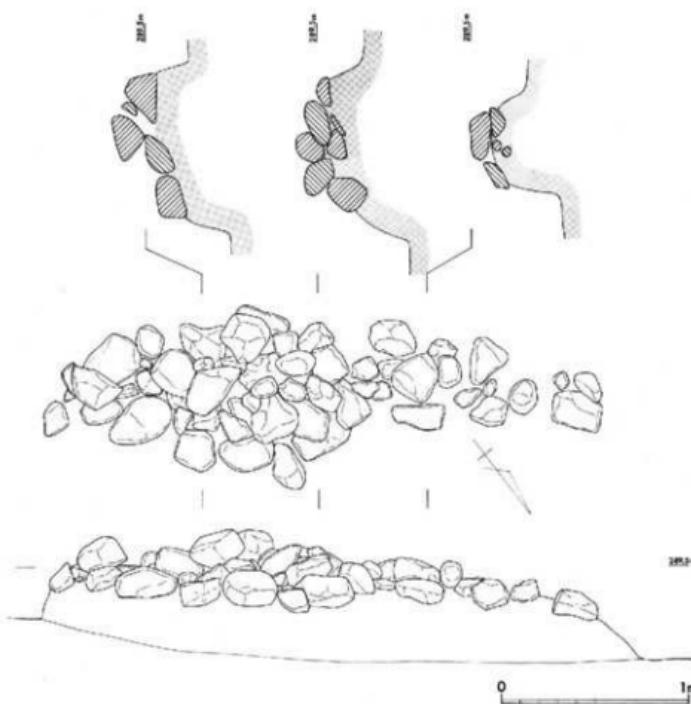
墓壇の埋土は2層で、上層より厚さ25cmの灰褐色土層、その下に厚さ50cmの淡黒褐色土層の堆積がみられたが、木棺等の痕跡はみられなかった。

遺物には、集石の間から出土した肥前系白磁染付碗の小片がある。見込に「菊花文」、外面に「二重網目文」が施されていることから、18世紀前半から中葉のものとみられる。

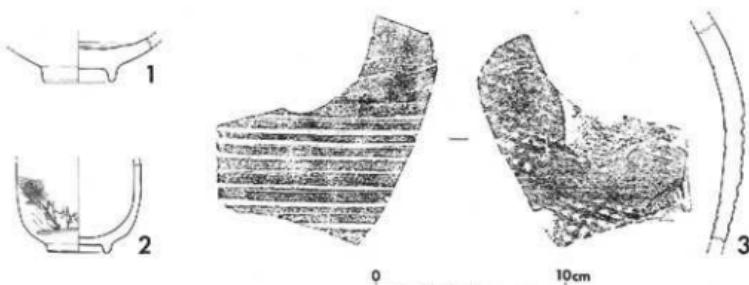
#### (12) 11号墓（第19・20図）

平坦面のやや山寄りにあり、一部は17号墓の上にも及んでいる。

集石は、長さ3m、幅は最大で1mの範囲に行われており、基盤層からは20~30cm前後浮いた状態で検出されている。集石は、20~40cm大の石を中心に多数が1~2段に積まれており、高さは最



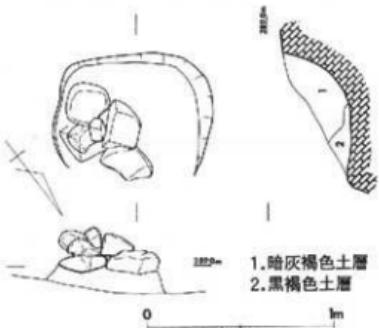
第19図 11号墓実測図



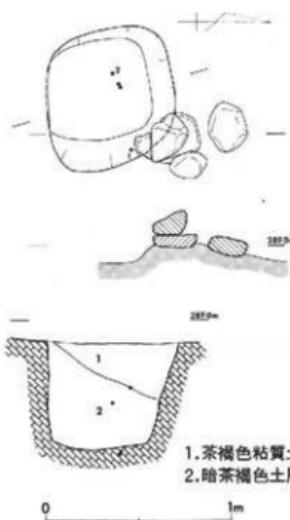
第20図 11号墓出土遺物実測図

大で40cmである。平面形は、中央が最も幅があり、両端が窄まる不整形な形をとっている。集石の下からは墓壇は検出されなかった。おそらく、標石として使われていた石を1箇所に集めたものと考えられる。

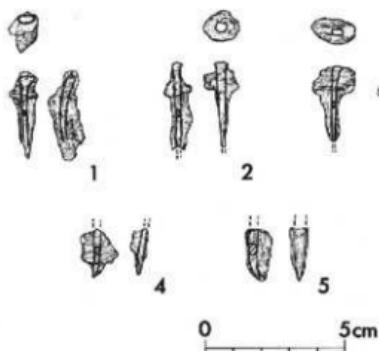
出土遺物は、いずれも破片であるが、肥前系青磁碗、白磁染付碗、唐津系甕がある。1は、青磁の碗で、外面が緑灰色、内面に灰白色の上釉がかけられている。見込中央には、コンニャク印判による「五弁花文」が施されており、その周囲には「蛇ノ目釉ハギ」の手法がみられる。2は、白磁染付の碗で、直立する体部と低い高台をもっており、外側には「草花文」が施される。3は、甕の肩部である。小片ではあるが、復元すれば径40cmあまりになる大形品で、外面に10条以上の沈線が施されている。内面は格子目タタキののち、ナデ調整が行われている。時期は、1が18世紀後半、2は19世紀前半から幕末、3は18世紀か



第21図 12号墓実測図



第22図 13号墓実測図



第23図 13号墓出土鉄釘実測図

ら墓末とみられる。

#### (13) 12号墓（第21図）

平坦面の縁辺部に位置し、10号墓からは北へ1mのところにある。

集石は、墓壇上の東寄りにあり、南北0.65m、東西0.4mの範囲に、人頭大の石6個が2～3段積まれた状態で検出された。

墓壇は、一部が流失しているが、隅丸長方形を呈しており、規模は現状で長さ0.35m、幅0.7m、深さ0.35mである。墓壇の埋土は、2層で上層から暗灰褐色土層、黒褐色土層がみられた。

遺物は出土していない。

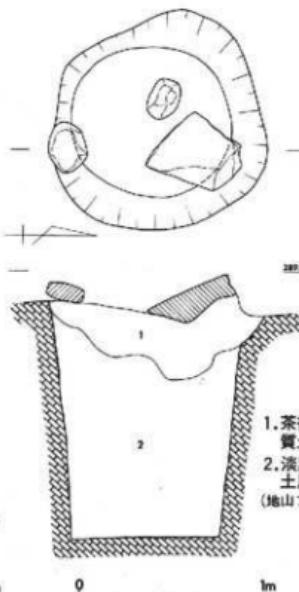
#### (14) 13号墓（第22・23図）

平坦面の山寄りに位置し、北に隣接する14号墓との距離は僅かに0.2mである。

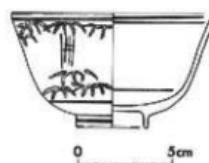
集石は、墓壇の北東隅にあり、人頭大の石5個が1～2段に積まれている。

墓壇は、斜面に平行に營まれ、隅丸方形を呈しており、主軸はN13°Wである。規模は一辺0.7m、深さは0.6mで、南壁は垂直に掘り込まれているが、他の壁は外傾しながら立ち上がっている。墓壇の埋土は、2層で、上層より茶褐色粘質土層、暗茶褐色土層の順に堆積しているが、木棺の痕跡等は確認されなかった。

出土遺物には、木棺に使用された鉄釘がある。いずれも、断面方形の鍛造品で、頭部は折り曲げ



第24図 14号墓実測図



第25図 14号出土遺物実測図

である。形状のわかるものでは3cm前後の短いものばかりである。付着している木質は、すべて釘頭に接して木目が横方向にはしり、中央から釘先においては縦方向となっており、c類に含まれる。

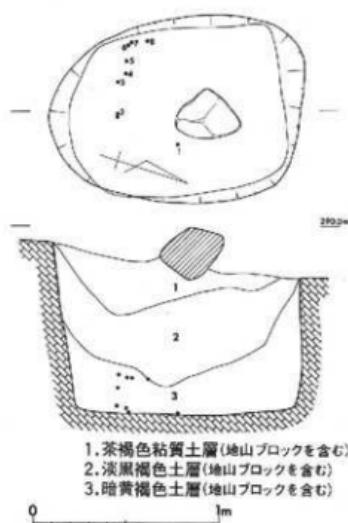
#### (15) 14号墓 (第24・25図)

平坦面の山寄りに位置しており、南は13号墓にはば接し、北の16号墓との距離は2mである。

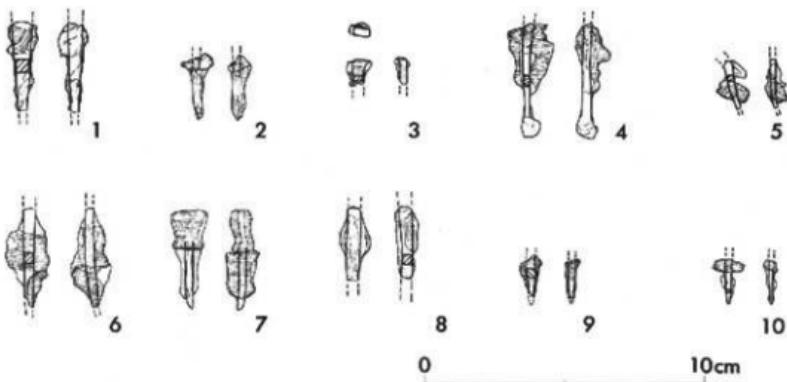
墓壙上面では、50cm大の石1個と20cm大の石2個の計3個が検出された。集石は陥没しておらず、木棺が腐朽した後、墓壙を埋め直してから置かれたものとみられる。

墓壙は、円形を呈しており、規模は径1.1~1.2m、深さ1.3mである。墓壙の壁は、ほぼ垂直に立ち上がっており、底面は平坦である。埋土は2層で、上層より茶褐色粘質土層、淡黒褐色土層が堆積していた。墓壙の形態や鉄釘が出土しなかったことから、桶が棺に使用されたと思われる。

遺物には、集石より出土した肥前系白磁染付碗がある。復元口径10.7cm、器高6cmを測り、口縁がやや開く端反形を呈する。外面には、「竹文」、内面見込みに



第26図 15号墓実測図



第27図 15号墓出土鐵釘実測図

は、「岩に波」の文様があり、19世紀前半～中頃のものとみられる。

#### (16) 15号墓（第26・27図）

平坦面から東側の斜面にあり、18号墓からの距離は西へ1.7mである。

墓壙の検出面上には、径35cm厚さ25cmの石が1個、中心より少し北寄りの位置で検出された。

墓壙は斜面に平行に営まれ、隅丸長方形を呈しており、主軸はN18°Wである。規模は、長径1.35m、短径1.0m、深さ0.9mである。北壁はほぼ垂直、南壁はやや外傾しながら立ち上がり、底面は平坦である。

埋土は3層で、上層より茶褐色粘質土、淡黒褐色土、暗黄褐色土の堆積がみられ、いずれも地山ブロックを含んでいる。

遺物としては、墓壙中より鉄釘が出土している。いずれも断面が方形で、頭部を折り返したものである。断片が多く形状が分るものは少ないが、4cm以上の長さをも

つとみられるもの（1, 4, 6, 8）

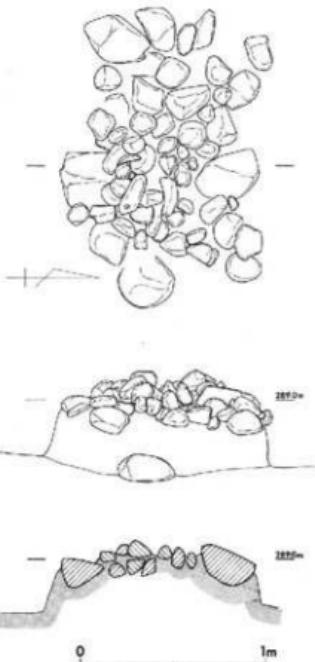
と、それ未満のもの（5, 7, 10）の2種類があるようである。木目の付着状況は、6, 7がa類、2, 9がc類になるものと考えられる。

#### (17) 16号墓（第28図）

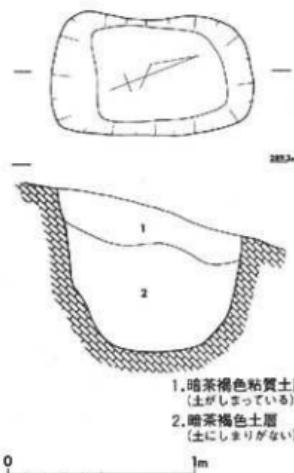
平坦面の最も北寄りに位置するもので、14号墓からの距離は北へ2mである。

集石は、南北1.1m、東西1.6mの範囲にみられ、60個あまりの川原石を含む自然石が検出された。集石は周囲に30cm位のやや大きな石、中央に10cm位の小さな円礫を置いているようで、中央の円礫は1～2段程度に積み重ねられている。

集石が検出された面は、基盤層より20cm程度高い位置に



第28図 16号墓実測図



第29図 17号墓実測図

ある。この下からは、墓壙は検出されておらず、「墓」とは異なった機能を有する遺構であったとも考えられる。

遺物は検出されていない。

#### (18) 17号墓（第29・30図）

平坦面の山寄りにあり、11号墓に隣接し、18号墓との距離は北西へ0.6mである。

墓壙上には、人頭大の石1個と10~15cm前後の石2個が置かれていたが、11号墓の集石の端部にあたっており、この墓壙に伴うものかどうかは不明である。

墓壙は、斜面に対し直交するように營まれており、主軸はN21°Eである。平面形は、不整形な隅丸長方形を呈しており、規模は長1.1m、幅0.65m、深さ0.85mである。墓壙の検出面は、北側が30cm程度低くなっている。壁はいずれもやや丸味を帯びて立ち上がり断面形はU字状を呈しているが、底面は平坦である。

墓壙の埋土は、2層で、上層より暗茶褐色粘質土層、しまりがない暗茶褐色土層の順に堆積していたが、木棺等の痕跡は検出されなかった。

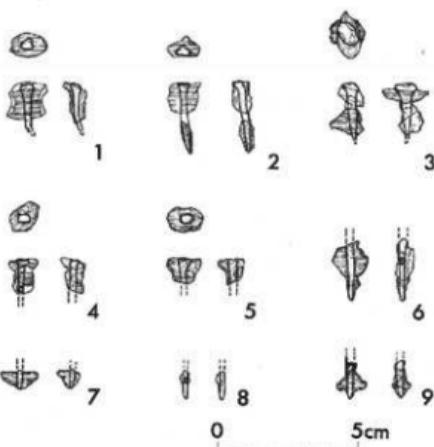
出土遺物としては、墓壙中より木棺に使用された鉄釘が確認されている。いずれも断面が方形で、頭部を折り返しており、長さは2.0~2.5cmと短いもののみである。木目の付着状況は、釘頭、釘先とも横方向にみられるが、釘身を軸として直交するa類（2・3）のみが確認できる他は、小さな断片が多くその状況は不明である。

#### (19) 18号墓（第31図）

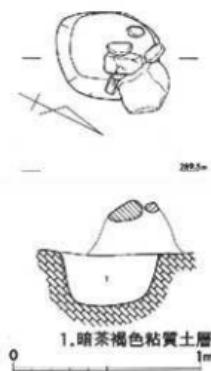
平坦面から斜面に至る傾斜変換点にあり、隣接する13号墓は北に0.5m、17号墓は西0.5mである。

墓壙上には集石がみられ、その位置は墓壙の中心よりずれており北隅部にあたる。集石は、墓壙の検出面から20cm程度浮いており、南北0.45m、東西0.4mの範囲で、30cm大の石を含む大小6個の石が1段に置かれた状態で検出された。

墓壙は斜面に平行に営まれ、主軸はN27°Wである。平面形は歪な椭円形を呈しており、規模は、



第30図 17号墓出土鉄釘実測図



第31図 18号墓実測図

長径0.55m、短径0.45m、深さ0.25mである。断面形は、U字形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。底面は南壁側が少し凹んでいるが、ほぼ水平である。

埋土は、暗茶褐色粘質土層の一層で、遺物等は検出されていない。

#### (20) 遺構に伴わない遺物（第32・33図）

古墓群に供獻された陶磁器は、いずれも墓壇上の集石付近に置かれており、墓壇内に納められているものは、なかった。ここで取り上げる遺物の多くも、こうした形で供獻されたものとみられるが、調査時には既にどの古墓に伴うものであるか不明になっており、一括して扱うこととした。遺構に伴わない遺物は、若干の布目瓦、須恵器片を除けば、大半が近世の陶磁器類で、唐津系陶器類、肥前系磁器類、肥前系陶胎染付類、在地窯系陶器類がある。

1は、丸瓦の一部で、内面には糸切りで分割後、布目の圧痕が付着している。外面は、ハケメの後、ナデ調整を行ったものとみられ、端部は面取りが行われている。胎上は4mm人の石英を含み、焼成は良好で、色調は暗青灰色を呈している。この他にも、若干の須恵器片が採集されており、これらの遺物は周辺のやつおもて古墳群や重富遺跡から混入したものとみられる。

2は、銅製の鋳造品で、一部に歪みや欠損がみられるが、高杯状の形態を呈している。杯部は浅く、口径は現状で2.4~7.5cmで、器高は9.1cmである。

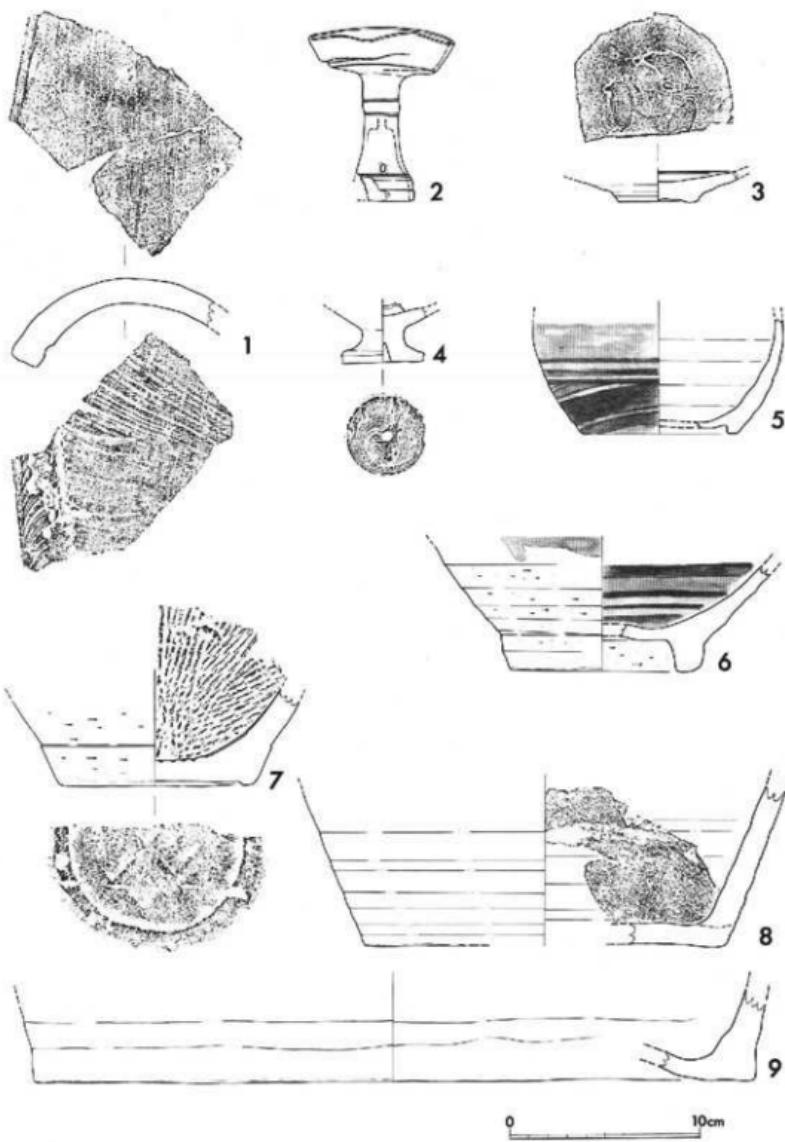
3・5・6・8は、唐津系陶器類である。

3は、小皿で、削り出しの低い高台をもっている。高台部分を除いて灰釉がかけられ、内面見込には2条の緑灰色の線が「鉄絵」の手法で描かれている。また、見込中央には焼成の際に、他の製品との熔着を防ぐために行なわれた「砂目積み」のあとがみられる。5は、瓶の底部で、内外面に銅綠釉がかけられており、外面下半には白化粧土で刷毛目装飾が施されている。銅綠釉は高台の内側にも及び、「砂目積み」のあとが残る。6は、鉢の底部で、削り出しの高台を有する。内面及び外面上半には白化粧土で刷毛目装飾が行われており、外面下半には鉄泥がかけられている。8は、壺・甕類の底部で、平底を呈する。内外面には褐色を呈する土灰釉がかけられており、内面には格子目状のタタキがみられる。

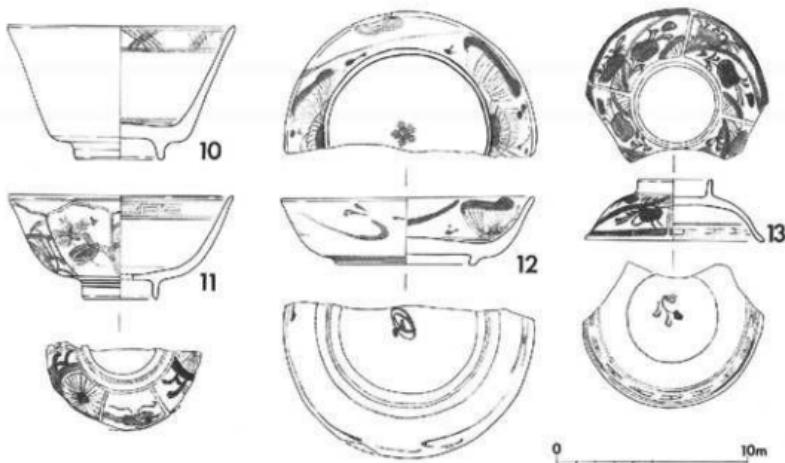
4・7・9は、在地窯系陶器類である。

4は、灯明皿で、低脚を有するものである。脚部は回転糸切り後未調整で、中央に凸形の刺突がある。上釉は、脚底面を除く部分にかけられており、灰緑色を呈する。7は、擂鉢の底部で、低い高台が削り出されている。擂り日は、見込部分にも及び、密につけられており、高台内面には成形時のものとみられる方形の圧痕が残る。上釉はかけられていない。9は、大形の壺・甕類の底部で、かなり歪んだ部分もみられるが、平底を呈しており、内外面は横ナデである。

10・11・12・13は、肥前系磁器類である。



第32図 I区出土遺物実測図(1)



第33図 I区出土遺物実測図(2)

10は、青磁の碗である。体部は外傾しながら、直線的に立ち上り、口径は12.0cm、器高は7cmである。上釉は外面に淡緑色、内面及び高台内面に灰白色のものがかけられており、口縁内面には「四方博文」、見込中央にはコンニャク印判による「五弁花文」がみられる。11は、染付の碗である。体部は丸味を帯びて立ち上り、口縁がやや外反する端反形を呈するもので、口径11.8cm、器高5.4cmを測る。外面は、区画内に「御所車」、「冠」と「若松」の文様が交互になるように描かれており、口縁内面には「雷文」帯、見込中央にも「若松」様の文様がみられる。12は、染付の皿である。丸味を帯びた体部と低い高台を有しており、口径13.3cm、器高3.5cmを測る。外面には「唐草文」、高台内面は「渦福」、内面は「草花文」と見込中央にはコンニャク印判による「五弁花文」が施されている。13は、染付碗の蓋で、端反形碗に伴うものとみられる。口縁端部が僅かに外反し、頂部につまみがつくもので、口径9.4cm、器高3.2cmを測る。外面は4つの区画内に「草花文」がみられ、内面は口縁部に「工字」文、帶・頂部に「草花文」が施されている。

肥前系陶胎染付類は、図化していないが、丸味を帯びた碗が2点出土している。いずれも、暗茶褐色から灰色の粘土が胎土として用いられ、高台を含め内外面に暗灰白色の上釉がかけられている。文様の意匠は不明であるが、外面のみに施され、見込にはみられない。

陶磁器類の時期は、かなり幅があり、江戸時代初期及び中期から末までのものがみられる。唐津系陶器類では、3は「砂目積み」の手法から17世紀前半、5・6は刷毛目装飾などの手法から18世紀代に位置づけられる。肥前系磁器類は、10・12がコンニャク印判による「五弁花文」をもつこと

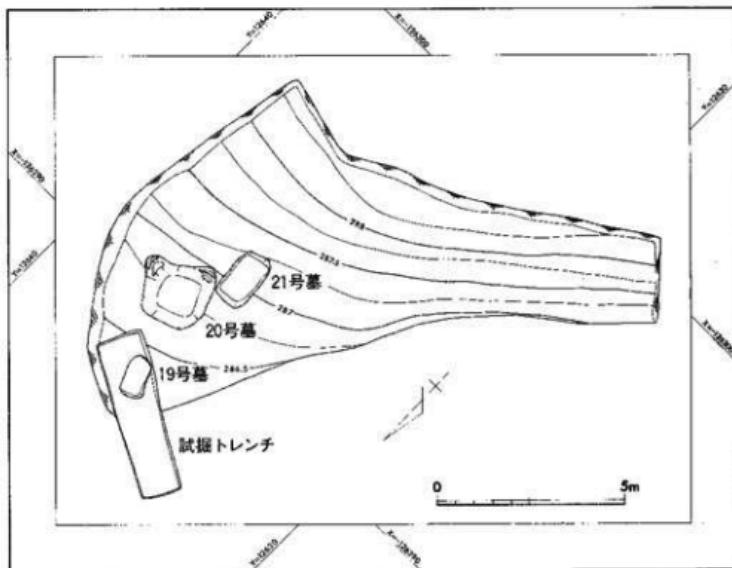
などから18世紀後半、11・13は文様の手法や、器形が端反形碗とこれに伴う蓋であることから、19世紀前半から幕末にかけてのものとみられる。肥前系陶胎染付類は18世紀代、在地窯系陶器類は18世紀から19世紀代に含まれるものと思われる。

### 3. II 区

#### (1) 遺構の配置状況（第34図）

II区は、丘陵が僅かに突出する北向きの斜面先端に位置している。調査前には、長さ10m足らず、幅は最大で4mばかりの狭い平坦面があり、いくつかの石が露出していた。調査は、用地内に限られているため、このうちの西半分について発掘を行った。

古墓が営まれている平坦面は、I区のように大きく加工を加えているわけではなく、南から北へ向かって緩く傾斜しているような状況を呈している。検出された古墓は、合わせて3基で、20号墓と21号墓はほぼ接し、その北1mに19号墓が営まれており、非常に近接した立地となっている。墓壙の形態は、隅丸長方形または隅丸正方形で、19・21号墓は主軸を斜面に対し直交する位置に置いている。また、20号墓は、僅かに長い長辺を斜面と平行に置く隅丸正方形のものであるが、墓壙の方向は他の古墓とそろっている。



第34図 II区遺構実測図(発掘後)

## (2) 19号墓（第35図）

調査区の北端、平坦面の縁辺部に位置するもので、'88年の第1次調査の際に検出したものである。隣接する20号墓からの距離は、北へ1.2mである。

墓壇上からは、集石は検出されていない。

墓壇は、斜面に対して直交するように営まれており、主軸は、N $20^{\circ}$ Wである。平面形は、隅部がやや丸くなつた隅丸長方形で、規模は長さ1.1m、幅0.65m、深さ0.6mである。断面形は、各壁がほぼ垂直に立ち上る形を呈しており、底面は平坦である。

確認調査の際に、墓壇内まで調査を行ったので、不明な点はあるが、埋土は2層で、上層より暗灰紫色土層、灰黄色土層が堆積していた。木棺等の痕跡はみられなかつた。遺物は出土していない。

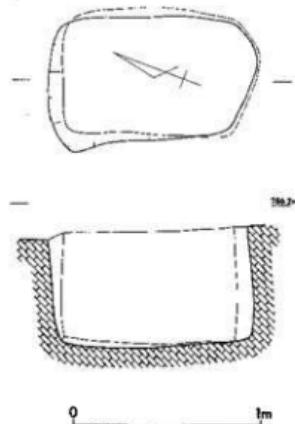
## (3) 20号墓（第36～39図）

緩やかに南から北へ傾斜する平坦面上にあり、隣接する19号墓からは南へ1.2m、21号墓とは南西付近で、ほぼ接している。

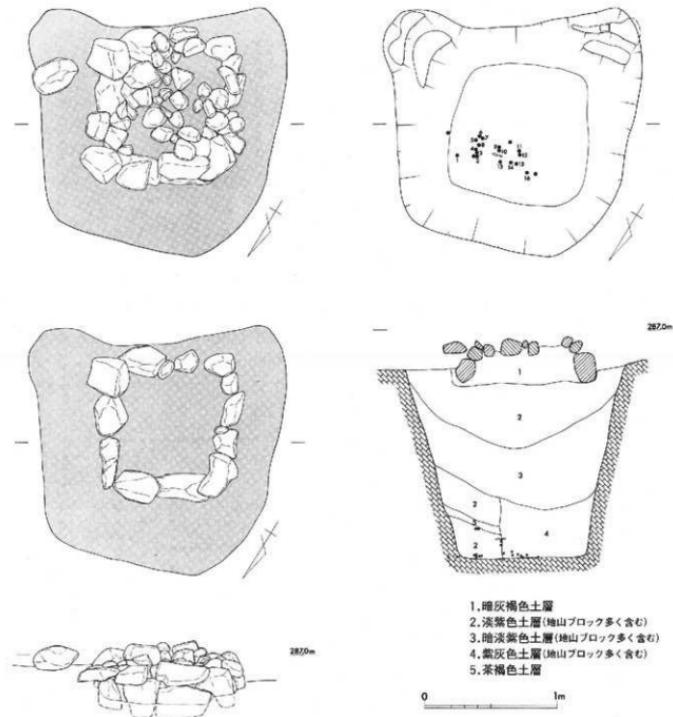
墓壇上南寄りからは、方形基壇状の集石が検出された。集石は、一辺1.1mで略正方形を呈しており、周間に比較的平たい石を立てて用いている。墓壇上面が傾斜しているため、低くなっている北辺は立石の上に、横長の石がもう1段積まれ2段になっており、その内側に10～20cm大の石が並べられ、高さは最も高いところで48cmである。この集石は墓壇の埋土である淡紫色土層を一辺1.1m、深さ10～14cm程度掘り下げてから、方形に石を組んでおり、木棺が腐朽し墓壇が陥没した後に、埋め直してから集石を行っているものとみられる。

墓壇は、隅丸正方形を呈しており、北東から南西方向の辺は1.7～1.9m、北西から南東方向の辺は1.6～1.8mで、深さは1.5mである。斜面に平行する北東から南西方向の辺が僅かに長く、主軸はN $59^{\circ}$ Eである。墓壇の東及び南隅部はやや張り出しがみられ、壁面に2段程度の小さな段が掘り込まれている。これは、墓壇がかなり深いため、掘削時などに足がかりとしたものと思われる。墓壇の断面形は、逆台形を呈し、壁は急傾斜で外傾しながら立ち上っている。底面は一辺1.05mの正方形となっており、平坦である。

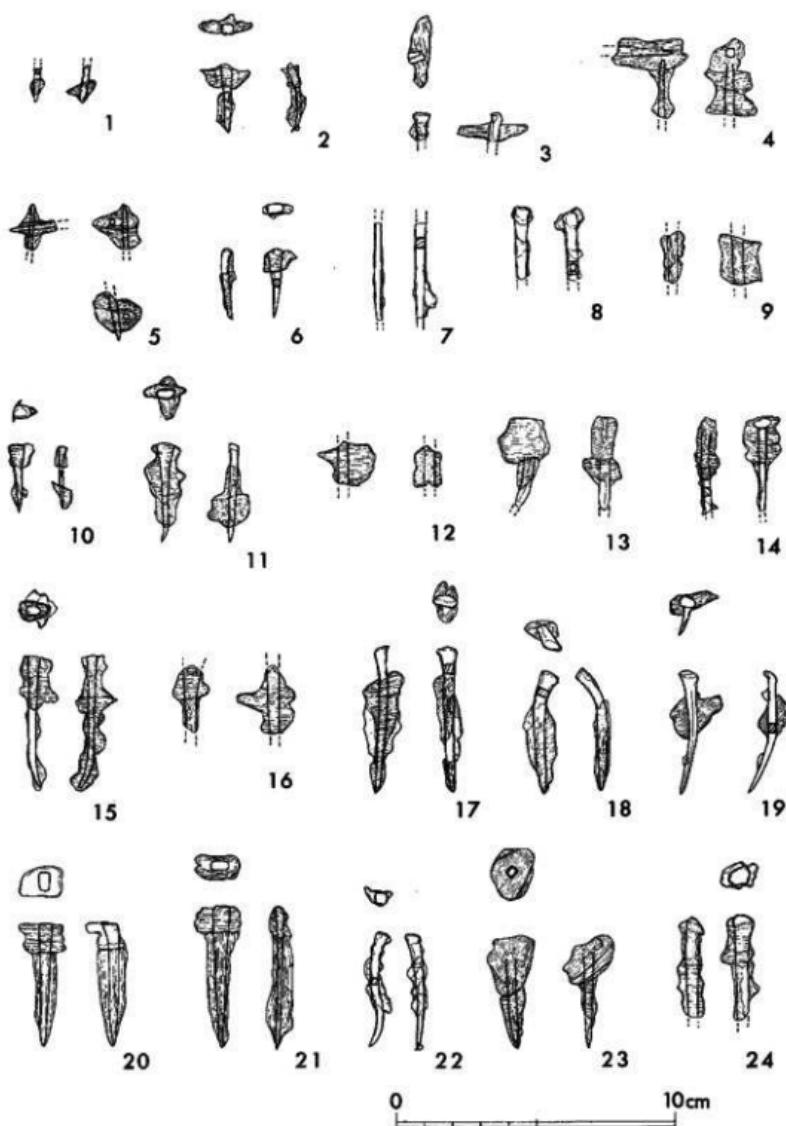
墓壇の埋土は、基本的には上層より淡紫色土層、暗淡紫色土層、紫灰色土層の順となっている。最上層の淡紫色土層は、方形基壇状の集石によって切られており、その内側には暗灰褐色土層が盛



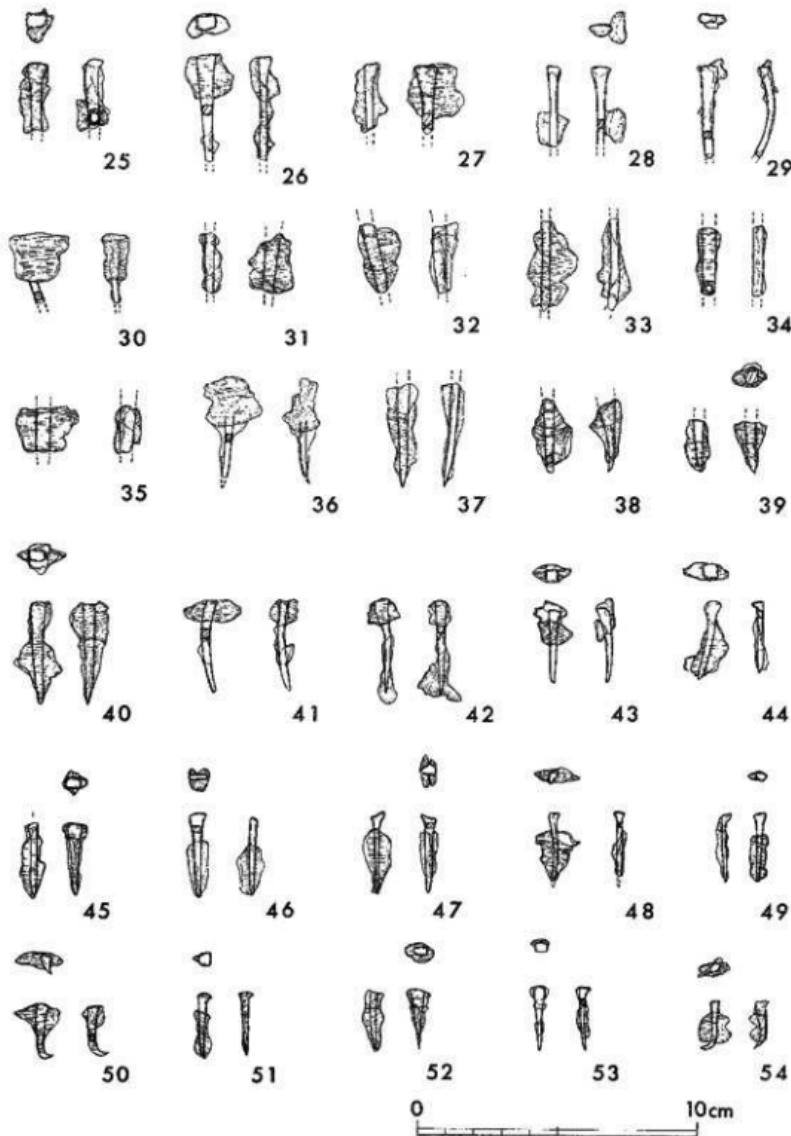
第35図 19号墓実測図



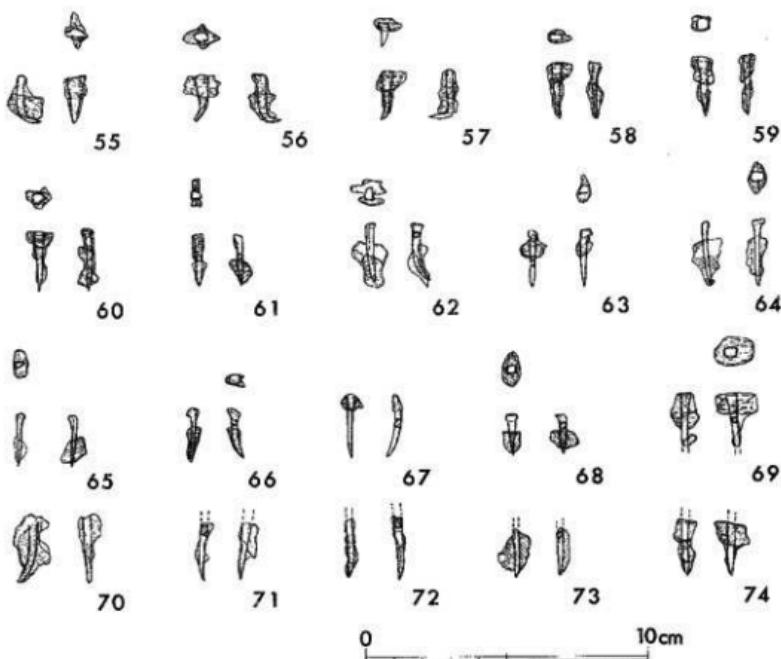
第36図 20号墓実測図



第37図 20号墓出土鉄釘実測図(1)



第38図 20号墓出土鉄釘実測図(2)



第39図 20号墓出土鐵釘実測図(3)

られている。また、最下層では、北東側に上の異なる部分が35~45cmの幅で認められ、茶褐色土を挟んで、淡紫色土層が上下にみられた。墓壇と木棺の間に詰められた土かとも考えられるが、鐵釘の出土位置からみると、こうした見方は困難であり、その意味については不明である。

墓壇中から出土した遺物には、人骨小片と鐵釘がある。

人骨は、脛骨の一部で左右どちらの足にあたるかは不明であるが、大きさよりみて、成人のものと考えられる。

鐵釘は、いずれも断面方形で頭部を折り返しただけのものであるが、多量に出上しており、図化できたものだけでも74点を数える。寸法は、大きく分ければ、4.4~5.2cmと大きいもの (15・17~22), 2.8~3.5cmと中位のもの (11・13・14・40~44・46), 1.5~2.5cmと小さいもの (45・47~66・68) の3種類がある。木日の付着状況は、釘頭、釘先の両方とも横方向に木目がみられるが、釘身を軸として直交しているa類が、6・10・11・13~16・23~25・38~40・45・51・52・54~58・60・61・69・74. 釘頭、釘先とも木目が平行して横方向にみられるb類が17・26・27・32・33・47~50,

釘頭に接して木目が横方向にみられ、中央から釘先においては縦方向になるc類には、2・20・21・42がある。また、釘が2方向から直角に交差して打ち込まれ、棺材の接合状況がわかるものには、4・5がある。

#### (4) 21号墓

緩やかに南から北へ傾斜する平坦面上にあり、隣接する20号墓とは、その南隅部付近で、ほぼ接している。

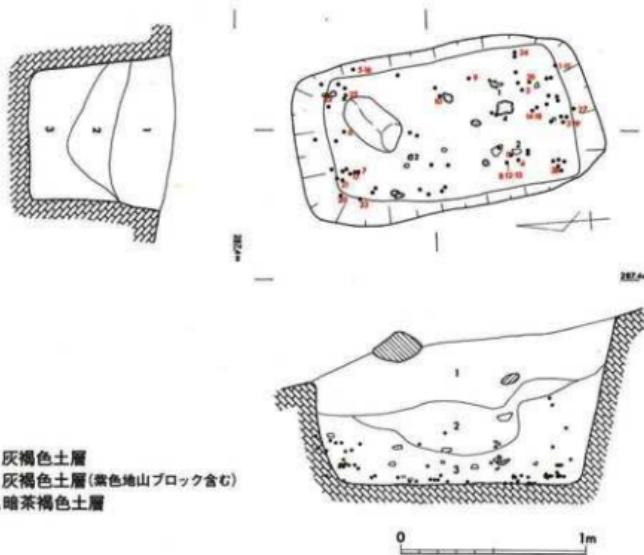
墓壙上には、北寄りに長さ35cm、幅20cmの石1個が標石として置かれていた。標石は陥没しておらず、木棺腐朽後に、墓壙を埋め直してから置かれたものとみられている。

墓壙は、斜面に直交するように営まれており、主軸はN5°Eである。平面形は、隅丸長方形を呈しており、規模は長さ1.65m、幅0.9m、深さ0.8mを測る。断面形は、南北壁は緩く外傾しながら立ち上っているが、東西壁は垂直に近く掘り込まれており、底面は平坦である。

埋土は、上層より灰褐色土層、地山ブロックを含む灰褐色土層、暗茶褐色土層の順に堆積しているが、木棺の痕跡などはみられなかった。

遺物は、墓壙中より、肥前系白磁瓶1、埴輪2、碗形器2、鐵滓、羽口片、鐵釘が出土した。

白磁瓶1は、墓壙中及び上面で破片となって検出されたもので、器高12.3cm、口径1.9cm、底径5.4cm



第40図 21号墓実測図

を測る。細い頸部と下膨みの胸部をもっており、外面にのみ灰白色の上釉がかけられている。外面肩部には、「御○」という字があり、「御神酒」または「御神前」と書かれているものとみられる。時期は18世紀後半から19世紀初頭である。

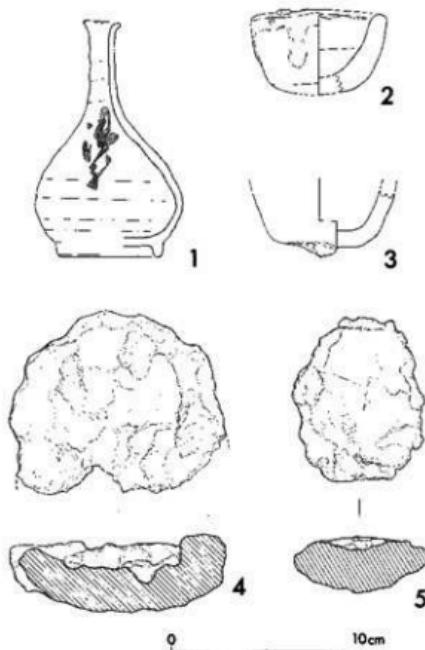
埴輪は、2個体分あると思われ、ともに墓壇中より小片で検出された。2は、復元口径7.2cm、同器高4.5cm程度になるとみられるもので、外傾する口縁部と丸味を帯びた底部を有している。外面は、表面が溶融状態になっており、光沢のある綠釉状を呈している他、内面には僅かに鉄分が付着している。胎土中に、3mm大の長石、石英を多く含み、色調は外面が緑灰色、内面は暗灰色を呈す。3は、底部の破片で、体部はやや丸味を帯び外傾しながら立ち上るが、底部は平底状になっている。外面は綠釉状になり、内面には僅かに鉄分が付着する。

胎土中に、3mm大の石英が含まれ、色調は、外面が暗緑灰色、内面が暗灰色である。

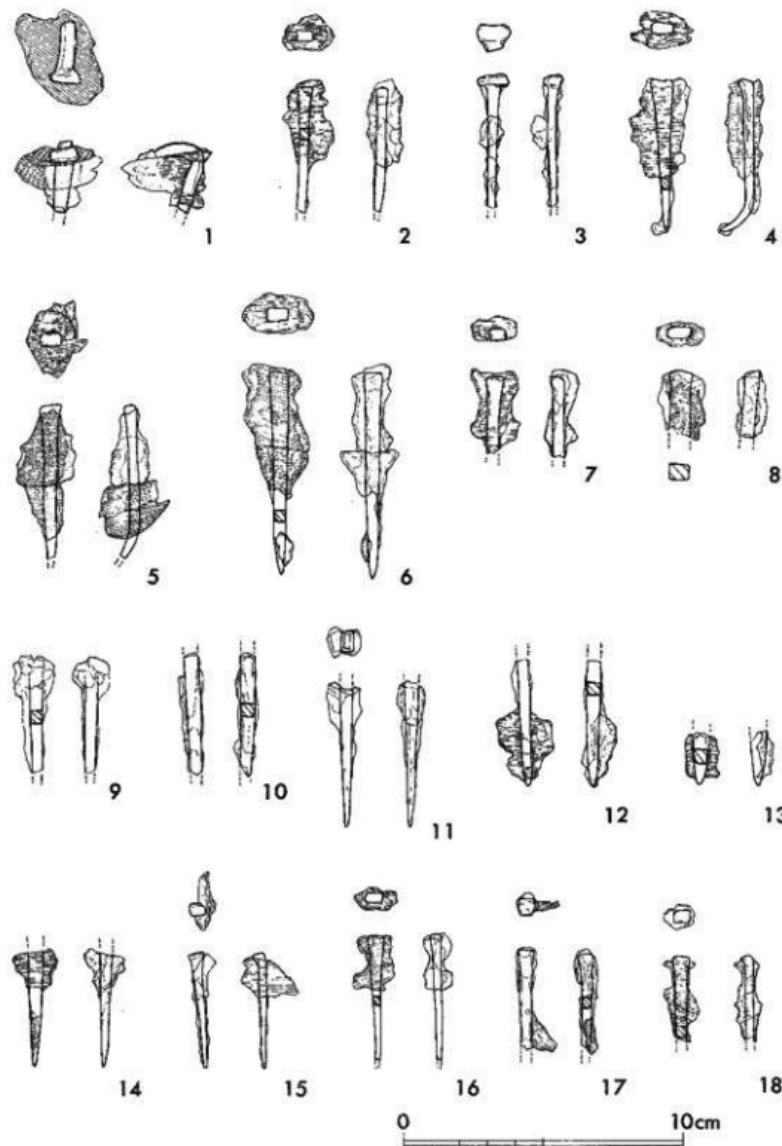
鏡形岸は、2点が確認され、ともに墓壇中より出土している。4は、半分を欠失しているが、周囲に丸い縁を残しており、現存長9cm、幅11cm、厚さは2.3cmである。断面形は底部が丸い舟底状を呈しており、重量は280gである。5は、長さ9.7cm、幅7cm、厚さ2.2cmを測る小形のもので、横円形を呈している。断面形は舟底状で、一部に木楔のかみ込みがみられ重量は190gである。

この他に、墓壇中からは多量の鉄滓が出土している。その詳細は、付論にゆずるが、鍛錬鉄冶滓と判断されている。以上のような、鍛冶に関する遺物は、21号墓以外では全く出土しておらず、この被葬者が、そうした作業に関係した人物であったと推定することもできる。

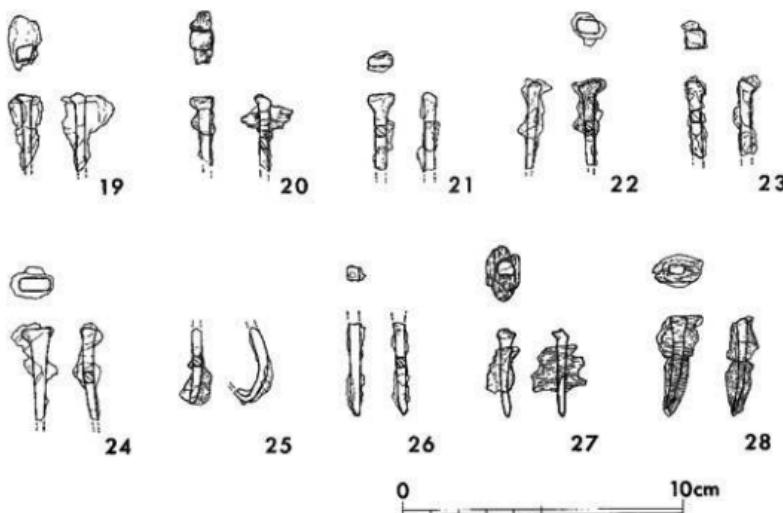
鉄釘は、断面方形で、頭部を折り返したものであるが、破損したものが多く、図化できたのは28点である。釘の寸法は、大きく分ければ、5.5~7.1cmと大きいものの(1~6・9~12・14)、4~4.3cmと中位のもの(15~16)、3.1~3.5cmと短いもの(27~28)がある。本日の付着状況は釘頭、釘先とも横方向に木目がみられるが、釘身を軸として直交するa類が5のみ、釘頭、釘先とも木目が平



第41図 21号墓出土遺物実測図(1)



第42図 21号墓出土遺物実測図(2)

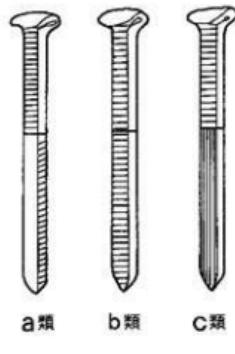


第43図 21号墓出土遺物実測図(3)

行して横方向にみられる b 類が 4・6・14、釘頭に接して木目が横方向にみられ、中央から釘先において縦方向になる c 類には、17・28がある。その他のものは、遺存状況が悪く状況を知ることができない。

## 註

- (1) 島根大学医学部第二解剖学教室 井上貴央先生の御教示による。
- (2) 陶器器の手法や時期については、下記文献を参考にした他、広島県立美術館 村上勇氏・九州陶磁文化館 大橋康二氏の御教示を賜った。  
a 大橋康二『肥前陶磁の変遷と出土分布』『国内出土の肥前陶磁』 九州陶磁文化館 1984年  
b 大橋康二『陶前陶磁』 1989年 など
- (3) 鉄釘に付着している木目については、a 類—釘頭・釘先の両方に横方向の木目がみられるが釘身を軸として直交するもの、b 類—釘頭・釘身の両方に横方向の木目が並行してみられ、中央に矧ぎ面があるもの、c 類—釘頭に接して木目が横方向にはしり、中央から釘先にかけては縦方向になるものの3つに分類でき、以下の鉄に付着した木質についての説明はこれによっている。
- (4) 島根大学医学部第二解剖学教室 井上貴央先生の御教示による。
- (5) 九州陶磁文化館 大橋康二氏の御教示による。



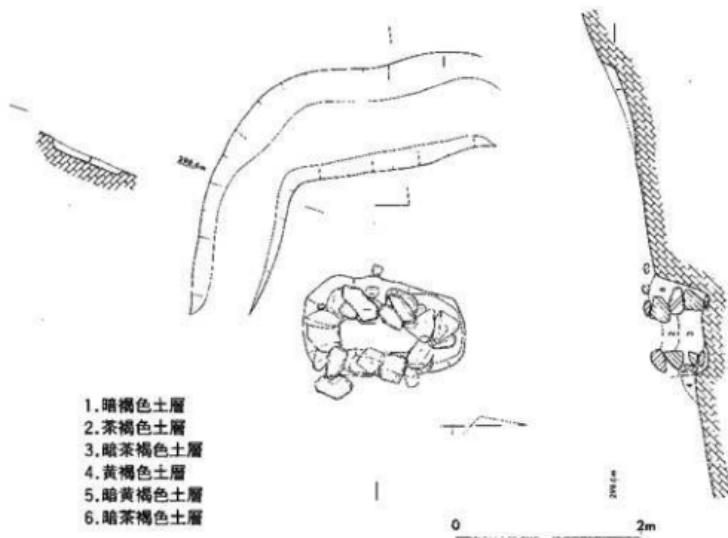
鉄釘木目付着状況模式図

## 4. Ⅲ区

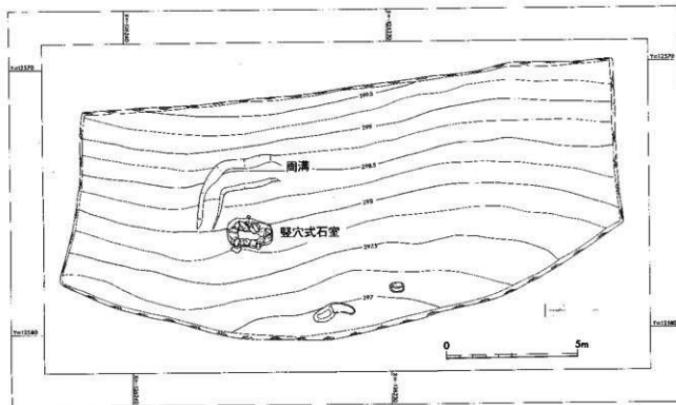
## (1) 古墳 (第44~49図)

Ⅲ区は、丘陵の東斜面中段に位置している。調査前には、緩い傾斜の変化がみられた地点で、「88年の第1次調査の際、トレンチをあけたところ、集石が確認されたため、他の2地点と同様に古墓が存在するものと考えていた。ところが、第2次調査に入り、集石の平面形を確認した時点では、これが小規模な竪穴式石室であることが判明し、古墳であることが明らかになった。この他には、Ⅲ区では遺構は検出されておらず、古墳1基が確認されたのみである。

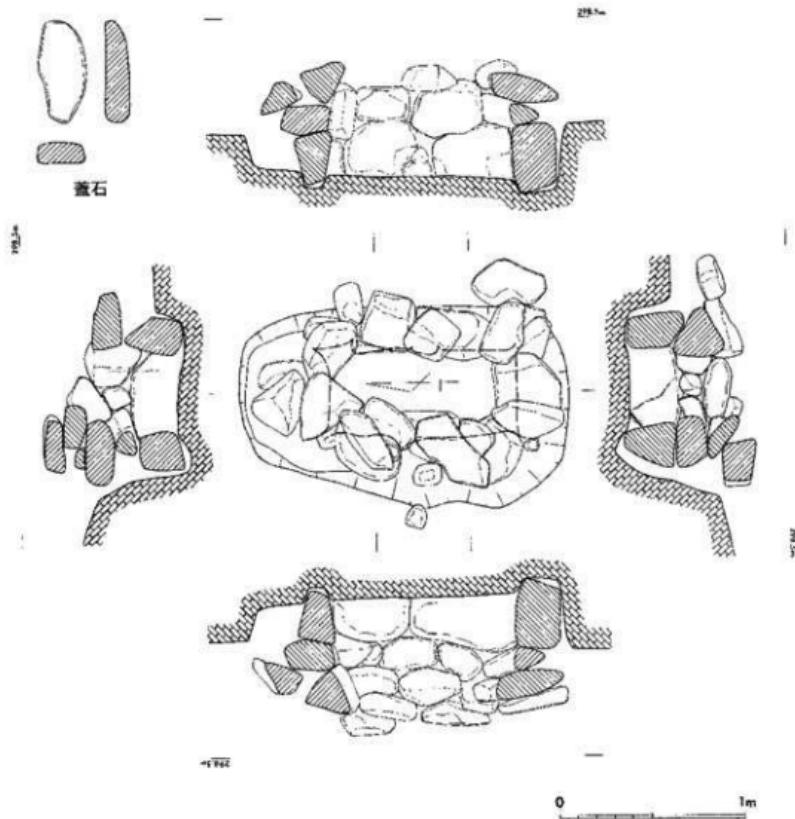
墳丘は、丘陵斜面に溝を掘って、墓域を画したものと思われるが、既に流出していたところが多く、形状や規模は明確ではない。周溝は、「コ」字形にめぐるものと思われるが、その一部が「L」字形に残っており、残存長は、内側で一辺2.2m、外側で一辺2.5m、幅0.7~1.2m、深さ5~10cmを測る。埋葬施設が、墳丘の中心にあるものとして復元すれば、周溝の内側で3m、外側で4m余りの規模をもつ古墳と考えられる。墳丘には、若干の盛土があったものと思われ、この盛土（黄褐色土層）を掘り込んで墓壙が設けられているが、その厚さなど詳細は不明である。調査前には古墳のある地点が、やや段をなすような形を呈していたので、石室の蓋石を覆う程度の盛土があったものと考えられる。周溝の埋土は、1層で暗褐色上層が堆積していた。



第44図 古墳実測図

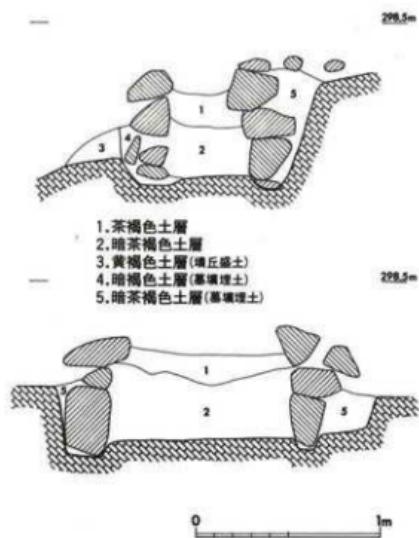


第45図 III区造構実測図



第46図 穫穴式石室実測図

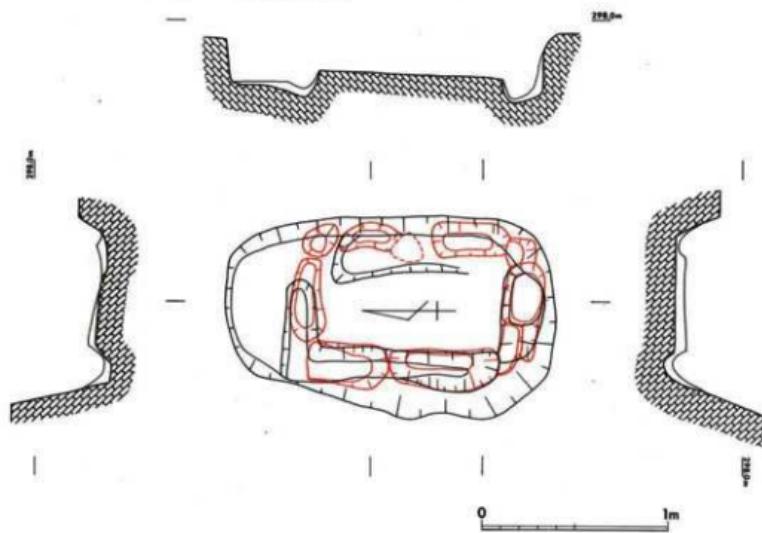
埋葬施設は、斜面と平行に營まれた竪穴式石室で、主軸はN1°Eとほぼ磁北を向いている。石室は、内法で長さ1.0m、幅0.45m、高さ0.7mを測る小規模なもので、平面形は長方形を呈する。各壁は、自然石の転石が用いられており、基底部には長側壁に各2枚、短側壁に各1枚の大形の石が立てて据えられ、その上に小形の石が2～3段小口積みにされている。石室の断面形は、各壁とも上部がやや狭く、持ち送りがみられる。石室は、検出時には既に蓋石は失われていたが、古墳下側の斜面で蓋石と思われる石材1つを確認した。蓋石は、長さ55cm、幅25cm、厚さ13cm前後のもので、石室の大きさからみて、このような蓋石が4～5枚かけられていたものと推定される。石室内の流入土は、2層で上層より茶褐色土層、暗茶褐色上層の堆積が認められた。石室は、地山を掘り込ん



第47図 竪穴式石室断面実測図

で設けられた墓壙の中に造られている。墓壙は、やや不整な長方形を呈しており、長さ1.75m、幅は南が広く1.1m、北側が0.7mで、深さは西側0.55m、東側0.2mである。石室は、この墓壙の南側に寄せて造られており、北側は墓壙と石室の間が30cm程度あいている。墓壙の底面には、石室の石材を据えるために、幅15～25cm、深さ5～10cmの溝が設けられ、石材の安定のため、その間に小さな石が入れられたり、置土が行われたりしていた。

遺物は、竪穴式石室内からは一切検出されていないが、墳丘より、須



第48図 竪穴式石室墓壙実測図(赤色は石室に残った石材位置)

恵器高杯の小片が出土している。これは、高杯の脚端部とみられ、復元底径は14.4cmを測る。端部は、段をなし、内外面に回転ナデが施されている。胎土は密、焼成は普通で、色調は淡青灰色を呈している。



第49図 田区出土須恵器実測図

## 5. 小 結

### (1) 古墳の時期とやつおもて古墳群との関係

#### ① 築造時期と構造

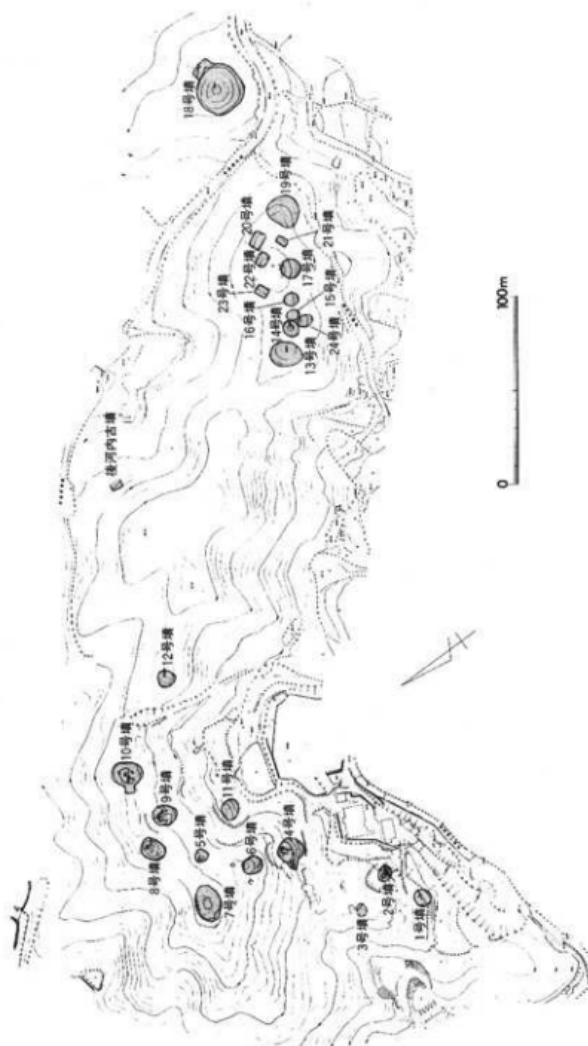
後河内古墳の時期は、墳丘で須恵器の小片が出土しているものの、堅穴式石室の中から遺物が検出されなかったこともあって明確にはできない。しかし、石室が各壁を3~4段程度に積んだ規模なもので、基底部の石材を立てて用いている点は新しい要素として捉えることができる。同様な構造をもつ堅穴式石室としては、周辺では、やつおもて18号墳第1主体、同21号墳、重富古墳、小才10号墳があげられる。<sup>(1)</sup>

やつおもて18号墳の墳丘からは陶邑編年MT15併行、同21号墳の石室内からはTK43~209併行の蓋杯が出土しており、共に古墳時代後期に営まれたものである。同様な例は、石見地域ではあまり明らかになっていないが、中国山地を越えた山陽側では広島県高田郡美土里町向井古墳、同宮谷古墳、山県郡千代田町金子2号墳、同塚追1・2号墳など多く知られている他、松江市でも喰ヶ谷1号墳<sup>(2)</sup>で検出されている。これらは、いずれも古墳時代後期に営まれたものであり、後河内古墳の築造時期もこの頃と考えられる。<sup>(3)</sup>

後河内古墳の堅穴式石室は、長さ1.0m、幅0.45mで、類例と比べても非常に小さいものである。被葬者について推定することは困難な点が多いが、成人を伸展葬にはできないことから、小児用の埋葬施設を考えることもできる。また、その規模からみて、遺骸を直接納める棺としての機能をもっていたことが想定される。やつおもて18号墳第1主体や喰ヶ谷1号墳では、各々石室の床面に石枕や須恵器が置かれており、やはり棺としての機能をもつものであったと考えられるが、この時期の堅穴式石室の多くはこの種の埋葬方法をとるものとも思われる。

#### ② やつおもて古墳群との関係

後河内古墳が所在する低丘陵には、頂部及び南斜面を中心に石見地域でも有数の後期群集墳として知られるやつおもて古墳群がある。同古墳群では、現在のところ24基の古墳が確認されているが、分布のまとまりや内部構造よりすれば、東西2つの群に大きく分けることができる。西側の1号墳から12号墳より構成される一群は、丘陵頂部と南斜面を中心に分布し、規模は10m前後の円墳が多いが、全長21.8mの前方後円墳である10号墳などを含んでいる。埋葬施設は既に閉口している9号墳<sup>(4)</sup>にみられるように横穴式石室を主体としているものと考えられる。これに対し、東側の13号墳か



第50図 後河内古墳とやつおもて古墳群の分布

ら24号墳まで的一群は、丘陵頂部及び北側を含めた斜面に分布しており、全長26mの造出付の円墳である18号墳を除けば、規模は10m未満のものがほとんどで、1～5m前後の非常に小規模なものもある。埋葬施設は、小規模な竪穴式石室や木棺直葬などで、横穴式石室をもつものはみられず、西群と対照的なあり方を示している。

後河内古墳は、両者の中間に位置しており、現在のところ1基が確認されているのみであるが、やつおもて古墳群の1支群とみることもできる。墳丘の規模や埋葬施設の構造は、古墳群のうちでは西群に近いものと思われるが、東・西両群の相違について意義づけを行うことは困難な点が多く、今後の検討課題としたい。

## (2) 古墓群の時期と構造

### ① 営造時期

後河内古墓群は、総数21基の古墓で構成されており、かなり長期にわたって形成されたものとみられる。古墓及びその周辺より出土した陶磁器には、唐津系陶器類、肥前系陶器類、肥前系陶胎染付類、在地窯系陶器類がある。このうち、最も古いものは、17世紀前半の唐津系鉄絵小皿で、江戸時代初期に遡るが、1点があるにすぎない。出土量が最も多いものは、18世紀後半及び19世紀前半から中頃の肥前系磁器類で、古墓が盛んに営まれた時期は、江戸時代中期から幕末にかけてであったと考えられる。

陶磁器が出土している各古墓の時期は、10号墓が18世紀前半から中葉、7・8・11号墓が18世紀後半、21号墓が18世紀後半から19世紀初頭、14号墓が19世紀前半から幕末とみられる。

### ② 埋葬方法と墓壙の形態

埋葬方法は、大きく分けると、火葬と土葬の2種類がある。火葬を行ったとみられるものは、5号墓を切って掘り込まれている浅い土壙で火葬骨が出土している。この他、6号墓、9号墓、18号墓は、火葬骨など直接火葬にしたことを示す遺物は検出されていないが、墓壙の形状が不整形で、規模も小さく、木棺を納めたとは考えにくいので、火葬墓である可能性がある。

土葬墓は、木棺の有無、形状、墓壙の形態から3種類のものが認められる。その1は、長方形、または正方形の墓壙をもち、鉄釘が出土したことから、組み合せ式木棺を納めたと考えられるもので、5号墓、8号墓、13号墓、15号墓、17号墓、20号墓、21号墓があげられる。その2は、長方形または正方形の墓壙を有するが、鉄釘が出土しなかったもので、1号墓、2号墓、4号墓、7号墓、10号墓、12号墓、19号墓がある。木棺を用いず、墓壙内に直に埋葬したとも考えられるが、棺材の接合を鉄釘以外で行った場合もあると思われるもので、この点は検討が必要である。その3は、円形の深い墓壙を有し、棺桶を用いたとみられるもので、14号墓がある。

すべての古墓で時期が判明しているわけではないので、埋葬方法と時期の関係は不明な点がある。

しかし、この古墓群が最も盛んに形成された18世紀代から19世紀代初頭のものは、長方形または方形の墓壙を有し、組み合せ式木棺を用いているが、19世紀前半から幕末とみられるものは円形の墓壙で棺桶を納めており、前者から後者へ埋葬方法が推移していったものと考えることもできる。

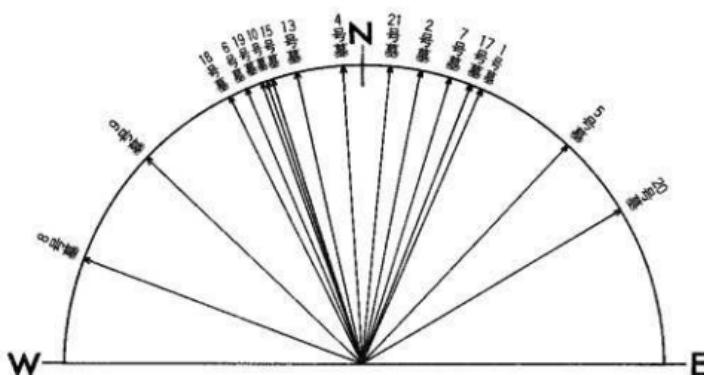
### ③ 墓壙主軸の方向

後河内古墓群では、人骨がほとんど残っていないため、被葬者の頭位については全く不明である。しかし、各古墓の主軸、すなわち長辺の方向をみると、斜面に平行するように営まれているものがある一方で、10号墓、17号墓、19号墓、21号墓のように直交するものも含まれており、墓壙の設け方としてはやや不自然な印象を受けた。そこで、各古墓の主軸方向をまとめたものが、第51図である。これによれば、古墓の大半は北を中心に50度の範囲に主軸を置いていることが窺え、その方向に向らかの意識がはたらいていたことが推定された。

近世の古墓は、調査例が少なく比較検討する例に恵まれないが、鹿足郡六日市町九郎原I遺跡<sup>(8)</sup>では、9基の古墓のうち、遺体が確認されたものはすべて頭を北方向に置き、足を折って埋葬する屈葬で、顔面は西に向けられていたという。また、墓壙はいずれも不整な長方形で、頭位のある北方に主軸を置いて据えられている。このことについて、報告者は顔面を西に置くという点で、「西方浄土」に関連する可能性を指摘している。

後河内古墓群では、被葬者が埋葬された際の姿勢までは分からぬが、墓壙の主軸を北方向に置くという点では共通しており、「頭北面西」という仏教的な考え方方が反映されているとみることも可能であると思われる。

(角田徳幸)



第51図 古墓墓壙主軸の方向

第1表 後河内古墓群一覧表

	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	平面形	主軸の方向	集石の 有無	釘の 有無	備考
1号墓	1.2	0.8	0.8	長方形	N23°E	○	×	
2号墓	1.4	0.9	0.85	長方形	N11°E	○	×	
3号墓				墓 壇 無 し		○	×	集石の間で瓦質容器
4号墓	0.8	0.8	0.5	方 形	N4°W	○	×	
5号墓	1.0	0.85	0.65	長方形	N43°E	○	○	火葬墓と複合か? 人骨片
6号墓	0.9	0.9	0.1	方 形	N23°W	○	×	
7号墓	0.9	0.6	0.5	長方形	N17°E	○	×	集石の間で磁器片
8号墓	0.9	0.7	0.9	長方形	N70°W	○	○	集石の間で磁器片
9号墓	0.7	0.5	0.2	椭円形	N47°W	○	×	
10号墓	0.95	0.7	0.7	隅丸長方形	N19°W	○	×	集石の間で磁器片
11号墓				墓 壇 無 し		○	×	集石の間で磁器片
12号墓	0.85	0.7	0.3	隅丸長方形	-	○	×	
13号墓	0.7	0.7	0.6	隅丸方形	N13°W	○	○	
14号墓	1.1~1.2	1.3	円 形	-	-	○	×	集石の間で磁器片 墓壇中より川原石、木片
15号墓	1.35	1.0	0.9	隅丸長方形	N18°W	○	○	
16号墓				墓 壇 無 し		○	-	
17号墓	1.1	0.65	0.85	隅丸長方形	N21°E	○	○	
18号墓	0.55	0.45	0.25	椭円形	N27°W	○	×	
19号墓	1.1	0.65	0.6	隅丸長方形	N20°W	×	×	
20号墓	1.8	1.7	1.5	隅丸正方形	N59°E (方形基盤)	○	○	墓壇中より人骨
21号墓	1.65	0.9	0.8	隅丸長方形	N5°E	○	○	墓壇中より磁器、鍛冶滓

註

- (1) 中国横断自動車道広島浜田線建設工事に伴って、1989～90年に鳥取県教育委員会が発掘調査を行った。
- (2) 領應器の編年は、田辺昭三氏の編年に依る。
  - a 田辺昭三『陶邑古窯跡群』 I 平安学園 1966年
  - b 田辺昭三『須恵器大成』 1981年
- (3) 広島県教育委員会『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 1982年
- (4) 松江市教育委員会『吹ヶ谷古墳群』 1981年
- (5) 中国横断自動車道広島浜田線建設工事に伴って、1990年に鳥取県教育委員会が発掘調査を行った結果、確認した現在までの總数である。
- (6) 加町教育委員会『やつおもて18号墳』 1990年
- (7) 鳥取県教育委員会『中国横断道予定地内遺跡分布調査報告書』 1982年
- (8) 鳥取県教育委員会『中国縦貫道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 1980年

## 付論

## 後河内古墓群出土鉄滓の金属学的調査

新日本製鐵八幡技術研究部 大澤正己

## 概要

江戸時代後期の後河内古墓群21号墓出土の2個の鉄滓を調査して次の事が判明した。

〈1〉 出土鉄滓は鉄器製作に際して排出された鍛錬鐵治滓（小鐵治滓）に分類される。形状は、鍛冶炉の炉底に堆積した椀形滓である。

〈2〉 鉄滓の鉱物組成は、成長したヴスタイト（Wüstite : FeO）とその粒間を埋めるファイライド（Fayalite : 2FeO · SiO<sub>2</sub>）が共存する鍛錬鐵治滓特有の晶癖を残す。なお、鉄滓中には、鉄素材の一部の金属鉄が残存し、極低炭素鋼（C : 0.01%以下）の組織が確認できた。

〈3〉 化学組成は、全鉄分（Total : Fe）が50~55.2%と多く、ガラス質成分（SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O）は20~28.7%と少ない。一方、随伴微量元素の二酸化チタン（TiO<sub>2</sub>）0.31~0.32%，バナジウム（V）0.08%と低値は、地元の真砂（酸性）砂鐵系鉄の鉄素材を鍛錬する時点で排出された滓と推定できる。

〈4〉 今回調査の鉄滓は、江戸時代後期の墓出土副葬品として捉えれば、この風習は製鐵のルーツと考えられる5世紀代の韓國の古墳まで遡り、列島内では古墳時代、古代、中世、近世まで連なることが確認できた事になる。これら副葬された鉄滓は、いずれも被葬物が鉄および鉄器生産に由縁のあった物的証拠品とみなせるであろう。

## 1. いきさつ

後河内古墓群21号墓は、島根県那賀郡旭町本郷に所在する。この21号墓は江戸後期に比定されるが、ここより数点の鉄滓と羽口が共存して副葬されていた。

このうちの2点の鉄滓について、島根県教育委員会より調査依頼があったので、鉱物組成と化学組成から鉄滓の性格を明らかにした。

なお、列島内の墓に鉄滓を副葬する習俗は、古墳時代中期（5世紀代）から確認され、古代、中世、近世まで連なり、鉄滓の科学的調査も一部行われているが、江戸時代後期の鉄治滓の調査例は、今回が初例となる。

## 2. 調査方法

## 2-1. 供試材

調査試料はTable. 1に示した椀形状鉄滓2点である。

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

符 号	試 料	出土位置	推 定 年 代	計 測 値		調 査 項 目			
				サ イ ズ (mm)	重 量 (g)	肉 眼 觀 察	顯微鏡組織	ビ ッ カ イ ズ 断面硬 度	化 学組 成
K-901	鉄形滓	古墓群21号墓	江戸後期	50×70×40	135	○	○	○	○
K-902	〃	〃	〃	80×50×30	175	○	○	○	○

## 2-2. 調査項目

### (1) 肉眼観察

### (2) 顕微鏡組織

鉄滓は、水道水で十分に洗滌した後、中核部をベークライト樹脂に埋込み、エメリーワイヤー研磨紙の#150, #240, #320, #600, #1,000と順を追って研磨し、最後は被研面をダイヤモンドの3μと1μで仕上げて検鏡している。

### (3) ビッカーズ断面硬度

鉄滓の鉱物組成及び鉄滓中に残存した金属鉄の組織同定を目的として、ビッカーズ断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬度の測定を行った。試験は鏡面研磨した試料面に136°の頂角をもつたダイヤモンドを押し込み、その時に生じた座みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡試料を併用した。

### (4) 化学組成

鉄滓の分析は次の方法で行っている。

重クロム酸使用の重量法：酸化第1鉄 (FeO), 二酸化珪素 (SiO<sub>2</sub>)。

赤外吸収法：炭素 (C), 硫黄 (S)。

原子吸光法：全鉄分 (Total Fe), 酸化アルミニウム (Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>), 酸化カルシウム (CaO), 酸化マグネシウム (MgO), 二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>), 酸化クロム (Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>), バナジウム (V), 銅 (Cu)。

中和滴定法：五酸化磷 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>)。

## 3. 調査結果と考察

### (1) K-901鉄滓

#### ① 肉眼観察

表皮は淡紅灰色を呈し、肌は小波状凹凸を有し、これに木炭痕を残す。裏面は茶色で反応痕をもち、木炭痕を有する。破面は黒茶色で緻密質であり、表皮側と底部に気泡を発する。鍛冶炉のか底に堆積生成された掩形滓の約1/4の破片である。

## ② 顕微鏡組織

Photo. 1 の①②③に示す。鉱物組成は、白色粒状のヴスタイト (Wüstite : FeO) が多量に晶出し、その粒間に淡灰色長柱状結晶のファイヤライト (Fayalite : 2FeO · SiO<sub>2</sub>) と、基地の暗黒色ガラス質スラグが存在する。鍛治滓特有の晶癖である。

## ③ ピッカーズ断面硬度

Photo. 1 の①に圧痕写真を示す。ヴスタイト (Wüstite : FeO) の組織同定を目的として硬度の測定を行った。硬度値は、480Hv, 498Hvである。文献硬度値<sup>(3)</sup>で450~500Hvがヴスタイトの値であり、該品の値は、ほぼこれに準ずる。

## ④ 化学組成

Table. 2 に示す。鍛治滓であるので鉄分が多く、全鉄分 (Total Fe) は50%で、このうち、酸化第1鉄 (FeO) 53.5%と高く、酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) は12.03%の割合である。金属鉄の酸化物はあまり含まれていない。ガラス質成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O) らは28.72%で、このなかの酸化カルシウム (CaO) が3.11%，酸化マグネシウム (MgO) 1.19%と高目が特徴的である。鍛冶に供した鉄素材や、炉材粘土の影響と考えられる。

随伴微量元素は、二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) が0.32%，バナジウム (V) 0.008%と少ない。鍛冶素材は真砂（酸性砂鉄）系の錫<sup>2+</sup>が使用された可能性をもつ。他成分は、酸化マンガン (MnO) 0.45%，酸化クロム (Cr<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) 0.02%，硫黄 (S) 0.064%，五酸化磷 (P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>) 0.52%で、通常鍛治滓成分であるが、銅 (Cu) が0.074%は高目である。鍛練鍛治滓の成分系である。

## （2）K-902鉄滓

### ① 肉眼観察

表皮は鉄鏽の赤褐色を呈し、ややなめらかな肌に木炭痕を残す椀形滓である。形状は長方形に近い橢円形である。裏面も表皮と同色で反応痕を有する。破面は基地は黒色であるが局部的に赤黒色の鉄分の高い個所が認められ、金属鉄の残留が予測された。

## ② 顕微鏡組織

Photo. 1 の④⑤⑥⑦⑧に示す。鉱物組成の主体はヴスタイト (Wüstite : FeO) 粒の凝集であり、鉄分が多い事が判る。又、金属鉄の殘留が認められる。⑤は金属鉄のピクリル（ピクリン酸のアルコール饱和液）で腐食（Etching）させた炭化物組織を示す。フェライトの結晶粒界に、極く微量の紐状セメントタイト (Cementite : Fe<sub>3</sub>C) が認められる。しかしこの組織から推定した鉄中炭素 (C) 量は、0.01%以下で純鉄に近いものである。

⑥は、フェライト (Ferrite : α鉄、純鉄) の結晶である。全体に白い地がフェライトであり、黒い細い線がフェライト粒界を示す。鍛治炉中で加熱後、徐冷を受けているので結晶粒は齊粒で歪

は完全に除去されている。鍛冶炉の炉温は800°Cを越えたと推定される。

### ③ ピッカーズ断面硬度

Photo. 1 の⑦に鉄滓中に晶出したヴスタイト (Wüstite : FeO) の硬度測定結果を示す。硬度値は432Hv, 441Hvである。K-901鉄滓のヴスタイトより幾分低目である。しかし、この数値はバラツキの範囲内で収める事ができる。

Photo. 1 の⑧は、金属鉄の硬度値で81.8Hv, 85.6Hvと軟かい。鉄素地には炭化物がほとんど含有されず軟質傾向は妥当な値である。

### ④ 化学組成

Table. 2 に示す。該滓も鉄分は多く、全鉄分 (Total Fe) で55.2%, 酸化第1鉄 (FeO) が41.8%, 酸化第2鉄 (Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>) が32.5%で、金属性鉄の酸化物がかなり含有されているのが判る。ガラス質成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO+K<sub>2</sub>O+Na<sub>2</sub>O) が20.29%と少ない。二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) 0.31%, バナジウム (V) 0.008%で、これらを総合すると、やはり砂鉄系鉄素材の鍛錬鍛治で排出された滓に分類される。K-901鉄滓と同系である。

Table. 2 に後河内古墓群と同地区的那賀郡旭町所在で橋谷鉢出土砂鉄製練滓がある。全鉄分 (Total Fe) が39.4%, ガラス質成分 (SiO<sub>2</sub>+Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>+CaO+MgO) 30.76%, 二酸化チタン (TiO<sub>2</sub>) 7.81%, バナジウム (V) 0.30%である。K-901, K-902鉄滓は、この橋谷鉢の製練滓の成分系に属する鉄素材の鍛治での排出物とみなす事ができよう。

## 4. まとめ

後河内古墓群21号墓から出土した鉄滓は、真砂（酸性砂鉄）系砂鉄を原料とする鉄素材の鉄器製作時に排出された鍛冶滓に分類できる。すなわち、鍛錬鍛治滓（小鍛冶滓）である。

21号墓被葬者は、何らかのかたちで、鍛冶に関与した人と想定できる。直接鍛冶作業に従事した職人の可能性も強いが、結論は今後の各方面からの検討が必要と考える。

## 註

- (1) 大澤正己「日本と朝鮮半島の鉄生産」『季刊考古学』第33号 1990年 74, 75頁。
- (2) (イ) 大澤正己「古墳出土鉄滓からみた古代鍛冶」『日本製鉄史論集』たたら研究会編 1983年, 147頁。  
(ロ) 大澤正己「鍛冶屋遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『鍛冶屋遺跡』(岡山県埋蔵文化財発掘調査報告70) 岡山県古代吉備文化財センター 1988年 404頁。
- (3) 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968年。

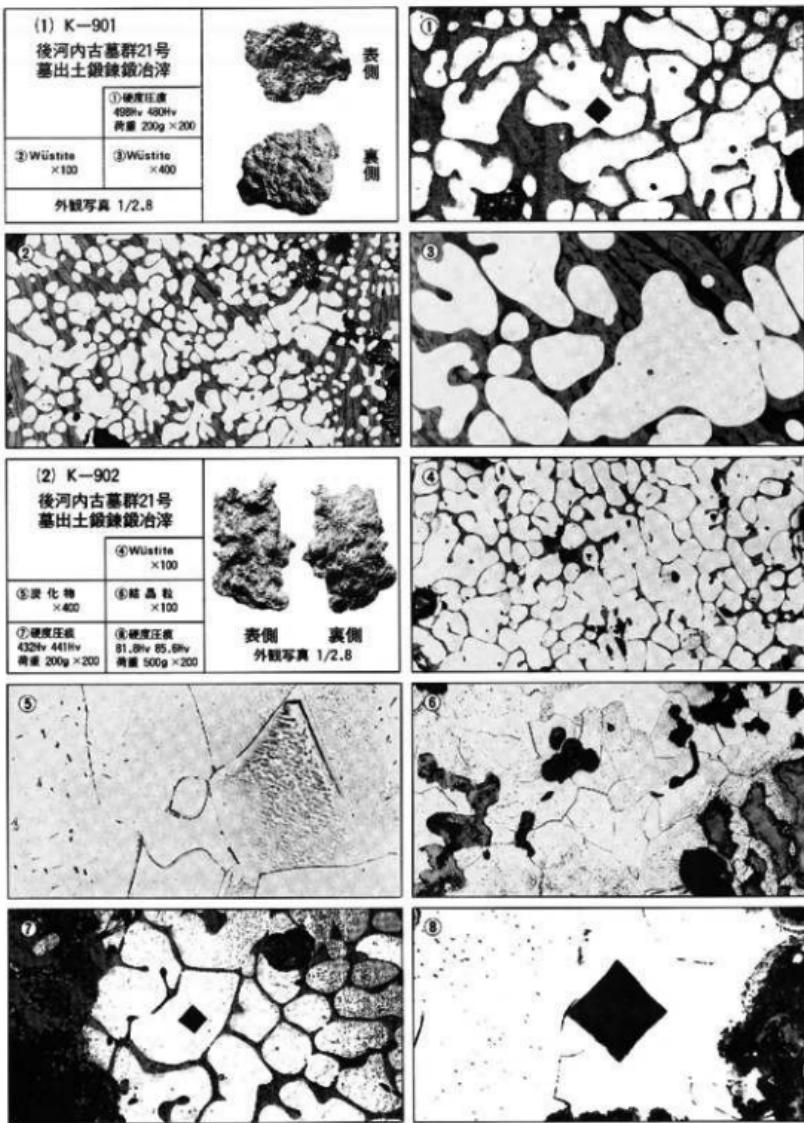


Photo.1. 鐵津の顯微鏡組織と硬度圧痕



Table. 2 那賀郡瑞穂町及び那賀郡旭町出土鉄滓の化学組成

試料番号	遺跡名	出土位置	種別	推定年代	金鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化第2鉄 (SiO <sub>2</sub> )	二酸化アルミニウム (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化カーネルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K <sub>2</sub> O)	酸化ナトリウム (Na <sub>2</sub> O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO <sub>2</sub> )	酸化クロム (Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	硫黄 (S)	酸化クロム (P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> )	炭素 (C)	五酸化鉄 (V)	炭素 (Cu)	鋼 ( $\text{Ni}/\ell$ )	造形成分 Total Fe	造形成分 Total Fe	
K-901	後河内	古墓群21号墓	鍛錬鐵治場	江戸時代後期	50.0	-	53.5	12.03	18.76	5.66	3.11	1.19	2.46	0.17	0.45	0.32	0.02	0.064	0.52	0.13	0.008	0.074	28.72	0.574	0.006
K-902	"	"	"	"	55.2	-	41.8	32.5	12.84	4.24	2.35	0.86	1.81	0.08	0.42	0.31	0.01	0.37	0.33	0.12	0.008	0.051	20.29	0.368	0.006
Q-892A	今佐屋山	I区 製鉄遺構東土坑	砂鉄製鍊岸	6C後半	40.3	0.26	47.1	4.90	24.6	7.86	4.36	1.84	1.50	0.31	0.71	5.55	0.054	0.032	0.24	0.12	0.17	0.004	40.47	1.004	0.138
Q-893A	"	I区 製鉄遺構西坑	"	"	41.4	-	45.1	9.14	23.50	8.64	3.80	1.96	-	-	0.73	6.11	0.04	0.048	0.22	0.06	0.21	0.039	37.90	0.916	0.148
Q-894A	"	I区 製鉄遺構下	"	"	42.2	-	48.9	6.02	23.46	7.87	4.04	1.87	-	-	0.72	6.13	0.05	0.035	0.21	0.07	0.19	0.035	37.24	0.882	0.145
Q-895A	"	I区 SiO <sub>2</sub>	"	"	43.0	-	47.8	8.36	23.06	7.51	4.38	1.73	-	-	0.65	5.12	0.04	0.038	0.22	0.12	0.14	0.039	36.68	0.853	0.119
R-891	"	W区 製鉄遺構	"	中世	39.7	-	47.4	4.00	18.04	5.07	1.51	0.64	-	-	1.43	20.31	0.09	0.022	0.13	0.09	0.40	0.061	25.26	0.636	0.512
Q-891	今佐屋山	I区 製鉄遺構東土坑	砂鉄	6C後半	61.3	-	24.53	60.4	2.80	2.81	0.16	0.99	0.02	0.02	0.50	4.65	0.04	-	0.055	-	0.172	0.003	6.80	0.111	0.076
S-891	木尾山	邑智郡瑞穂町 去探	"	近世	40.3	-	48.6	3.67	28.1	5.14	2.17	0.66	-	-	1.26	6.98	0.05	0.017	0.024	0.12	0.21	0.028	36.07	0.895	0.173
S-892	"	"	"	"	35.5	-	42.8	3.20	29.0	6.53	3.15	0.69	-	-	1.88	9.27	0.04	0.018	0.047	0.11	0.19	0.026	39.37	1.109	0.261
S-893	鍛冶屋塚	"	鍛錬鐵治場	"	43.9	-	28.7	30.8	14.82	4.10	0.82	0.76	-	-	0.13	0.44	0.03	0.17	0.27	8.94	0.016	0.023	20.50	0.467	0.010
S-894	"	"	"	"	40.9	-	36.2	18.29	26.20	7.52	1.82	0.86	-	-	0.14	0.36	0.02	0.071	0.24	1.17	0.009	0.026	36.40	0.890	0.009
S-895	"	"	"	"	44.4	-	32.3	27.5	20.70	5.80	1.83	0.75	-	-	0.31	1.18	0.03	0.057	0.24	1.02	0.032	0.057	29.08	0.655	0.027
S-897	折谷鉢	那賀郡瑞穂町 去探	砂鉄製鍊岸	"	39.4	-	42.2	9.33	23.50	4.96	1.78	0.52	-	-	1.65	7.81	0.06	0.043	0.018	0.29	0.30	0.044	30.76	0.781	0.198
2T-841	下田畠	邑智郡瑞穂町 去探	"	"	42.8	-	48.1	7.69	27.6	6.00	2.94	0.66	-	-	1.29	3.96	0.14	0.021	0.19	0.06	0.24	Ni $/\ell$	37.29	0.869	0.093
2T-842	大林たたら	"	"	"	34.3	-	40.0	4.56	29.3	6.75	3.25	0.87	-	-	1.55	12.84	Ni $/\ell$	0.028	0.29	0.06	0.16	Ni $/\ell$	40.17	1.171	0.374
2T-843	大林たたら	"	"	"	38.2	-	41.7	8.31	25.9	6.90	2.94	1.06	-	-	1.36	10.76	Ni $/\ell$	0.037	0.27	0.08	0.16	Ni $/\ell$	36.80	0.963	0.282
2T-844	"	"	"	"	-	-	-	-	-	Si	Al	Ca	Mg	Ni	Cr	0.010	P	0.08	0.16	Ni $/\ell$	-	-	-	-	-
2T-845	久喜武山	"	銀採取場	"	35.7	-	41.5	4.89	27.8	7.98	5.53	0.57	-	-	0.97	0.22	Ni $/\ell$	2.80	0.19	0.02	Ni $/\ell$	0.073	41.88	1.173	0.006
2u-841	長尾原	B地点住跡	鍛錬鐵治場	?	26.1	-	30.6	3.30	48.9	10.86	1.22	0.38	-	-	0.94	0.25	Ni $/\ell$	1.39	0.12	0.07	0.006	0.065	61.36	2.351	0.010
2u-842	"	邑智郡瑞穂町 亀谷	"	古墳時代後半	25.0	-	26.9	5.88	49.6	10.53	1.12	0.35	-	-	0.84	0.27	Ni $/\ell$	1.34	0.12	0.20	0.005	0.071	61.60	2.464	0.010
2u-843	タタラ曾根	邑智郡瑞穂町下出所	砂鉄製鍊岸	?	33.7	-	38.9	4.91	32.7	6.80	2.05	0.48	-	-	2.32	9.47	Ni $/\ell$	0.018	0.12	0.40	0.076	Ni $/\ell$	42.04	1.248	0.281
IMII-22A	龍ノ上鉢	邑智郡瑞穂町大草	砂鉄製鍊岸	"	37.2	-	43.0	5.47	31.1	5.25	2.55	0.57	0.22	0.05	1.29	5.65	0.05	0.024	0.017	0.66	0.27	0.003	39.69	1.067	0.152
-22B	"	"	"	"	35.3	-	42.2	3.47	35.5	6.37	1.96	0.43	0.15	0.04	1.23	4.95	0.05	0.021	0.016	0.10	0.23	0.002	44.45	1.259	0.139
-22C	"	"	"	"	38.5	-	46.8	3.14	31.2	4.95	2.49	0.52	0.34	0.07	1.29	5.71	0.05	0.020	0.017	0.23	0.27	0.002	39.57	1.028	0.148
-22D	"	"	"	"	38.9	-	48.3	2.02	30.5	5.52	2.57	0.46	0.41	0.06	1.37	5.46	0.05	0.024	0.024	0.08	0.24	0.002	39.53	1.016	0.140
IMII-23	長尾原E	邑智郡瑞穂町F亀谷	"	"	42.5	-	51.6	3.42	20.20	5.07	2.66	0.87	1.16	0.16	0.90	11.99	0.06	0.015	0.240	0.08	0.23	0.005	30.12	0.709	0.282
IMII-24A	大林銀山	山の内蔵鍊岸所	銀精鍊岸?	"	34.8	Ag 0.016	43.3	1.62	28.40	7.82	5.09	0.64	1.15	0.11	2.05	0.21	0.02	2.44	0.403	0.08	0.006	0.039	43.21	1.242	0.006
-24B	"	"	"	"	24.17	Ag 0.024	24.86	6.93	47.2	9.19	1.47	0.49	0.51	0.05	1.13	0.23	0.02	1.34	0.250	0.17	0.004	0.052	58.91	2.437	0.010
IMII-25	人頭御劍	邑智郡瑞穂町岩野	大鉄塊	近代?	C	Si	Mn	P	S	Cu	Ti	V	Ni	Cr	Co	Mn	Sn	Total Fe	0.004	0.052	58.91	2.437	0.010		
					2.00	Ni $/\ell$	0.050	0.006	0.008	0.015	0.003	0.011	0.011	0.002	0.007	0.007	As	Total Fe	0.004	0.052	58.91	2.437	0.010		

# 第III部 總括



# 第I章 繩文時代

第II部第1章で報告したように、邑智郡瑞穂町市木郷路橋遺跡から縄文時代の中期を除く各時期の遺物が、遺構面とともに検出された。島根県西部の中国山地における縄文時代については、早期押型文土器期や後～晩期の資料が若干知られているのみで不明な点が多く、今回の調査結果はその空白部分を埋める基礎資料となるものである。以下にいくつかのテーマ毎に、その成果と特徴について若干整理をしておきたい。

## 1. 縄文土器について

路橋遺跡から出土した縄文土器は、早期後葉～前期、後期、晩期の大きく3時期に分かれるが、出土層位と形態的な特徴から、それらを第1群から第8群まで大別することができる。<sup>(1)</sup>

**第1群土器** 縄文時代早期後葉から末に相当すると考えられる土器群で、F区茶褐色土およびD～G区第3黑色土から出土した。胎土に植物纖維を多く混入しており、次の3種類に細分される。

第1類 厚手無文土器（第15図1～5） 器厚9～12mmで、尖底を呈する。

第2類 条痕地縄文土器（第13図1～4、第15図15～19） 外面に縄文を施す土器（a類）と内外面に施文する土器（b類）の2種類に分かれる。平底である。

第3類 条痕土器（第12図1・2・5、第15図6～14） 器厚6～7mmで赤褐色を呈し、やはり平底である。

**第2群土器** 縄文時代早期末頃に相当すると考えられる土器群で、第1群土器と同じD～G区第3黑色土からアカホヤ火山灰までのところで出土しているが、第1群土器よりもやや薄手のものが多い。出土点数は少ないが5類に細分できる。

第1類 無文土器（第12図3、第13図13～15） 灰～黒褐色を呈し、ナデまたは条痕調整を行う。

第2類 沈線文土器（第13図5・6） 口縁部に2本単位の沈線文を施す。

第3類 刺突文土器（第13図7～10） 口縁部に2段以上の刺突文列を施す。

第4類 隆帶文土器（第12図4、第13図11） 隆帯文で区画し、その内側に刺突文を施す。

第5類 隆線文土器（第13図12） 断面三角形の隆起線を施す。

**第3群土器** D・E区第2黑色土およびF・G区アカホヤ火山灰上面から第2黑色土にかけての層で出土した土器群である。第II部第1章でも記したように、D・E区ではアカホヤ火山灰が堆積しておらず、しかもD・E区とF・G区との間の土層関係に不明確なところがあるが、土層の対応関係を検討した結果、D・E区第2黑色土はF・G区アカホヤ火山灰の上層に当たると判断された。

よって、第3群土器は縄文時代前期初頭頃と考えられる。5類に分けられる。

第1類 沈線文土器（第28図1～10・12・13） 口縁部に波状沈線文を廻らし、その下と口縁部に刺突文を施す。

第2類 刺突文土器（第29図、第30図1～6） 条痕地に、口縁部は縱方向の刺突文。胸部には細長い沈線文をやはり縱に施す。

第3類 押引文土器（第30図7～15） 口縁部に6条の押引文、うち中央2条は波状になる。

第4類 条痕土器（第28図14～17） 胎土にガラス質微粒子を大量に含む紫色っぽい灰褐色土器。

第5類 沈線文土器（第28図11） 1点のみ。口縁外面に複合鋸歯文風に沈線を施す。

この他、条痕土器片が多数出土しているが、第1～3類の胸部片の可能性が高い。

第4群土器 F区暗褐色土から出土した爪形文土器群である。胎土に金色雲母片を多量に含み、胸部上半に連続爪形文を施すが、中には沈線文の施された土器もある。縄文時代前期前葉に相当し、瀬戸内地域の羽島下層Ⅲ式に併行する土器である（第35・36図）。

第5群土器 縄文時代前期後葉と考えられる土器群である。D・E区第2黑色土から出土したが総数は10点に満たず、混入品と考えられる。器厚4～5mmの薄手の土器で、2類に分けられる。

第1類 特殊突帯文土器（第30図16・17） 縄文を地文に、粘土紐を貼り付け、その上を半截竹管で押し引いた土器で、瀬戸内地域の里木I式に相当する。

第2類 無文土器（第30図18～22） 第1類に共伴するナデ調整の土器である。

第6群土器 B・C区黒褐色土～赤褐色土から出土した、縄文時代後期初頭～前葉の土器群である。4類に分けられる。

第1類 唇消縄文土器（第60図11～21、第61図2～13、第62図6・7、第63図1～29、第67図1～25） いわゆる中津式に相当する土器群で、沈線による直線、曲線文や平行沈線文の間に縄文を施したもの（a類）と、卷貝による擬縄文を施した上器（b類）がある。

第2類 沈線文土器（第60図1～10、第63図30～33・35・36、第64図1～3・5～10） 第1類の沈線文と同じ文様だが、縄文を施さない土器である。

第3類 三本沈線土器（第61図1） 三本の平行沈線文を文様帯としてその中に二枚貝による刺突文を施した土器で、福田KⅡ式に相当する。

第4類 無文粗製土器（第60図22～26、第61図14～20、第62図1～5・8～15、第64図11～34、第65図、第66図1～9、第67図27～37） いずれも深鉢形で、調整方法にナデと条痕があり、後者には二枚貝のほか板目状のものもある。

なお、以上のはかに底部片も多数出土している（第66図11～22、第67図38～42）。

第7群土器 F区第1黑色土中から晩期土器に混ざってごく少量出土した土器群で、凹線文を特

微とする。後期後～末の福田KⅢ式土器、すなわちいわゆる宮瀬式・御領式併行の土器で、浅鉢（第50図6）と深鉢（同図17・24・27）がある。

#### 第8群土器 D～G区第1黑色土から出土した晩期初頭～前葉の土器群である。

第1類 精製浅鉢形土器（第48図13～19・21～23・25～28、第49図1～7、第50図2～5） 内外面にミガキ仕上げを施した精巧な土器で、口縁端部の形態に、沈線が明瞭に施されたもの（a類）と、上側に立ち上がるだけのもの（b類）、直線的に伸びるだけのもの（c類）などがある。

第2類 粗製深鉢形土器（第48図20・24、第49図8～22、第50図7～16・18～23・25・26・28～35、第51・52図） 主として外面にナデまたは条痕調整、内面にはナデまたはミガキ仕上げを施す土器群で、第52図5のような鉢形土器もある。底部は平底が主体をなすが、第52図1のような丸底もある。

以上、郷路橋遺跡出土土器を8群に分類したが、第1群土器は当遺跡最古の上器群である。第1類とした厚手の無文土器は、胎土に植物繊維を混入し、器面に条痕などを施さないことから、押型文土器期から織維文土器期にかけての上器と考えられるが、最近の研究によって、厚手無文土器は押型文の黄島系土器の後半以降、瀬戸内地域から中国产地にかけて分布が認められるものの、織維文I類段階になると平底化し、斜格子状の沈線がめぐらされることが判っている。<sup>(2)</sup> 当遺跡第1類土器は沈線がなく、尖底をなすことから、押型文土器の末期あたりに相当するものであろうか。次の第2類はこれに統く土器群と考えられ、河瀬氏の分類では織維文II類に相当する土器である。同様の上器は、島根県内では簸川郡大社町麥根遺跡をはじめとして数遺跡から出土しており、石見部でも浜田市日脚遺跡などで確認されているが、いずれも少量で器形全体や土器の組成等については判っていない。第3類も器肉が薄くなり、織文は施されていないものの、依然として平底を呈しており、第2類とはほぼ同時期かそれよりも若干後出すると考えられる土器である。ここで特に問題となるのは第1類と第3類で、第1類は上述のように押型文併行の可能性を考えたが、すでに明らかのように当遺跡では押型文土器は出土しておらず、第1類と第2類の時期を完全に分けてしまうにはなお不都合な状態である。押型文土器の最終段階すなわち高山寺式期の後には、これまでに穂谷式と呼ばれる押型文と刺突文や押引文が組み合わさった土器群の存在が知られており、島根県でも今年度邑智郡瑞穂町川ノ免遺跡から類例が確認されている。<sup>(3)</sup> 押型文の高山寺式から織維文土器への型式変化を説明するには、穂谷式のようなどちらの要素をも兼ね備えた土器群の存在が不可欠で、穂谷式にはこれまでのところ、厚手の無文土器が伴った例はないようだが、第1類土器もそのような複合性の中に包含された要素の一例とすべきかもしれない。第3類については、平底という点を除けば、從来から知られている早期末の条痕土器とほとんど変わらないように見え、胴部片では判定がな

なか困難である。

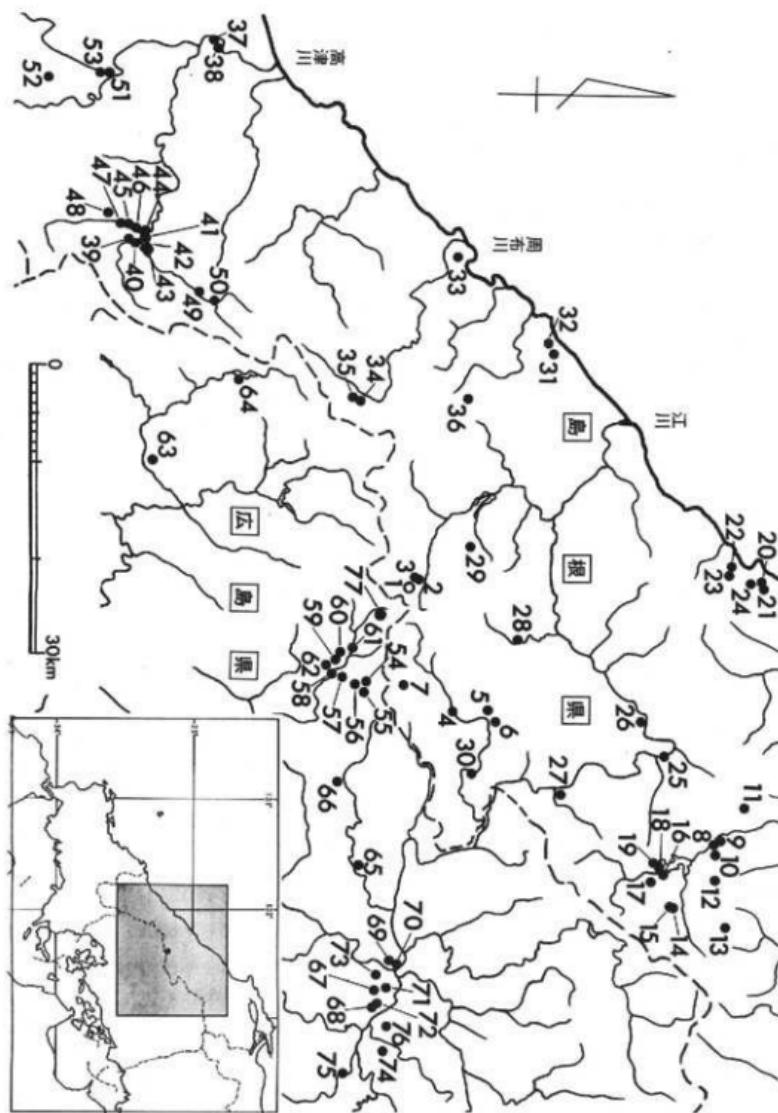
第2群と第3群は、早期末から前期初頭頃と考えられる土器群であるが、この時期の資料が出土した遺跡は島根県全体でも10遺跡に満たず、特に石見地方では、邇摩郡仁摩町クネガソネ遺跡が知られている程度である。<sup>(4)</sup> 現在、最もまとまった資料が出土しているのは松江市西川津遺跡で、刺突文をはじめ、押引文、沈線文、隆帶文など、当遺跡と同じ文様の種類を持っているのが特徴である。しかし、文様の内容をみると様相はやや異なっており、たとえば、第2群第2類土器は、西川津遺跡の沈線文土器c類の一部と同様に斜格子状に沈線を施すものの、土器の器形や施文部位、施文原体等に大きな違いを見せている。資料的な制約もあって、第2群土器は早期末の諸特徴を持っているものの、その出自や影響について判断できないのが現状といえる。これに対して、第3群土器の文様は特徴的である。第3類の押引文土器は、上下の区画用の押引文の内側に波状に押引を加えるもので、西川津遺跡押引文土器の中にも同様のモチーフがある他、山口県下関市神田遺跡、<sup>(5)</sup> 山口市美濃ヶ浜遺跡、<sup>(6)</sup> 広島県比婆群帝釈峠遺跡群等でも類似した文様をもつ上器が出土している。第1類の沈線文土器は、この上下の区画押引文はそのままに、内側の押引文を沈線に置き替えたものである。帝釈峠遺跡群の資料をまとめた中越利夫氏は、刺突と二枚貝による弧状文の土器が佐賀県唐津市菜畑遺跡の第1群第I類土器の構成に類似していることを指摘しており、<sup>(7)</sup> 長崎県長崎市深堀貝塚や熊本県宇土市曾畑貝塚では実際に波状沈線文を施した土器も出土している。さらに、第5類とした沈線文および第2類とした刺突文土器は、菜畑遺跡のそれぞれ第1群II類、第3群II類と酷似した文様構成を持っており、<sup>(8)</sup> 同様の土器は東九州や前述の神田遺跡からも出土していることが判明している。<sup>(9)</sup> このように見てくると、第3群土器は九州で轟B式土器と曾畑式土器との中间に位置づけられている土器群と密接に関係していることが容易に推測されるわけで、このことから、第3群土器を九州の前述の土器群、すなわち、深堀式ないし野口・阿多タイプ併行として捉えることができる。ただし、注意を要するのは、第3群土器の器形はいずれも頸部に若干のくびれがあることで、九州で出土する直口の土器とは器形的に明らかに異なっており、あくまでも地元産の土器と考えるのが妥当であろう。なお、第2群土器の第2類も沈線の施文方法のみをみれば、深堀式の中に同様のものがあり、注目される。第2群・第3群土器の年代観については、上述のように第3群土器が轟B式に後出する土器群に併行し、かつAh火山灰の上から出土すると考えられることから前期初頭頃と考えられる。從来からの型式にあてはめれば、羽島下層Ⅲ式の時期に相当するであろうが、今後山陰のこの時期の土器編年も含め、さらに検討を要する。

第4群土器は羽島下層Ⅲ式に相当する爪形文土器だが、胎土に多量の金色雲母を混入しているのが特徴である。出土地点・層位ともに限定された特色ある上器だが、この付近で金色雲母を多量に混入する例はなく、今後の資料の増加を待ちたい。

第5群土器は、里木I式に相当する土器で、島根県西部ではこれまでに出土例は知られていない。小片で出土点数も少ないが、おそらく調査地の周辺にこの時期の遺構も残っていることを推測させる良い資料である。

第6群土器は、後期初頭から前葉にかけての磨消繩文土器とそれに伴う土器群である。第1類の磨消繩文土器は、小片が多く全体の文様構成を把握できるものはないが、文様には大きく3種の特徴がある。その1は太い沈線とその沈線の間に繩文を充填するもので、その2はやや細めの沈線で幅の狭い繩文帯を施すもの、その3は渦巻文の沈線の端部が鍵手状に入り組んだりするものである。<sup>(13)</sup>これらはいわゆる中津式に相当し、今村啓爾氏<sup>(14)</sup>や沢下孝信氏らによって細分が行われているが、精製深鉢形の文様構成のしっかりしたものだけを対象に行われたこれらの分類では、当遺跡のような小片の1点1点を分類していくのは困難である。ここではさらに細分の可能性があるということに留めたい。なお、渦巻文の端部が入り組みになったり、沈線の変化点で沈線が途切れたりする土器群は、かつて泉拓良・玉田芳美両氏によって「中津II式」と仮称され、その後玉田氏が中津・福田KII式土器様式の第3様式古段階に編入して、<sup>(15)</sup>中津式と福田KII式とをつなぐ土器型式として扱われてきているものである。当遺跡では、一枚貝の刺突によって繩文の代用とした第3類土器が1点出土したのみで、3本沈線の典型的な福田KII式は出土していない。山陰地方でも島根県以西では、2本沈線で入組文をもった上器と3本沈線の土器の出土量を比較した場合、明確に前者の方が多量に出土しており、後者はごく少量しか出土していない。このことは、これまでの両者の出土の仕方をみるとかぎり、両者の関係は、単純に時期差として理解されるものではなく、両者が共存関係にあった可能性も強く示唆している。今後さらに検討されるべき問題といえよう。なお、第2類の沈線文土器と第4類の粗製土器についても、細分や分析を行うまでの1分の整理検討が行えなかった。今後の課題となろう。

郷路橋遺跡の最後の段階の土器群は、晩期の第8群土器である。島根県内における晩期の遺跡としては、古くから、益田市安富遺跡、簸川郡大社町人社境内遺跡などがよく知られており、最近では当遺跡をはじめ、美濃郡匹見町水田ノ上遺跡、松江市タテチヨウ遺跡等の調査も行われて、晩期の遺跡数も徐々に増えてきている。このうち、晩期前半の土器を多く出土するのが、岩出4類土器を出土する安富遺跡と有文上器を含まない水田ノ上遺跡、そして当遺跡である。第8群第1類のうち、1a類としたものは岩田式に類似が認められ、1b類は中山B式の浅鉢の一部や岡山県倉敷市舟津原遺跡・阿部走出遺跡の晩期I類土器に通じるものがあり、九州では賀川光大氏の晩期II式。<sup>(16)</sup>近畿では滋賀里III式に同じ形態が認められる。1c類についてはその類似が充分に把握できないが、1a、1b類に伴うものと考えられる。第2類については、分類や検討を行えないままに終わってしまったが、第1類とはほぼ同じ時期と考えるべきで、中山B式のようなヘラ引き沈線文や原下層式・前池式のよ



第1図 鵜路橋遺跡を中心とした西中国山地周辺の縄文遺跡

第1表 西中国産地周辺の縄文遺跡地名表

No	遺跡名	所在地	時期					備考
			早	前	中	後	晩	
1	郷路橋遺跡	島根県邑智郡鹽飽町市木	○	○		○	○	
2	棚田上遺跡	〃 市木	○	○				(註22)
3	今佐屋山遺跡	〃 市木	○	○				
4	川ノ免遺跡	〃 出羽	○					(註27)
5	横道遺跡	〃 高見 段ノ原	○					(註4)
6	大字根遺跡	〃 高見 上伏谷				○		(註28)
7	大煩遺跡	〃 上龟谷 上大草	○					(〃)
8	五明田遺跡	島根県飯石郡飯原町八神			○	○	○	(註29)
9	森遺跡	〃 八神			○	○		(〃)
10	弓一原遺跡	〃 八神			○			(〃)
11	雲ノ原遺跡	〃 角井				○		(〃)
12	松カ原遺跡	〃 獅子						縄文土器(〃)
13	仁多ヶ崎遺跡	〃 那賀加			○			(註30)
14	大床遺跡	〃 佐見			○			(〃)
15	琴引遺跡	〃 佐見						縄文土器(〃)
16	下來島I遺跡	島根県飯石郡赤来町下來島			○			(註4)
17	保賀遺跡	〃 下來島						縄文土器(註31)
18	平石遺跡	〃 下來島			○			(註32)
19	後山遺跡	〃 下來島				○		(〃)
20	坂瀬遺跡	島根県宍道郡仁摩町仁方 坂瀬			○	○		(註33)
21	立平浜遺跡	〃 仁方			○	○		(註34)
22	久根ヶ曾根遺跡	〃 馬路 久根ヶ曾根	○	○				(註4)
23	鳥居原遺跡	〃 馬路 鳥居原	○	○				(〃)
24	春興寺橋遺跡	〃 天河内			○	○		(〃)
25	滝原遺跡	島根県邑智郡邑智町滝原			○			(〃)
26	築瀬遺跡	〃 吾鄉 築瀬			○	○		(〃)
27	都橋遺跡	島根県邑智郡大和村長藤 中分			○			(註35)
28	築堤遺跡	島根県邑智郡石見町中野			○			(註36)
29	沖田原遺跡	〃 日貫 高瀬原			○	○		(註37)
30	今西遺跡	島根県邑智郡羽須美村宇津井 今西						縄文土器(註38)
31	波子遺跡	島根県江津市波子 大平山			○	○	○	(註39)
32	大平山遺跡	島根県浜田市久代			○			(〃)
33	日脚遺跡	〃 日脚	○					(註35)
34	七渡瀬遺跡	島根県那賀郡金城町波佐						縄文土器
35	長田郷遺跡	〃 波佐 長田郷			○	○		(註40)
36	岩坂II遺跡	〃 今福		○	○	○		(註41)
37	安富遺跡	島根県益田市安富 王子台			○	○		(註42)
38	羽場遺跡	〃 安富 羽場					○	(註38)

No	遺跡名	所在地	時期				備考
			早	前	中	後	
39	川原田遺跡	鳥取県美濃郡匹見町匹見 山根上				○	(註43)
40	硝煙田遺跡	〃 匹見 山根下					条痕土器(註38)
41	ヨレ遺跡	〃 匹見 半田			○	○	(註43)
42	半田遺跡	〃 匹見 半田			○	○	(〃)
43	沖ノ田遺跡	〃 匹見 黒和					浅林底部(註38)
44	神田遺跡	〃 匹見 野入			○		(註43)
45	水田ノ上遺跡	〃 紙祖 荒木			○	○	(註44)
46	福田ノ上遺跡	〃 紙祖 荒木				○	(註43)
47	石ヶ坪遺跡	〃 紙祖 元絹			○	○	(註45)
48	家郷り遺跡	〃 紙祖 小原				○	(註43)
49	上家屋遺跡	〃 道川 下道川			○		(註46)
50	新横原遺跡	〃 道川 出合原	○	○			(〃)
51	日原遺跡	鳥取県鹿足郡日原町日原				○	(註4)
52	島遺跡	〃 左瀬島					绳文土器(〃)
53	枕瀬遺跡	〃 枕瀬 枕瀬					(〃)
54	天監門別神社遺跡	広島県山県郡大朝町宮迫				○	(註47)
55	長迫遺跡	〃 宮迫					(〃)
56	洞泉寺遺跡	〃 宮迫		○			(〃)
57	空ヶ谷遺跡	〃 岩戸					(〃)
58	地宗寺遺跡	〃 新庄	○	○		○	(註48)
59	宮ノ庄神社南遺跡	〃 新庄					地宗寺遺跡と同様のものか?
60	岡ノ段遺跡	〃 新庄					(註48)
61	原山遺跡	〃 大朝				○	(註47)
62	河原山遺跡	〃 田福利	○	○	○	○	(註49)
63	上段小学校遺跡	広島県山県郡戸内町上段	○				(註50)
64	樽床遺跡群	〃 芽北町 聖淵湖畔	○	○	○	○	(註48)
65	杉の原遺跡	広島県高田郡高宮町				○	(註51)
66	上里遺跡	〃 美土里町 横田	○				(註52)
67	下本谷遺跡	広島県三次市西酒屋町	○				(註53)
68	松ヶ迫遺跡	〃 東酒屋町	○				(註54)
69	元国遺跡	〃 栗原町				○	(註55)
70	岩脇遺跡	〃 乘屋町	○				
71	岡竹遺跡	〃 十日市町				○	(註56)
72	宗祐池遺跡	〃 南畠駄町	○				(註57)
73	植松遺跡	〃 十日市町				○	(註58)
74	下の割遺跡	〃 和知町				○	(註59)
75	重岡山遺跡	〃 垂町	○				(註60)
76	下山遺跡	〃 四拾貫町	○				(註58)
77	門前遺跡	広島県山県郡大朝町門前	○				

うに頸部から肩部にかけて爪形文が施されることもない。縄文時代晩期の土器編年については現在も確立したものがないため、明確な型式名をあげることはできないが、以上のような状況から当遺跡の土器群は晩期前半でも古～中段階に属すると考えられる。

なお、郷路橋遺跡を中心とした西中国山地周辺の繩文遺跡は第1図と第1表のとおりである。

## 2. 石器について

郷路橋遺跡から出土した石器は、土器の量に比べると比較的少なく、総数は100点に満たない。第2表は、各時期ごとに石器の出土量をグラフにしたものであるが、各時期ごとの出土点数は、各々の土器の量に相応する数字になっている。時期別にみると、早期では石鎚の出土点数が多く、これにスクレイパーや磨石・敲石・石皿の調理具類が伴うが、石斧は未発見である。前期の資料は極めて貧弱で、磨石・敲石類が多く出土しているのみである。後晩期になると、各種の石器が平均的に、しかも数も揃って出土てくるようになり、こうした傾向は、一遺跡を部分的に調査することによって生ずる制約というよりは当遺跡における相対的な推移である可能性が強い。というのも、同じ田智郡瑞穂町市木地内にある、早期押型文土器を出土する堀田上遺跡でも、石鎚を中心としてスクレイパー<sup>(22)</sup>、楔形石器に磨石・敲石類が伴うという石器組成を示しており、早～前期のこの地域の特徴と考えられるからである。後期の石斧は、3点のうち2点は安山岩製の小形局部磨製石斧で、1点は粘板岩製の川原石を利用したものである。安山岩製品のうち1点は欠損後スクレイパーに再利用しており、また晩期の石斧2点も、日本海沿岸部にしか分布していない三郡変成岩の結晶片岩を利用した石斧であることから、当遺跡が山間部にあっても、石器の材料となる原石の入手がなかなかかな

第2表 網路橋遺跡の石器組成

困難な状況にあったことを窺わせる。

石材については、石斧類は上述のとおりで、石鎌、スクレイバー、剝片石器類は安山岩か黒曜石を用いている。安山岩は肉眼観察によるだけだが、いずれも広島県冠山地城産と推定され、黒曜石の大半は福岡産と推定される。<sup>(20)</sup> なお後期の黒曜石のうち、フレイク・チップ類も含めて6点ほど大分県姫島産の黒曜石が含まれており、晩期には水晶製品も1点出土している。表2中の石鎌・スクレイバー・石鎌・剝片石器のうち、黒曜石の占める割合は、早期9点(69%)、前期3点(50%)、後期3点(23%)、うち姫島産は1点、晩期0点、その他水晶1点と、時期が新しくなるにつれ、黒曜石の比率が徐々に下がっている。磨石、蔽石類は、すべて花崗岩および閃緑岩系統の川原石を転用しており、石皿もほぼ同様である。

### 3. トチの実の貯蔵穴について

E区第2黒色土下面で検出した土塊は、中から炭化したトチの実が出土し、結局、トチの実の貯蔵穴であることが判明した。島根県内でこれまでに縄文時代の植物遺体が発見された例は極めて少なく、松江市石台遺跡の晩期の炭化米や西川津遺跡の早期末～前期初頭のオニグルミ・カシ・トチノキ・カヤ、同じく松江市寺ノ脇遺跡の中段のドングリ等がある程度である。<sup>(21)</sup> 西川津遺跡の堅果類は混貝土層中から検出したもので、オニグルミ・カシ類には火を受けて炭化したものがあり、食用としたことが考えられる。寺ノ脇遺跡のドングリは貯蔵穴に残っていたもので、アカガシかイチイガシの類と思われる。報告書ではさらに松江市大手遺跡にも同様のドングリの貯蔵穴があったが、年代は縄文後晩期～弥生中後期以上は特定できないとされている。

そもそも堅果類の食用としての利用開始時期は、クリが縄文時代早期初め（6期区分では草創期）から利用され、クリが早期中頃から、アク抜きが不要なシイ類（イチイガシなど）は前期頃から利用されているようだが、ナラ・カシ類・トチなどはやや遅れて中期頃からのようである。特にトチの実は西南日本ではこれまで縄文後期初頭までしかさかのぼらないとされ、中期前半までさかのぼるのは東北日本だと考えられてきた。<sup>(22)</sup> 郷路橋遺跡のトチの実は、第Ⅱ部第Ⅰ章の<sup>14</sup>C年代測定結果から明らかのように、B.P.5140±100年という年代を得ており、これは前期に相当し、貯蔵穴を設っていた第2黒色土から出土する土器群とも大きく異なるものではない。研究者によってそれぞれ土器の年代観等に違いはあるかもしれないが、貯蔵穴の検出状況から考えて、この貯蔵穴の年代をここでは本章第1節で示した第3群土器、すなわち前期初頭頃と理解するのが妥当であろう。

なお、トチの実を土中の穴に入れて貯蔵するのは、短期の貯蔵用と考えられており、実際に当遺跡でのトチの実の出土形態は、貯蔵中のものを取り出した残り物が炭化して残ったような状況を呈している。当遺跡のトチの実が食用に供されたとすると、従来のトチの実の利用開始時期から大幅

にさかのぼることになり、今後の資料の増加等をふまえながら、さらに検討が必要となろう。

(足立克己)

## 註

- (1) 繩文時代の時期区分は、早期～晚期の5期区分を採用している。
- (2) 河瀬正利「山陰地方の繩文早期・前期土器の様相」『山本清先生喜寿記念論集 山陰考古学の諸問題』1986年
- (3) 平成2年11月に瑞穂町教育委員会が試掘調査を実施。吉川正氏のご教示による。
- (4) 実道正年『島根県の繩文式土器集成I』1974年
- (5) 島根県教育委員会『朝鶴川河川改修工事に伴う四川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ(海崎地区1)』1987年
- (6) 『山口県先史時代採造物集成ならびに縄年の研究』周陽考古学研究所報』1978年
- (7) 『広島大学文学部帝釈跡遺跡群発掘調査室年報』1979年
- (8) 中越利人「帝釈跡遺跡群出土の繩文前期土器の研究』『広島大学文学部帝釈跡遺跡群発掘調査室年報』1985年
- (9) 長崎市教育委員会「長崎市立深堀小学校校舎増築に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告』1984年
- (10) 熊本県教育委員会「曾畠一熊本県宇土市花園町曾畠貝冢・低湿地の調査』1988年
- (11) 唐津市教育委員会「菜畠』1982年
- (12) 大分県東国東郡国東町教育委員会「羽田遺跡(A地区)国東富来地区県営圃場整備事業関係発掘調査報告』1987年。大分県教委宮内克己氏のご教示による。
- (13) 今村啓爾「称名寺式土器の研究(下)」『考古学雑誌』第63巻第2号 1977年
- (14) 沢下孝信「中津式土器について」『福岡市野多日運動公園内遺跡調査報告書 野多日拈渡遺跡』福岡市教育委員会 1983年
- (15) 來折良・玉田芳美「文様系統論—縄文土器-」『季刊考古学』第17号 1986年
- (16) 玉田芳美「中津・福田K II式土器様式」『繩文土器大綱』4 1989年
- (17) 清見浩「山口県岩田遺跡出土・縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部紀要』第18号 1965年
- (18) 春成秀爾「縄文晚期文化・中国・四國」『新版考古学講座』3 1969年
- (19) 岡山県教育委員会「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告71 本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査』1988年
- (20) 賀川光夫「縄文晩期文化 九州」『新版考古学講座』3 1969年
- (21) 滋賀県教育委員会「湖西線関係遺跡調査報告書』1973年
- (22) 島根県教育委員会「主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一場町上・今佐屋山・米岸山遺跡の調査』1991年3月
- (23) 早期の黒曜石の一部を京都人学原子炉実験所で分析してもらったところ、4点のうち1点が鹿児島久見産の黒曜石であることが判明した。藤井哲男・東村武信「島根県内遺跡出土のサスカイト、黒曜石製造物の石材産地分析」「一般国道9号松江道路建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書(布田遺跡)』島根県教育委員会 1991年3月
- (24) 江川幸子・内田律雄「石台遺跡の試掘調査 -炭化米を出土した縄文晩期の土壤-」『季刊文化財』第62号 1988年
- (25) 島根県松江市木事務所「寺ノ脇遺跡 県道松江一境線改良工事埋蔵文化財緊急調査報告』1969年
- (26) 渡辺誠「縄文時代の知識」考古学シリーズ4 東京美術 1983年
- (27) 1990年町教委が確認調査を実施。
- (28) 島根県瑞穂町教育委員会「ロクノ谷遺跡発掘調査報告概報』1990年
- (29) 島根県頃原町教育委員会「頃原町の遺跡 志々地区』1989年
- (30) 島根県頃原町教育委員会「頃原町の遺跡 頃原地区』1990年

- (31) 島根県教育委員会『島根県遺跡地図』(出雲・隠岐編)』 1987年
- (32) 島根県赤来町『赤来町誌』
- (33) 島根県教育委員会『島根県埋蔵文化財発掘調査報告書』叢集 1987年
- (34) 島根県仁多町教育委員会『仁摩健康公園造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』 1989年
- (35) 足立克己「山陰石見地方における縄文後期前～中葉土器について」『東アジアの考古と歴史』 1987年
- (36) 島根県石見町教育委員会『中山古墳群発掘調査報告書－第3次－』 1989年
- (37) 郡誌刊行会『続邑智郡誌』 1976年
- (38) 島根県教育委員会『島根県遺跡地図』(石見編)』 1988年
- (39) 江津市教育委員会・浜田市教育委員会『人平山遺跡群発掘調査報告書』 1988年
- (40) 島根県金城町教育委員会『島根県那賀郡金城町内遺跡分布調査報告書I－波佐・長田地区－』 1986年
- (41) 日本道路公团広島建設局、島根県教育委員会『中國横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－I－』 1985年
- (42) 益田市教育委員会『安富干子台遺跡発掘調査概報告－島根県益田市－』 1981年
- (43) 島根県匹見町教育委員会『匹見町内遺跡群細分布調査報告書Ⅱ』 1990年
- (44) 島根県匹見町教育委員会『昭和62年匹見地区県営漁港整備事業に伴う遺跡発掘調査報告書』 1988年
- (45) 島根県匹見町教育委員会『石ヶ坪遺跡』 1990年
- (46) 島根県匹見町教育委員会『新嶽原遺跡発掘調査報告』 1974年
- (47) 横路遺跡発掘調査団『横路遺跡 農業基盤結合整備事業に伴う大朝町新庄所在遺跡の発掘調査』 1982年
- (48) 広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財センター『地宗寺遺跡発掘調査報告』 1982年
- (49) 小都 隆「山県郡大町河原山遺跡について」『芸備』第2集 1974年
- (50) 広島県教育委員会『中國綾貫自転車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(3) 1982年
- (51) 広島県埋蔵文化財センター『名広遺跡B 調査区』 1987年
- (52) 美土里町史編修委員会『美土里の歴史と伝説』 1971年
- (53) 下本谷遺跡発掘調査団『下本谷遺跡－推定三次都衝跡の発掘調査報告－』 1975年
- (54) 広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財センター『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』 1981年
- (55) 史料總覽編集委員会編『広島県双三郡・三次市史料總覽』(第5編) 1974年
- (56) 広島県埋蔵文化財センター『五反田第1・2号古墳発掘調査報告』 1985年
- (57) 広島県埋蔵文化財センター『三段畑遺跡』 1990年
- (58) 広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財センター『下山遺跡群発掘調査報告』 1980年
- (59) 広島県埋蔵文化財センター『上文堀古墳・下の割古墳』 1989年
- (60) 重岡山遺跡発掘調査団『重岡山遺跡発掘調査報告』 1980年

## 第Ⅱ章 福屋氏の城郭

### 1. はじめに

福屋氏の城郭に関しては各市町村誌において紹介されているが、いずれも文献資料を補うものとしての取り上げ方しかされていなかった。

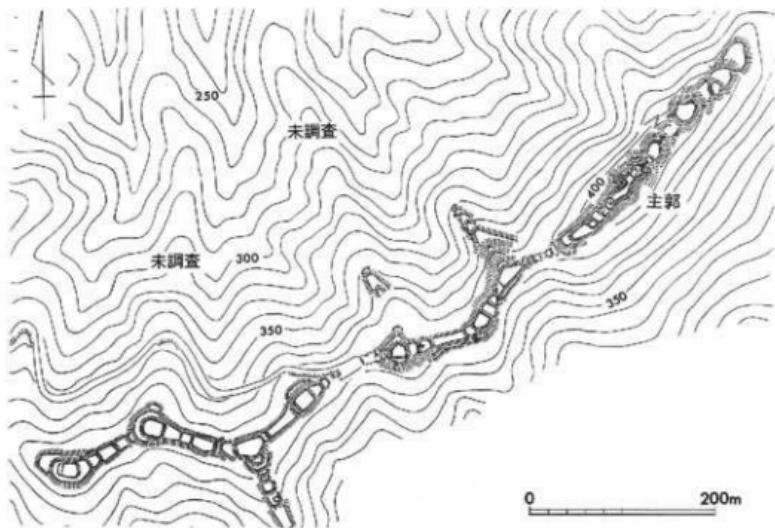
こうしたなかで、廣田八穂氏による『西石見の豪族と山城』(1985)が発刊され、石見の城郭研究に一つの指標を示した。廣田八穂氏は、益田氏、三隅氏、永安氏、周布氏、古見氏、福屋氏、吉川氏の城郭及び館を現地調査し、文献と合わせながら紹介している。一部、城郭用語及び繩張図の表現に混乱が見られるが、石見の城郭研究の基礎資料として高く評価できる。その後、『島根県那賀郡金城町内遺跡分布調査報告書』(1986)において、村田修三氏が波佐一本松城について考察を試みているが、周辺の城郭との比較検討がなされていない。

本稿の目的は、時間的に可能なかぎり福屋氏の城郭を調査し、繩張図を公表することにある。ここでは、今回調査し得た本明城、家古屋城、尼御前城、大石谷城、熊ヶ崎城、松山城、佐賀里松城、神主城、龍ヶ城、三子山城、桜尾城、そしてすでに報告されている波佐一本松城<sup>(1)</sup>、源太ヶ城<sup>(2)</sup>について紹介し、所見を述べてみたい(地図参照)。これらが周辺の豪族の城郭との比較検討の資料となり、石見の中世城郭研究の資料となれば幸いである。

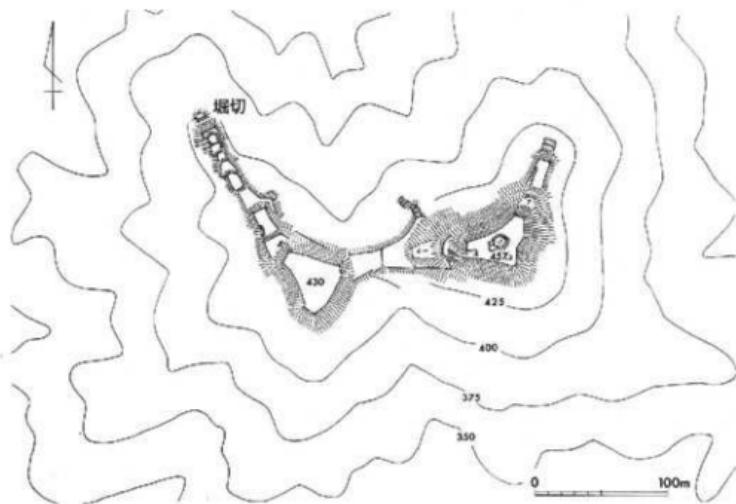
### 2. 福屋領の城郭概要

#### 本明城「ほんみょうじょう」(第1図)

乙明城、音明城「おとあけじょう」とも称する。江津市有福温泉町と那賀郡金城町との境に位置する福屋氏後期の拠城<sup>(4)</sup>とされる。地形は急峻であり遠く日本海を望み、展望はよい。岩石が露出している山頂部が主郭と考えられる。遺構は主郭から北東、南西に延びる尾根のピークを郭とし、その間を地形に沿って削平して連続させている。小さな防御拠点を一列に並べただけであり、求心性が希薄である。一部に土塁や掘切が確認できるが、いずれも加工が不十分なものとなっている。居住地は東北麓の現在福田八幡宮が所在する丘陵に築かれ、福田城と称していたと伝えられる。福屋氏は、西は浜田市、東は江川周辺、南は石見町、金城町まで勢力を拡張した。<sup>(5)</sup>家古屋城から本明城に本拠を移したことに関しては諸説があるが、港を押さえ、日本海沿岸部における水上交通を押さえるのに都合の良いこの地に移ったのではないだろうか。永禄5年、毛利氏に背いた福屋氏は、当城を守り切れず、尼子氏を頼って逃亡した。<sup>(6)</sup>



第1図 本明城略測図  
(江津市有福温泉町本明、平成2年12月1日 作図 寺井 輝)



第2図 家古屋城略測図  
(那賀郡旭町今市、平成2年9月16日・平成3年3月16日 作図 寺井 載)

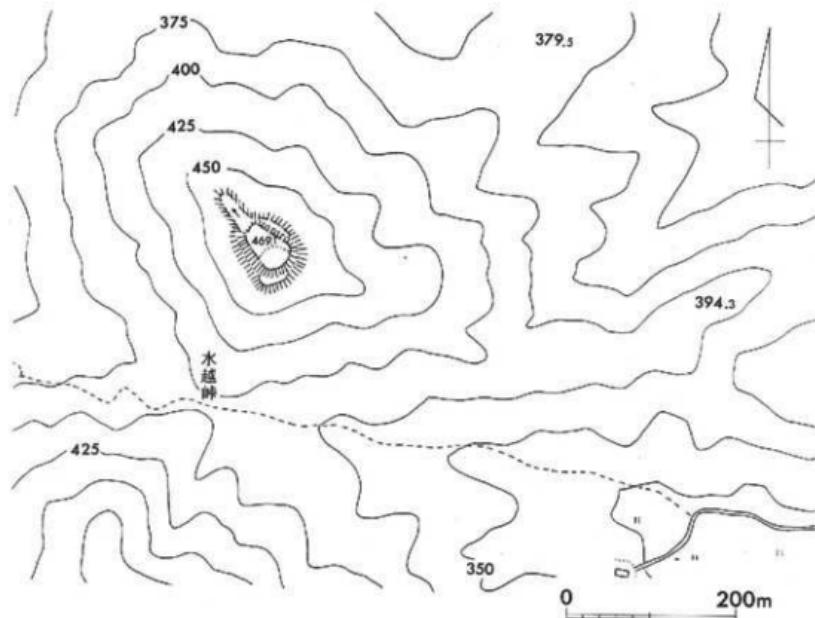
## 家古屋城「かこやじょう」（第2図）

警護屋城、固屋城、双子山城とも称される。那賀郡旭町今市の背後に位置し、交通の要衝であり、<sup>(7)</sup> 福屋氏初期の拠城とされる。双子山城と称されるように、東西の両ピークを利用して築かれている。<sup>(8)</sup>

家古屋城の南西麓、家古屋川と森谷川が合流する地に今市の集落が形成されている。周辺に下城、小谷城、御神本、土居などの地名が残るため、今市周辺に福屋氏の居館が存在していたとする説があるが、家古屋城の縄張が北に向かって展開しているため、北麓の清水谷周辺に存在した可能性もある。また、東麓に小城谷の地名が残る。<sup>(9)</sup>

## 尼御前城「あまごぜんじょう」（第3図）

尼子勢城とも称する。那賀郡旭町重富に位置する山城である。南西の大石谷城と共に家古屋城の南東を固めた。地形は急峻であるが山頂がならしてある程度で遺構として見るべきものは少ない。すぐ南に同じ高さの山が存在し、山頂部に起伏が望見できる。城跡の場所が伝承の中ですれちがわ



第3図 尼御前城略測図(平成2年9月17日 作図 寺井 駿)

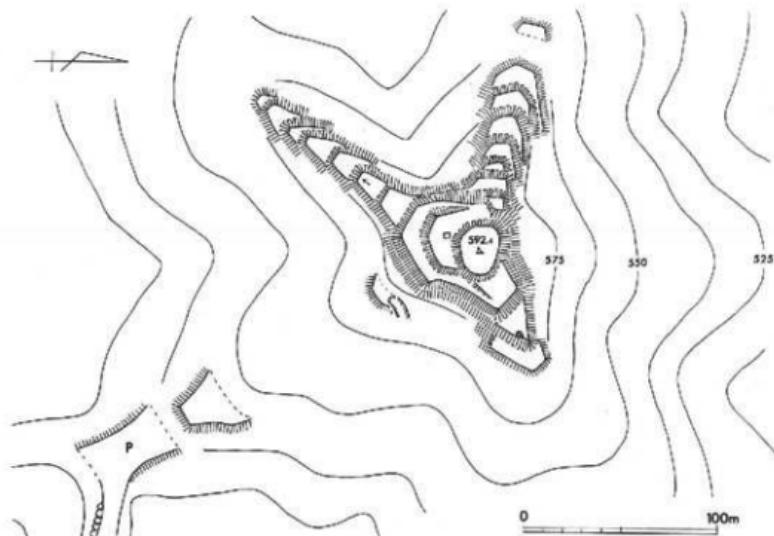
るということも考えられるが、ここでは伝承にしたがって参考資料としたい。福屋氏の重臣、重富氏が城将として伝わる。<sup>(16)</sup>

#### 大石谷城「おおいしだにじょう」（第4図）

和田城とも称する。那賀郡旭町和田に位置する山城である。家古屋城の東南約2kmに築かれており、現在電波中継所が置かれているが、櫓張は良く残る。櫓張は、主郭を中心に西、南西、北東に延びる尾根を削平することによって構成されている。尾根筋である南東と北は地形が急峻であるため、防御施設を積極的に設けていない。全体に櫓張が西に向かって展開しているため、この方面に備えた城郭であると考えられる。この城も削平地しか認められない。

#### 熊ヶ峰城「くまがたおじょう」（第5図）

熊ヶ峰城は邑智郡石見町今原に位置する山城である。全山に削平地らしき痕跡が認められ、<sup>(17)</sup>山頂部の周囲を幅約1mの削平地が取り囲む典型的な南北朝期の山城の遺構を残している。ここからの眺望は開けており、晴れた日には福屋氏の本明城や、二ツ山城を見ることができる。山頂部に後世の改修の形跡が認められないため、戦国期には見張り所として使用されたものであろう。戦国期の



第4図 大石谷城略測図  
(那賀郡旭町和田、平成2年9月17日 作図 寺井 級)

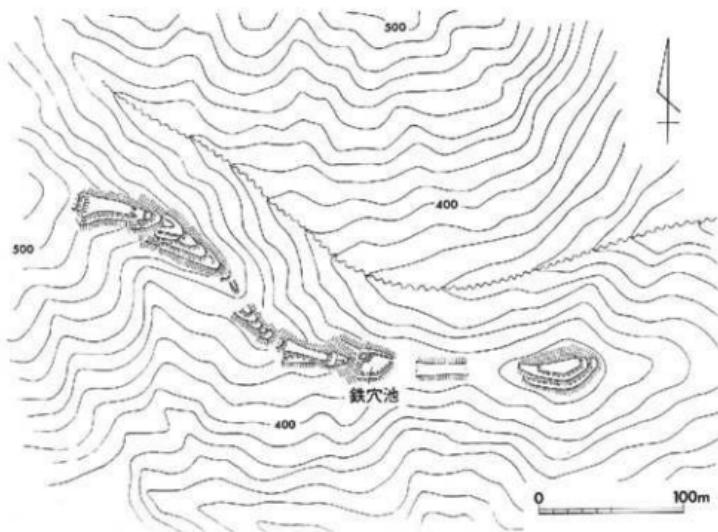
熊ヶ峰城は、山頂部より南東に延びる尾根の先端近くに築かれている。遺構は地形に沿って難段状に続く構造となっており、陣城的色彩が強い。福屋氏は、この矢上盆地において川本の温湯城「ぬくゆじょう」を拠城とする小笠原氏と抗争を繰り返しており、郡山城、余勢城、源太ヶ城を染いて前線拠点とし、雲井城に拠って平城、稻積城を前線拠点とする小笠原氏と対峙した。

松山城「まつやまじょう」（第6図）

松山城は江津市松川町市村に位置する山城である。地形は西から南にかけて江川に直面し、北西を都治川、南東を上津井川に囲まれた要害の地である。

この城は、河上氏によって築かれたとされるが、天文年間に福屋氏によって攻撃され、福屋氏の東方の戦略拠点として重視された。<sup>(14)</sup>

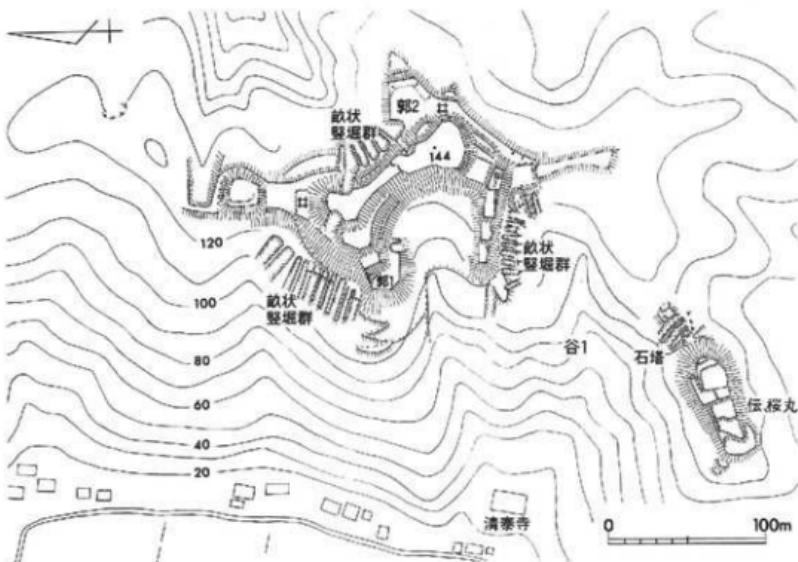
松山城は山頂部（以後便宜上「松山城」と称する）と伝、桜丸によって構成される。伝、桜丸は独立した城郭として存在し、いわゆる別城一郭（二城或は数城をもって防御体系を形成した城）<sup>(15)</sup>の城郭を形成する。伝・桜丸は、尾根の先端を三重の堀切で遮断して城域としている。主郭には堀切に面して橋台が築かれており、全体的に北方に対して土塁が築かれている。この橋台東側斜面には



第5図 熊ヶ峰城 略測図（戦国期）  
(邑智郡石見町今原 平成2年11月17日 作図 寺井 敏)

「永録三庚申」銘の石造物が建てられており、激戦地に建てられた戦死者の供養塔の一種ではないかと思われる。「松山城」は、尾根のピークを利用して築かれた城郭であるが、山頂部およびその北方に続く郭はほとんど段差が見られないため、この二郭をもって主郭と考えて構わないだろう。この北麓には井戸が確認できる。北方には削平の不十分な郭を隔て、自然地形を利用した大規模な堀切が存在する。これより北方には防御施設が認められず、この方面については、尾根続きの防御の貧弱さが指摘できる。毛利氏はこの尾根続きの堂床山に陣を築いたと伝えられており、この尾根続きから攻撃したものと考えられる。

この城郭を特異なものとしているものに、畝状堅堀群と土塁の使い方がある。尾根続きに対して主郭の両側に畝状堅堀群が築かれているが、これは尾根伝いに進撃した攻撃側が主郭からの抵抗にあい、活路を山腹の迂回に求めた場合、それを阻止するために築かれたものと考えられる。興味深いのはこの畝状堅堀群と土塁の使い方である。一般に畝状堅堀群の衰退は折（横矢）の発達にある（<sup>(15)</sup> 攻撃勢力に対し、横から攻撃する場合に堅堀内を十分に攻撃できない）。主郭西側の郭1は畝状堅堀群に対し、横矢を掛ける位置に土塁が築かれており、畝状堅堀群から横矢掛けの多用への戦術



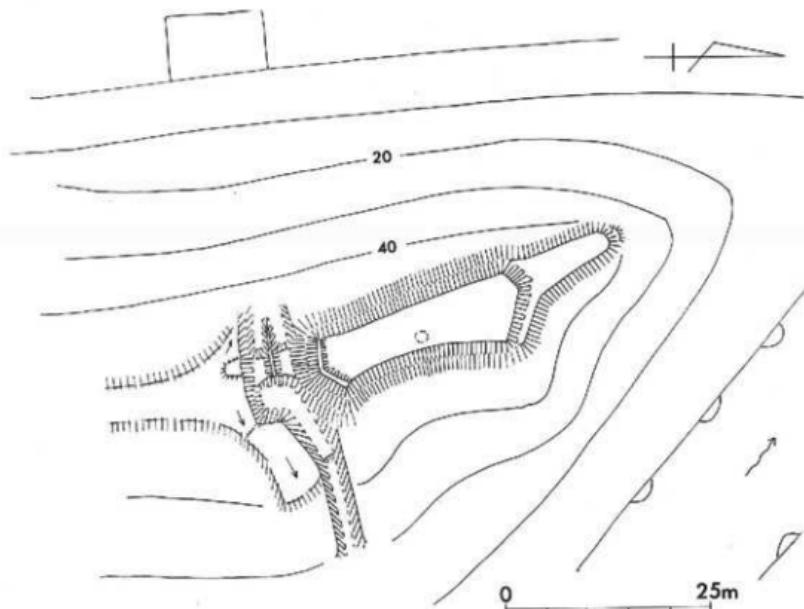
第6図 松山城略測図  
(江津市松川町市村、平成3年2月11-16日 作図 寺井 繁)

上の転換を計る移行期を示す例として貴重な存在である。このことは、主郭東側の畝状堅堀群にもみることができる。郭2は殿廻館と伝えられ、福屋氏の居館とされるがほとんど自然地形のためその存在は不明である。この郭からも畝状堅堀群に対して横矢が掛かれている。主郭の南に4段からなる郭3が築かれているが、この郭の南直下にも畝状堅堀群が築かれている。郭3から伝桜丸までは、自然地形が統くため「松山城」と伝桜丸がそれぞれ独立したもののように見えるが、伝桜丸の北側に築かれた土塁と郭3の南側に築かれた土塁および畝状堅堀群が、谷①を開むような位置にあることから、両者共同による防衛体制が形成されていたことが読み取れる。谷①には正面ルートの存在が想定できる。松山城落城時の城将に、福屋隆任が伝う。

佐賀里松城「さがりまつじょう」（第7図）

江津市都治町下都治に位置する。この地は吉川氏の物不言城（ものいわすじょう）と松山城を結ぶルート上にある。当初、都治氏は福屋氏に所属していたが、毛利氏の調略により福屋氏に背き、<sup>(22)</sup>永禄4年の福屋氏による物不言城攻撃の際に吉川經安とともに籠城している。

繩張は、尾根の先端を二重堀切によって独立させ、城域としている。主郭には堀切に面して土塁



第7図 佐賀里松城 略測図  
(江津市都治町下都治。平成元年2月11日 作図 寺井 総)

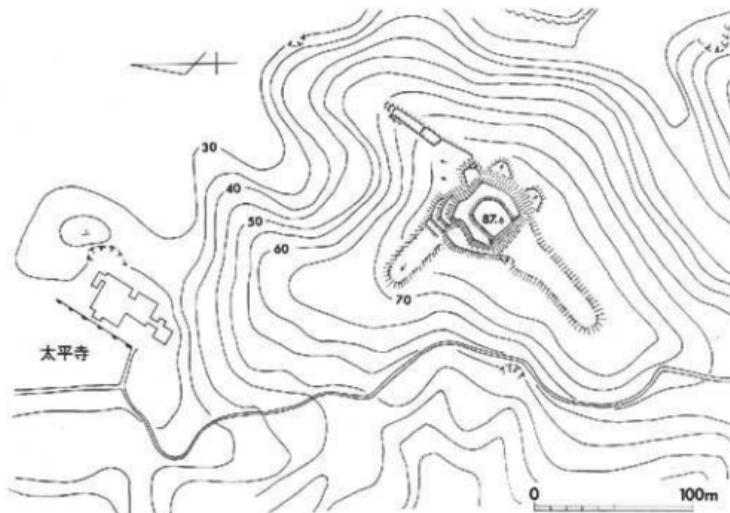
が築かれており、防御思想に新しさが見られる。後世の改修の可能性が高い。

#### 神主城「かんぬしじょう」（第8図）

江津市二宮町神主に位置する丘城である。本明城の北西約6km、標高87mの独立丘陵に築かれている。主郭の周囲を削平地が取り囲むが、南西だけは尾根続きであるので壁の高さを稼ぐため削平地は設けていない。尾根に対して堀残しの土塁が削平地に認められるが、主郭には土塁の痕跡が認められない。太平寺に向かって尾根が延びるが自然地形のままであるため、城郭は山頂部のみである。<sup>(18)</sup>典型的な土豪の城郭であり、地域支配の拠点といえよう。日本海の展望が開けているため、海岸線の押さえとも考えられる。福屋氏の一族、神主氏の拠城と伝わる。

#### 龍ヶ城「りゅうがじょう」（第9図）

浜田市宇野町に位置する山城である。本明城の西方5kmの下府川沿いの尾根の先端を二重の堀切で遮断し城域としている。主郭から3段目までは削平も壁もしっかりしているが、それ以外は自然地形と区別できない。又、主郭にのみ堀切に面して土塁が築かれているため、山頂部と連続堀切は後の改修と考えられる。その改修が行われた時期は福屋氏の滅亡時と考えられる。城主は福屋氏の一族大家氏が伝わる。



第8図 神主城略測図  
(江津市二宮町、平成3年2月16日 作図 寺井 稔)